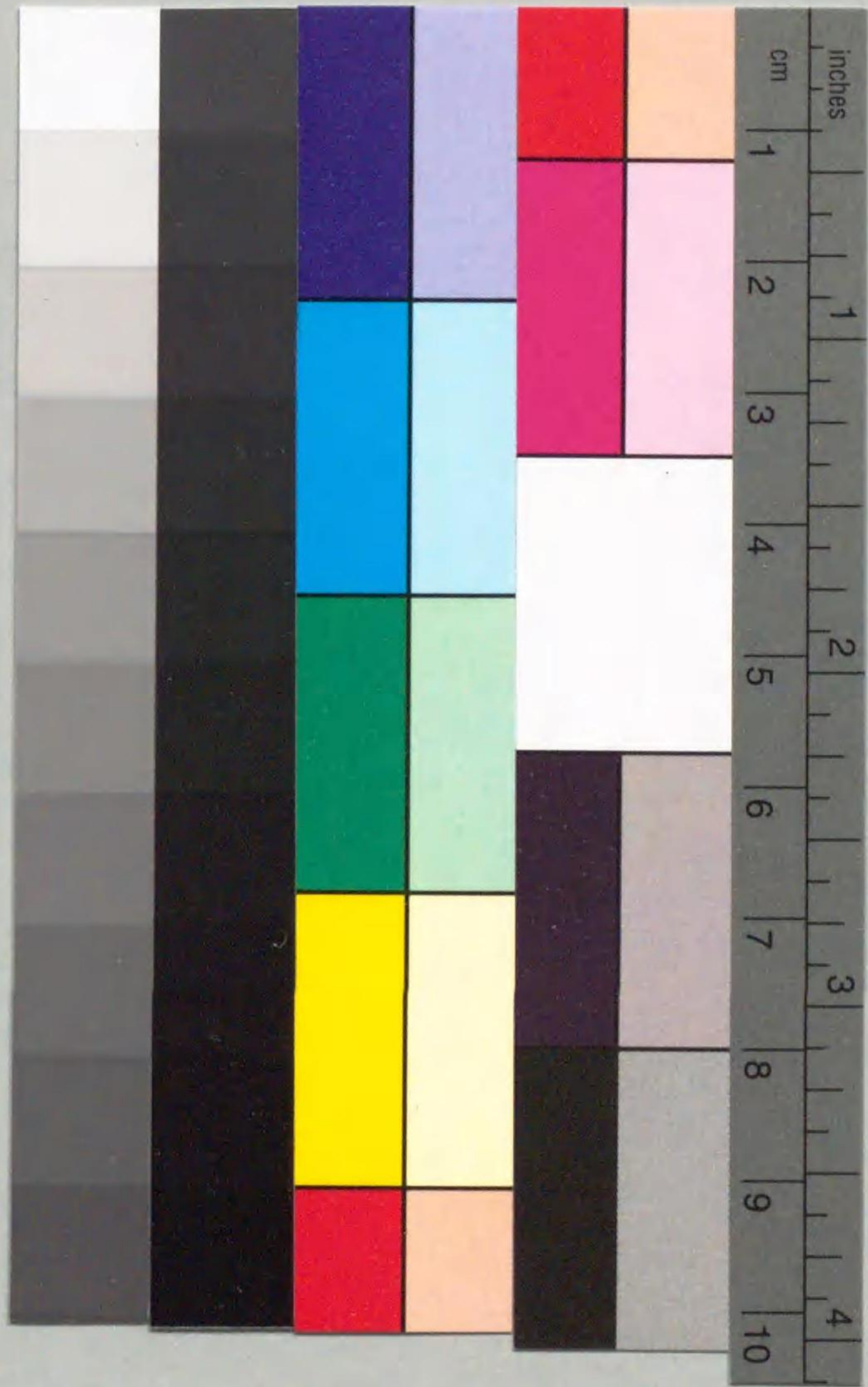
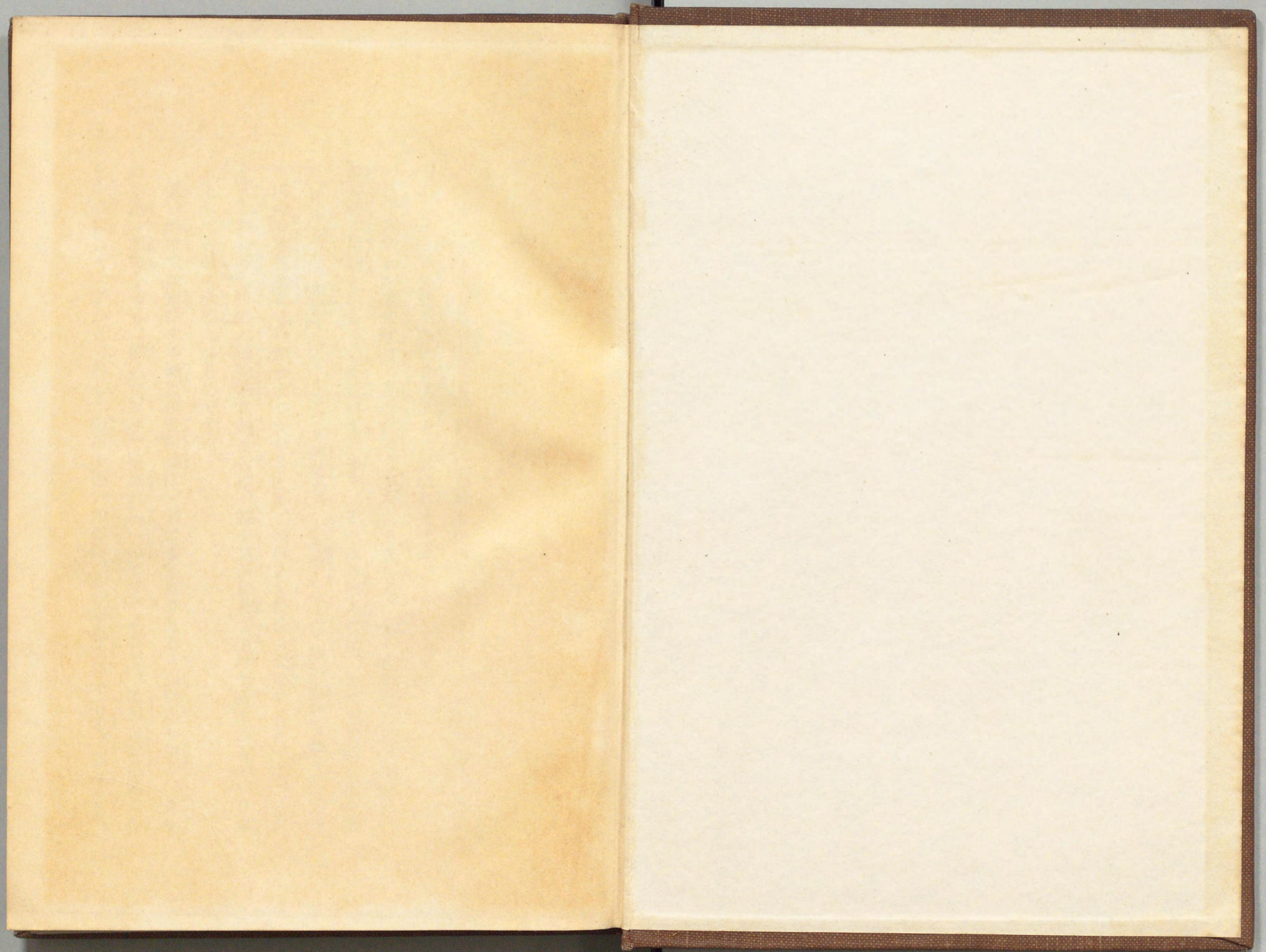


352
961





はしがき

國史は最も大切な科目です。國史はわれわれの祖先のことを書いたもので、これを知らないものは立派な日本人とは云はれません。

三千年のわが國史には、随分色々な事がありました。併しその事件の奥底には、常に日本精神といふものが流れてゐます。それは外國人には、とても真似の出來ない、いや正しく理解することさへも困難な、大和魂といふものが流れてゐるのです。

この日本精神をしっかりとつかむことが、われわれに最も大切なことです。それこそが、正しくわれ等々の心に植え付け、益々立派に育て上げて行くことが、日本人としての最も大切なつとめです。

併し學校でお習ひする國史の教科書は、あまり簡單でもあり面白味も少く、先生のお話は面白くても、聴いただけでは忘れ易いのです。それで、教科書にあることを中心にして、ずつとくわしく面白く書いたのが、この國史文庫十二冊であります。

併し學校でお習ひする國史の教科書は、あまり簡單でもあり面白味も少く、先生のお話は面白くても、聴いただけでは忘れ易いのです。それで、教科書にあることを中心にして、ずつとくわしく面白く書いたのが、この國史文庫十二冊であります。

36
N-7

は し が き

國史こくしに關くわんする讀物よみものは隨分ずぶん澤山たくさんあります。けれど、大抵たいていは英雄えいゆう豪傑かうけつの傳記でんきの類たぐひで、日本にっぽんの國史こくしをはじめから終おはりまで、詳くわしく面白おもしろく且かつ間違まちがひの無ない様やうに書かいたものは、まだあまり澤山たくさんありません。それでこの本ほんを書かくことにしました。全國ぜんこくの少年少女せうねんせうじよの皆みなさま、どうかこの文庫ぶんこによつて健全けんぜんな日本精神にっぽんせいしんを養やしなひ、立派りっぱな日本人にっぽんじんになつてお國くにのために盡つくして下ください。



著者ちやくしゃ

151590

目次

少年國史 江戸時代 (上) 目次

◇ 徳川家康

獨立出來 <small>どくりつでき</small> ない徳川氏 <small>とくがはし</small> ……………	一
子供 <small>こども</small> の人質 <small>ひとじち</small> ……………	三
先づ <small>まづ</small> 第一 <small>だいいち</small> の事業 <small>じげふ</small> ……………	七
三方 <small>みかた</small> ヶ原 <small>はら</small> の戦 <small>たたかひ</small> ……………	九
辛抱 <small>しんぼう</small> 強い人 <small>ひと</small> ……………	一三
征夷 <small>せいゐ</small> 大將軍 <small>たいしやうぐん</small> ……………	一五
大阪 <small>おほさか</small> を攻 <small>せ</small> める口實 <small>こうじつ</small> ……………	一七

落成式は中止……………二〇

問題の鐘の銘文……………二三

仲違ひさせるため……………二六

大阪城の戦備……………二八

大阪城總攻撃……………三一

五分五分の講和條件……………三四

再戦の準備……………三七

戦雲再び大阪を覆ふ……………三九

豊臣氏の滅亡……………四三

結構極まる日光……………四七

三人三様の性質……………五〇

◇徳川家光

幼時の家光……………五三

春日局……………五六

神様への誓ひ……………五九

三人で智仁勇……………六一

主君思ひの長四郎……………六四

江戸幕府……………六七

世の中の治め方……………六九

貧乏になる大名……………七三

威嚴を示した家光……………七六

◇外国との關係……………八〇

朝鮮・支那との關係……………八〇

國姓爺の忠烈……………八二

南洋に活躍した日本人 …… 八五

長政と彌兵衛 …… 八九

商賣がたき …… 九二

キリスト教の禁止 …… 九五

異國渡海の禁令 …… 九九

信者を嚴重に處罪 …… 一〇一

天草四郎の出現 …… 一〇四

騒動起る …… 一〇七

意外に盛な賊の勢 …… 一〇九

板倉重昌の奮戦 …… 一一二

鎖國令 …… 一二五

◇後光明天皇

朝廷と幕府 …… 一一九

天皇の御憤 …… 一二〇

皇室の御威光加はる …… 一二三

◇學問と産業

學問の奨勵 …… 一二七

將軍自ら講義 …… 一三〇

雪の中の教訓 …… 一三三

産業交通の進歩 …… 一三七

◇徳川光圀

光圀の剛膽 …… 一四三

古今無比の大事業 …… 一四四

光圀の勤王	………	一四七
西山の御隠居	………	一五〇

◇大石良雄

生類憐みの令	………	一五四
小鳥をとつても島流し	………	一五六
二十萬頭の犬小屋	………	一五八
赤穂義士	………	一六二
慾の深い爺	………	一六五
殿中の双傷	………	一六八
討入りの決心	………	一七〇
本望成就	………	一七三
その後の義士	………	一七六

間違つた學問	………	一八〇
小説と淨瑠璃	………	一八二
日本特有の藝術	………	一八五
天才と強勉	………	一八九
元祿風	………	一九三

◇元祿時代の文藝

〔目次畢〕

安倍川の石合戦	五
江戸城	一四
方廣寺鐘銘	二四
徳川家康	二六
大阪冬陣圖	三三
大阪夏陣圖	四〇
眞田幸村の奮戦	四二
大阪夏の陣	四四・四五
東照宮	四
春日局	五七
家光の像	六二
武家諸法度	七〇

挿繪目次

箱根の關所	七
大名行列	七・七
大名の江戸登城	七
開山神社	八
南洋の日本人町	八
山田長政の奉額	九〇
アダムス家康に謁見す	九
按針塚	九
キリスト教の制札	九
長崎出島	一〇〇
天草四郎の旗	一〇八
原城の圖	一一三
後水尾天皇	一二九
藤原惺窩と林羅山	一三八

光琳模様	………	一九三
元祿風俗	………	一九五

〔畢〕

忍岡の聖堂	………	一三二
貝原益軒	………	一三三
藤樹書院	………	一三六
並木道	………	一三八
宿場	………	一三九
徳川光圀	………	一四三
彰考館	………	一四五
元祿時代の舞踊	………	一六一
忠臣蔵	………	一六五
赤穂義士の墓	………	一七七
あやつり人形	………	一八四・一八五
近松門左衛門	………	一八六
芭蕉の書	………	一八八
探幽の繪	………	一九一

少年國史文庫

江戸時代(上)

徳川家康

徳川氏 ない 出来 独立

小さい時から苦勞して

慶長三年八月、前關白の豊臣秀吉が薨じた時に、諸大名の中で最も勢力のあつたのは徳川家康で、その次が前田利家でありました。併しその利家は間もなく亡くなりましたので、家康がひとり威權を振ふやうになつたのです。元來家康は生れつき頗る賢く、夙くから大志を抱いて居ましたが、急いで事を仕損じるよりも、落付いて確實に成功するといふ性質でありましたから、秀吉の生きてゐる間は全くこれに服従してゐました。けれども己に秀吉が死んで見ると、最早遠慮する處なく振舞ふやうになつて、私に他の大名達と結托して秀吉の遺言などは少しも守らず、遂に

關ヶ原の戦を起し、一舉に反對派のものを討ち破つて天下の政權を握るやうになり
ました。

家康の先祖はあまり明瞭でありません。新田義貞の先祖の義重の子義季の子孫だ
といふことになつてゐますが、確かな書き物が傳はつてゐないので。義季が上野
國徳川村に居たから徳川氏と稱したのださうです。して見ればこれは源氏の末流な
のですが、家康は一時藤原氏を名乗つてゐたこともありました。併し豊臣秀吉のや
うに身分の低いものでは無く、家康から八代の先祖親氏は、三河の國に住んで源氏
を稱してゐたことが確かであります。親氏から家康の父廣忠までを三河八代と云つ
て相當に勢力のある豪族であつたのであります。

家康の父廣忠は岡崎の城に居ましたが、尾張の織田信秀から度々攻められました
ので、駿河の今川義元にたよつてその援けを乞ひ、義元から三萬の兵を送られてや
つと信秀の軍を討ち退けたこともありました。織田氏も今川氏もどちらも強いので
間に挟まれた徳川氏はどちらか一方に従つてその援けを借らなければ、到底獨立し

て行くことは出来なかつたのです。併し一方に従ふと云つても、たゞ口先の約束だ
けでは信用がありませんから、最も大切な人質として先方へ送つて置くのが例
でした。それで廣忠もその子の竹千代、後の家康ですが、まだ六歳の可愛ざかりの
子を、今川氏の處に人質として送らなければならなかつたのです。かうして家康は
小さい時から随分苦勞をしたものであります。

子供の人質

不思議に珍らしい小鳥

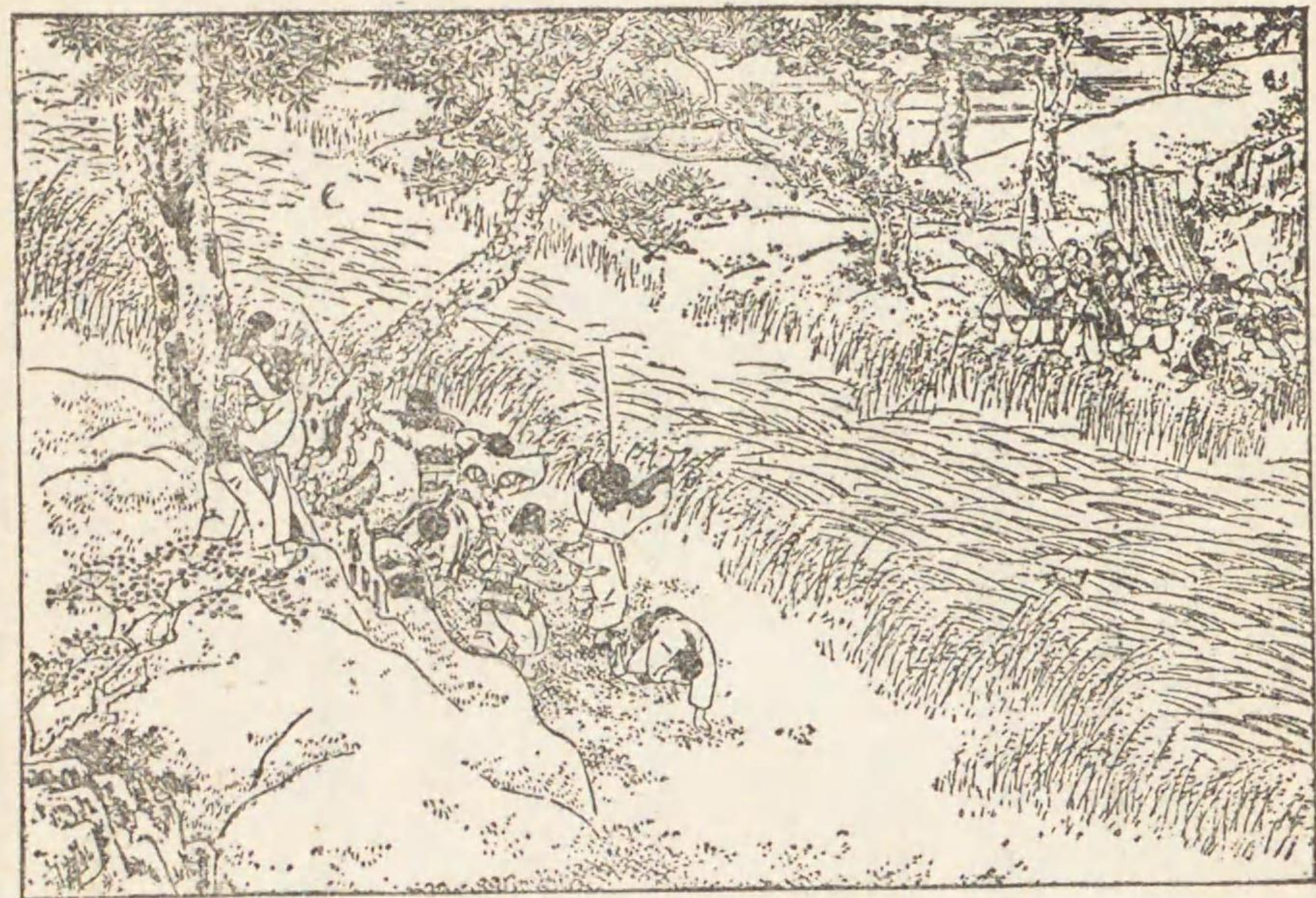
家康は天文十六年の十二月に、人質として今川義元の處へ送られることになりま
した。ところが戸田康光といふものが心を織田氏に寄せてゐましたので、潮見坂と
いふ處で家康を待ち受け、うまくだましてこれを船に乗せて、東へ行くやうな風を
して途中から船首を西に廻して、熱田に上陸させました。すると織田信秀はすぐに
兵を出してこれを迎へ、熱田神宮の神主さまの家につれて行きました。この時家康

の従者は二十八人居ましたが、もとよりどうすることも出来ず、みんな逐ひ返されてしまつたのです。家康はこの時六歳でした。

それから二年たつて家康の父の廣忠が死にましたので、岡崎城には主人が無いことになりました。そこで家臣どもが相談して、そつと織田氏と仲なほりして家康を返して貰はうとしました。それを聞いた今川義元は大に驚き、兵を發して織田信長の兄の信廣を安祥に攻め圍みました。信廣大に敗れて城が正に陥らんとしましたので、信廣の命と家康と交換することにして、遂に家康を今川氏に渡しました。

そこで家康は一旦國に歸りましたが、十日ばかりしてすぐ今川氏の處へ送られました。そして岡崎の城は今川義元の家來のものが鎮めることとなりましたので、徳川氏の領地は全く今川氏に取られたも同様となりました。かくて家康は八歳の時から八年間駿河の國に居たのであります。

家康は生れつき非常に賢く、而も圓々と肥つたほんつとに可愛い、坊ちゃんでした。その幼い時の話が色々傳へられてゐる中にこんな話があります。六歳の時名古屋に



あべ がつせん
安倍川の石合戦

家康が下男しもやうの背せに負おはれて、安倍川あべがわのほとりへ石合戦いしがひを見に行つてゐるところです。人数にんずが少くても一生懸命いっせいけんめいになつてゐる方が勝つと云つたそうです。十歳の時の五月五日ごごでありました。

囚とらはれて居た時、熱田あつたの神官しんくわんがおもちやにと思つて大層珍たいそうめづらしい小鳥こどりを献上けんじやうしました。この鳥とりは黒鶉くろつぐみと云つて鶯うぐいすの真似まねをしたり雀すずめの真似まねをしたり、色々な鳥いろくの鳴き聲なごゑを真似まねますので、近侍きんじのもの共どもはみんな珍めづらしがつてワイ〜と騒さわぎ喜んでゐました。家康いえやすはこれを見みてあまり喜よろこんだ風ふうもなく、やがて近侍きんじのものに「あの鳥とりは返かへしてやれ」と命めいじましたので、近侍きんじのも

のも不思議に思ひ、持つて来た神官もすつかり落膽して歸つて行きました。そのあとで家康は近侍のものに向つて「あの鳥は自分の鳴き聲が拙いから他の鳥の真似をするのだらうが、鶴は鶴の聲、雲雀は雲雀の聲をするので人に賞められるのだ。人間でもその通りで何でも自分の持ち前を立派にやつて行かなくてはいけない。人の真似をして、どんなことでも出来るやうな巧者なものは、實は何事も立派には出来ないものだ。」と語つたといふことです。六つになる子供がこんな高尚なことを云つたかどうか少しをかしい様にも思はれますが、こんな事實があつたのは嘘ではあるまいと思ひます。

それから駿河に居た時にも、阿部川の河原で子供の石合戦をしてゐるのを見て、人数の少ない方が勝つだらうと云つたら、果してその通りになつたといふやうな話もあります。これは皆さんもよく御存じの話だらうと思ひます。

先づ第一の事業

自分の領地をとり返すこと

家康は駿河に居る間、臨濟寺の雲齋といふ坊さんについて學問をしました。三つの歳に母に別れ、六つの時に父に死なれ、そして十年間も人質にやられたりして、あらゆる難儀をしたことが、又家康のためには尊い學問でもあつたのです。生れつきも賢明でしたが勉強も人一倍したものです。十六歳で漸く義元からゆるされて三河に歸り、岡崎城に入ることが出来ました。

この時昔の徳川氏の領地は、大部分人に取られてゐましたから、家康は先づこれを取り返すことを第一の事業と考へました。そして毎年のやうに兵を出して國內を鎮め、度々織田氏の部下とも戦ひました。そのうちに今川義元が大舉して織田信長を攻めることになりましたので、家康はその先鋒となつて戦つてゐましたが、義元が桶狭間の一戦に敗死し、その子の氏真があまり立派な人物でないことを見ますと

家康は斷然意を決して今川氏と手を切り、織田氏と手を握ることにしました。すると今川氏眞は度々家康を攻めて來ましたが、いつもよくこれを拒ぎ止め、遂には三河全國を悉く平げました。そこで家康はこの國をよく治めることに力を盡し更に武田信玄と力を合せて今川氏を攻め、遂に今川氏の領分である遠江をとつて大井川を境とし、自分は濱松の城に移りました。

その頃の英雄は誰でも京都に上つて、皇室を戴いて天下に號令しようといふことを最大の目的としてゐました。そこで織田信長は家康と仲よくして、家康に後方を守らせて置いて自分は京都に上らうとし、武田信玄は北條氏康と手を握り、これに後方をまかして置いて西に上らうと考へてゐました。ところが信玄の行手には信長が居ますし、信長と手を握つた家康が居ますから、先づこの家康を討ち滅ぼし、進んで信長をやつゝけて自分の目的を達しようと思へ、元龜二年に大兵を率ゐて遠江に入つて來ました。

これから度々兩軍は各地で戦ひましたが、翌年の十二月にいよいよ有名な三方ヶ

原の戦争となりました。この時信玄の兵四萬、本陣を三方ヶ原に置き、濱松の城下に迫つて民家に火をつけたりして戦を挑みました。家康は容易に動かなかつたので、最早かうなつては勘忍ならぬと、遂に八千の兵を率ゐて城を出で、三方ヶ原に向つたのであります。

三方ヶ原の戦

門を開いて大いびき

信玄はこの時兵を井伊谷に引きました。家康は三方ヶ原に出て、八千の兵を九隊に分ち、鳥居廣忠に敵情を偵察させますと、歸つて來ての報告に「信玄は今や再び進撃して來る模様で、とてもすばらしい勢ですから到底勝てないでせう。退却せられては如何です」と云ひます。更に渡部守綱に行かせますとこれも亦「早く軍を退いた方がよいです」といふ報告です。家康は大に怒つて「人がわが閨に入つて枕を蹴つても、まだ黙つて寝てゐる奴があるか」と、大久保彦左衛門等に命じて進撃さ

せ、やがて自分も一隊の兵を率ゐて敵陣に斬り込みました。

信玄の部下は家康に斬りまくられて逃げ退きました。信玄は不意に一隊の兵を家康の側面に出し、家康の兵が少し亂れたところへ全軍一時に鼓をならして攻めかかりましたので、家康の兵は散々に打ち破られて大混亂に陥りました。家康は齒をくひしぱり、口角泡を飛ばして叱咤しましたけれども、一度浮き足立つた兵は支へることが出来ず、多くの部将も討死して残兵も僅かとなりました。

こうなつてはさすがの家康も、到底叶はないと思つて、愈々自殺の決心をいたしました。そこへ濱松から夏目正吉が飛んで来て「勝つも負けるも時の運です。まだ最後の決心をなさる場合ではありません。さア早くお歸り下さい」と、家康の馬の首を南に向けて、槍の柄で馬の尻をウンと打ちますと、馬は驚いて、南に走りました。そこで家來のものに「早くついて歸つて主君をお護りせよ」と命じ、自分は槍をしごいて敵陣に突入し、從横無盡に突き立てなぎ立て、遂に花々しい戦死を遂げました。その間に家康は危く難をのがれて濱松城に歸りました。

家康が歸りますと、城兵は敗戦だと聞いて俄かに騒ぎ出しました。そこで家康は敵兵の首を一つ刀の先につきさして「信玄を討ち取つた」と大聲に呼び、漸く城兵を鎮めました。そこで城の門を閉めようと部下のものが申しますと、家康は「後れて歸るものもあらうから門は閉めないがよい。又敵に卑怯な風を見せるのもいけなし」と、城門を悉く開いてあかくと篝火をたかせ、ゆつくり夕食をすまして大いびきをかいて寝ました。

信玄は家康を追つかけて濱松城に迫りましたが、城門が悉く開いてゐるので、何處かに敵兵が居るかも知れないと思つて、うつかり攻めかゝることをせず、少し退いて陣を布きました。そこで家康は十六人の鐵砲隊を編成して、夜更けに敵の陣をめぐらして一斉射撃をやりましたので、信玄の兵大に亂れ、谷に落ちて死ぬるものも澤山ありました。信玄は感心して「家康の兵は何と強いのだらう。これは寧ろ仲直りして、共に力を協せて信長を討つた方がいゝ」と考へ、そのまゝ軍を引き返しました。

辛抱強い人

無理に天下をとらなくても

その後武田信玄は病死し、その子の勝頼は度々徳川氏を攻めましたが、長篠の戦に家康は信長の援けをかりて勝頼を走らせ、遂に武田氏を亡ぼして駿河の國を得、三國の領主となつて「海道一の弓取り」と稱せられるやうになりました。

その年の六月、信長に従つて京都に上り、和泉の堺浦に行つてゐた時本能寺の變を聞きしました。併し家康は從兵が極めて少かつたので、すぐ光秀を討つといふわけに行きません。そこで伊賀を通つて伊勢に出て、船で伊勢灣を乗り切つて三河に渡り、やつこのことで岡崎城に入り、早速兵を集めて上京しようと、熱田まで來ますと秀吉からの知らせに「もう明智光秀は亡ぼした」との事でしたから、家康は兵を返して更に甲斐から信濃の方を討ち從へ、次第に勢が強くなりました。

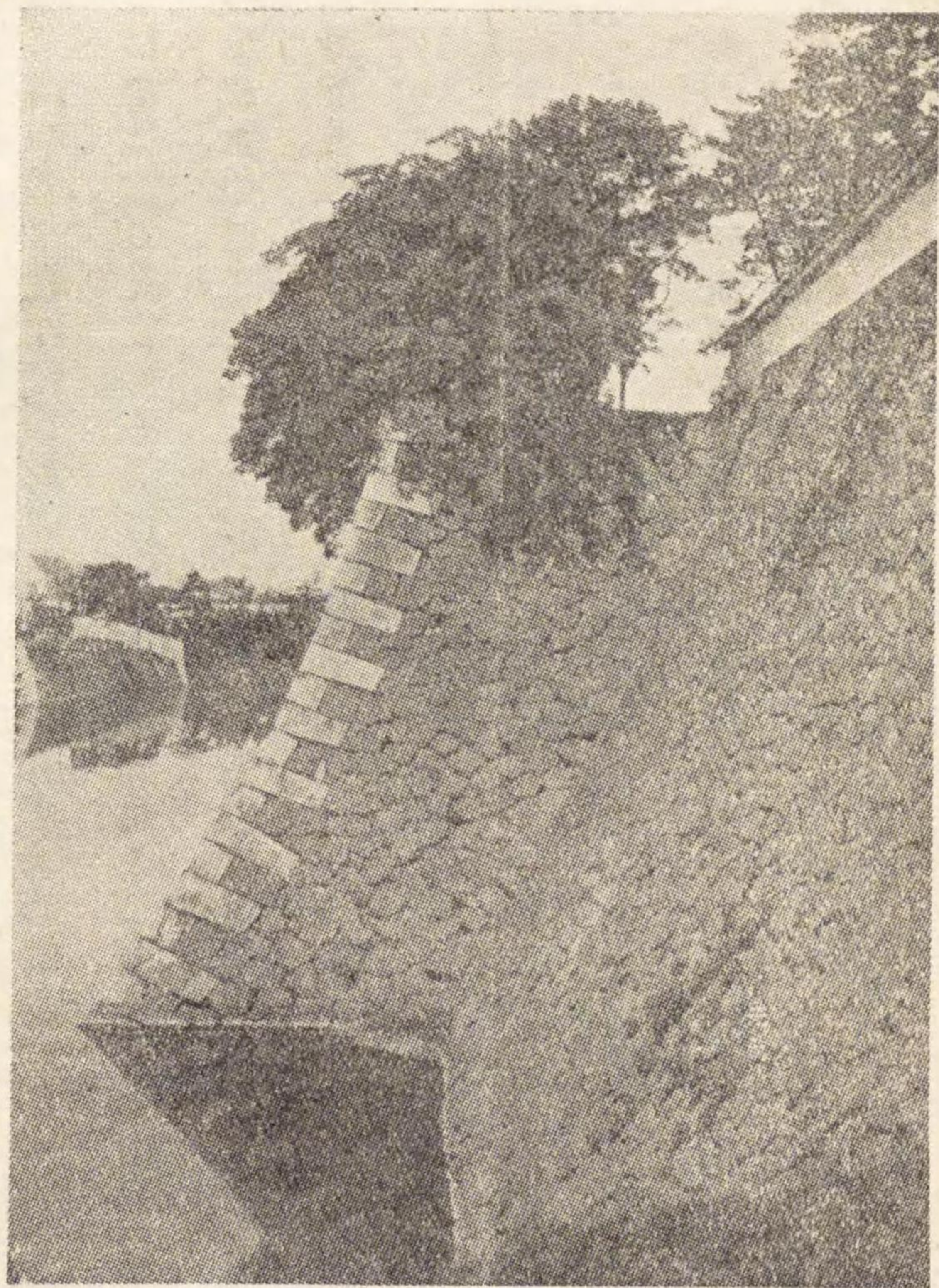
豊臣秀吉は光秀を亡ぼしてから勢が盛になりましたので、織田信雄はこれを嫌つ

て除かうと考へ、徳川家康と結託しました。そこで家康は小牧山に陣して秀吉と對抗しましたが、遂に大決戦に至らないで兩人は仲直りをしました。その後秀吉は家康に向つてしきりに京都に上るやうにすゝめましたが、家康は容易に承知しませんでした。併し秀吉がその妹を家康の妻とし、更に秀吉の母親をも人質として家康の處に送つて來ましたので、それほどまでにせられては家康も嫌と云へなくなつて、たうとう上京して秀吉に面會しました。

秀吉は大に喜んで、大そう家康を大切にしました。それで徳川氏の方では、決して秀吉に服屬したのでは無いと云つてゐましたが、實際は全く秀吉の下に服従したことになるのです。家康は非常に辛抱強い人でしたから、今秀吉と勢力争ひをして無理やりに天下をとらなくても、一時その部下となつて服従して居れば、そのうちには屹度秀吉にとつて代つて、天下を握ることが出来るに相違ないと考へたのでせう。

次で秀吉は大軍を發して北條氏を小田原に攻めました。この時家康は部下の諸將

を悉く率ゐて秀吉の軍に従ひました。そこで小田原が落城して北條氏が滅亡すると



江戸城

これは江戸城の本丸の石垣であります。高さは凡三十六米、濠の最も広いところは幅が百三十米もあります。今宮城となつてゐるのは、其の江戸城の一部であります。

秀吉は北條氏の領してゐた關東八州を家康に與へました。そこで家康は濱松を引き上げて江戸に移り、こゝを本據と定めたのです。

江戸の地は東に隅田川が流れ、南は灣にのぞみ、西は廣い武藏野の草原になつてゐました。そこに太田道灌が始めて城を築きましたが、勿論あまり大仕掛のものではありませんでした。あたりには水々した沼が廣がつて、蘆が生え繁つてゐたりしました。そこで家康は大工事を起して、高い處を削つて低い處を埋め、濠を掘つて悪水をぬき、掘り上げた泥で埋め立てをしてそこに市街を起し、一方には海から舟の入つて來るやうにして、交通を便利にし商業を開かせなどしました。

征夷大將軍

次第に握る天下の實權

次で朝鮮征伐が始まりましたが、家康は終始留守居をして國內を鎮める役をつとめました。その時秀吉は關白の職を養子の秀次に譲つてゐましたが、秀吉の子の秀頼が生れてからは、その母の淀君は秀頼をあとつぎにしようと考え、こゝに諸將は或は秀次に味方し或は秀頼の方につき、自然と二派に分れるやうになりました。と

ころが秀次は品行がわるくて遂に關白を廢せられ、高野山で切腹を申し付けられま
したので、これまで秀次に味方してゐた諸將は、ひそかに家康に心を寄せるやうに
なりました。それといふのも家康がしつかりした人物で、屹度將來は天下を取る人
だと考へたからであります。

秀吉が亡くなりますと、秀頼方の人々は、家康の勢のます／＼よくなるのが心配
でなくなりました。勿論家康は秀頼を大切にもし立て、何處までも豊臣氏に
服従するやうに云つて居ましたけれど、それは決して眞意でなかつたことがぼつぼ
つ事實の上にはあらはれて來ました。そこで今のうちに家康を除いてしまはねば、屹
度豊臣氏は亡ぼされるに相違ないと考へた人たちが、家康討伐の計畫をめぐらして
遂に關ヶ原の合戦となつたのです。

關ヶ原の戦争では豊臣氏の重臣、大老だの奉行だのといふ役についてゐた人た
ちは、大抵西軍に加擔して家康にそむいたのですが、それが負け戦となつたのですか
ら最早家康にたてつく程の人は無くなり、天下の政權は自ら家康の握る處となり、

家康の眼中には已に豊臣氏もなにも無くなりました。そこで家康は、戦後直ちに西
軍の諸將の領地を沒收して、これを東軍の諸將に分け與へ、親しいものと親しくな
いものとうまく交ぜ合せて全國に配置し、まるで將棋の駒でも動かすやうに、思
ふまゝに諸侯の位置を動かしてしまひました。當時から江戸に幕府を開くといふ下
心をもつてやつたといふことです。

併し家康は、天下のことを悉く思ふやうにしたとはいふものゝ、この時はまだ表
向きには豊臣氏を戴き、秀頼の命令によつて事をはこぶやうな風に見せかけねばな
りませんでした。そして慶長八年の二月に征夷大將軍に任ぜられて、その十月に江
戸に歸つて幕府をこゝに開いてから、始めて名實共に家康の天下となり、秀頼はそ
の部下の一大名に過ぎないことゝなりました。

大阪を攻める口實

目の上の瘤は豊臣氏

家康は將軍になつてから二年ばかりで、その職を子の秀忠に譲り、自分は駿府（今の静岡市）に隠居しましたが、實際はまだ政治の指圖をしてゐました。この時天下の大名百九十餘人で、概ね家康の恩威に服し何事もその命令を奉じ、悉く江戸に屋敷を置いて妻子を住ませ、江戸と自分の領國とを往つたり來たり、所謂參觀交代をいたしました。これは妻子を人質に置いたやうなもので、自分の領國にあつて徳川氏に叛かうと思へば、妻子を見殺しにしなければならぬことになるのです。

けれども豊臣氏ばかりは參觀しません。それは豊臣氏の家臣としても到底忍ぶことの出来ないことです。殊に秀頼の母は淀君と云つて、秀吉の正妻ではありませんでしたが、淺井長政の女で織田信長の姪にあたり、生れも立派である上に性質も負けず魂が強く、何としても徳川氏の下に頭を屈することを欲しませんでした。

大名の中にも、加藤清正・福島正則・池田輝政・淺野幸長・片桐且元など、何れも秀吉の舊恩を忘れてゐません。關ヶ原の戦には家康の方についても、それは石田三成に反對したまでのことで、決して秀頼に弓を引いたのでは無いのですから、ど

こまでも豊臣氏のために盡し、徳川との間をうまく調停して行かうと考へて色々骨を折つてゐました。

こんなわけですから家康にとつては、豊臣氏はほんとに目の上の瘤で、何時も氣にかゝつてたまらぬ邪魔ものでした。何とかしてこれを亡ぼさうと思つたのも無理はありません。家來の本多正信は、關ヶ原の戦の後で「今からすぐ大阪を攻めて、一思ひに豊臣氏を亡ぼしておしまひなさい」とすゝめたほどでしたが、辛抱強い家康は「急ぐには及ばない、そのうちに豊臣氏自らが亡びるやうになる」と云つて容易に動きませんでした。併し豊臣氏の勢力を弱くするやうに、色々工夫したのは勿論であります。

家康が將軍となつてから伏見に來た時、秀頼からは使をやつて贈り物などしました。秀忠が將軍となつた時は、秀頼にお喜びに來るやうにとすゝめましたが、これは淀君がどうしても承知しませんでした。こんなことで兩者の間柄には氣まづいことばかり多く重なりました。

そのうちに淺野長政・加藤清正・池田輝政・前田利長など、豊臣氏の重臣は相ついで亡くなりました。そして家康も六十餘歳になりましたので、どうかして生きてゐる間に早く豊臣氏を處分して置かうと思つて、何か大阪を征伐する口實の出來るのを待ちかまへてゐました。

落成式は中止

寢耳に水の大事件

始め秀吉は金の馬を數十個作つて大阪城に置きました。これは萬一の場合の戰爭の費用にあてるための金準備なのでした。家康はそれを知つてゐましたから、何角につけて豊臣氏にお金を使はせることのみ工夫しました。そこで前に秀吉の建てた方廣寺、即ち京都の大佛が慶長元年の地震でこわれましたので、これを再建するやうに淀君や秀頼にすゝめました。そこで秀頼は早速工事にかゝらせたのですが、その工事場から火事が起つてお寺をすつかり焼いてしまひました。それで更に再び

工事にかゝり、大阪城の金の馬を熔かしてその費用にあてました。

そのうちにお寺も建ち大佛も出來上りましたので、更に大きな鐘を鑄ることになりました。諸國の鑄師三千百餘人を集め、鞆百六十二を用ひ、六萬四千疋の銅をとかして高さ三米半、口の直徑二米六、厚さ二十七厘の巨鐘が出來ました。それが慶長十七年四月のことでありませう。

そこで八月にいよいよ落成式を擧げることになつて、家康の方とも色々相談して諸般の準備を進めました。天臺・眞言の僧侶各五百人も已に京都に集り、供養の餅や酒の準備も出來上り、萬端の用意も整つて、八月三日といふその日も間近に迫つた七月の末、家康の處から使が來て「鐘に彫りつけた文字に不都合のことがあるから、落成式は見合せろ」といふのです。

さア大變なことになりました。これほど大がかりな準備をして、京都の町中をあげての大混雜のところへ、急に儀式を差止めるなんて、常識では考へられないほどの大事件です。萬事の指圖をして居た片桐且元は寢耳に水のやうに驚き、京都所司

代の板倉勝重の處に行つて「鐘の文字にどの様なことがあらうとも、それは秀頼公の知られたことではありません。あれは僧清韓に命じて書かせたもので、私も無學ですからそのまま彫らせたまでですが、これは全く私の責任です。若し不都合があるなら切腹して申譯は立てます。併しなにしろかうして儀式の準備も整ひ、千名の僧侶も集り、公卿諸大名をはじめとして、數萬の民衆も集つてゐるのに、儀式を中止にするなどいふことはあまりです。兎に角儀式だけはすませて下さい。そうした上で鐘の文字は悉く削らせ、私も責任をとりましますから」と、言葉をつくして頼みましたけれど、家康からの命令だからと云つて、どうしても承知せず、たうとう儀式を中止させました。

問題の鐘の銘文

途方にくれた片桐且元

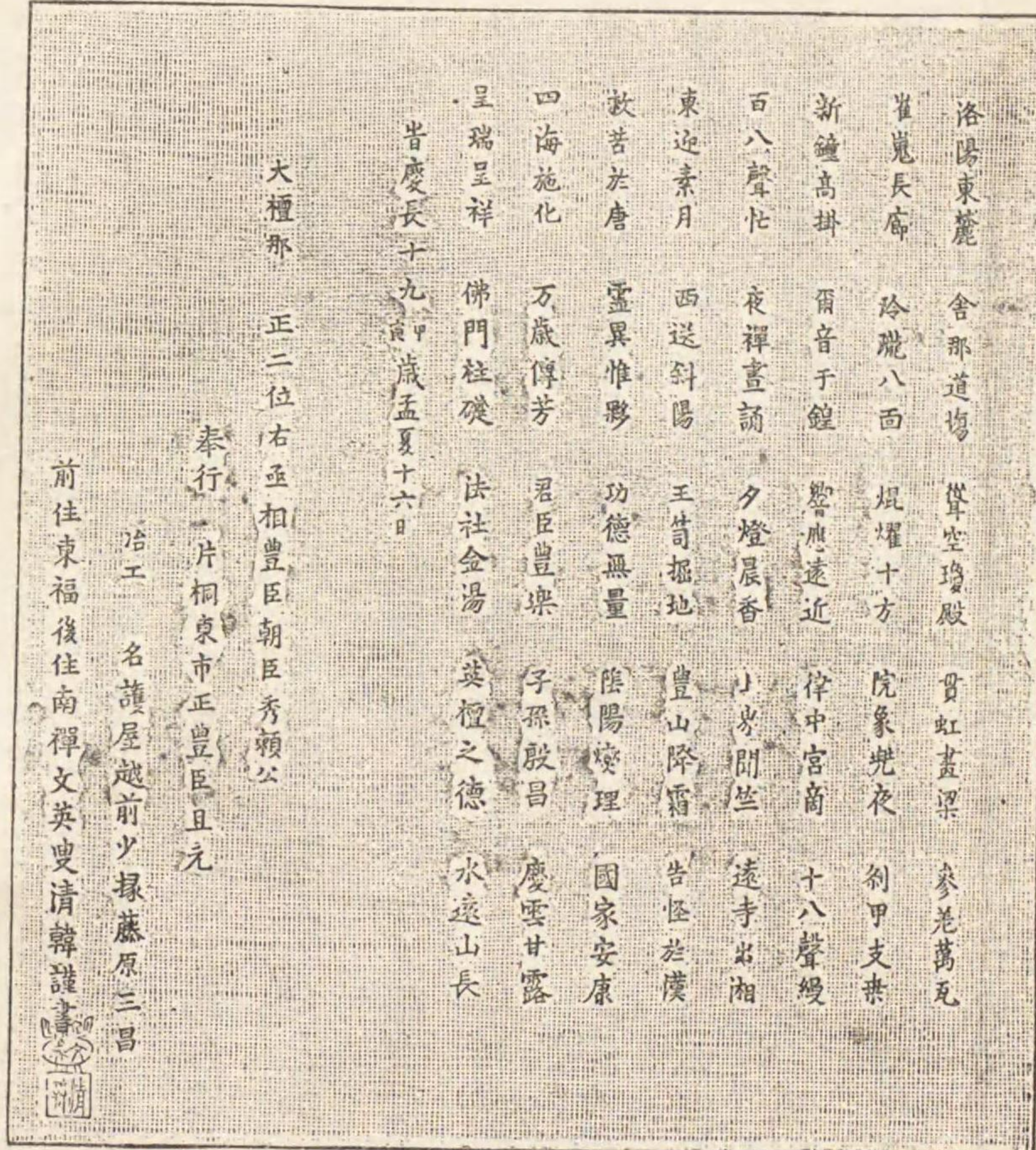
鐘に彫りつけた文字に不都合があるといふのは、右大臣家康のことを「右僕射源

朝臣家康公」として「射源」と讀ませるとか、「大釋迦・小釋迦・三重相關し互に主伴となる」と書いて家康と秀頼とが交るゝ天下の主となり家來となる意味をあらはしてゐるとか、「東に素月を迎へ西に斜陽を送る」とは關東を月に、大阪を日にたとへて豊臣氏が徳川氏よりも盛な意味をあらはしてゐるとか「國家安康」とあるのは家康といふ文字を入れて家康を呪ふのだとか「君臣豊樂、子孫殷富」とあるのは「豊臣を君として子孫の殷富を樂む」と讀ませる下心だとか、その外尙澤山屁理窟を並べ立てゝゐるのであります。

この文章は勿論不都合のものではありません。中々の名文であります。ほじくつて屁理窟をつけることにすればどんなことでも云はれます。清韓はえらい學者で文章家で、豊臣氏から可愛がられてゐましたから、五山の僧侶たちは常々これを妬んでゐました。そこで家康の御機嫌をとるつもりで、こんなことを申し立てたのです。それは清韓がお咎めを受けさへすればよいので、これが元となつて豊臣氏の滅亡にまでなるだらうとは、實は僧侶たちには夢にも想像の出來ないことでした。

且元はこれを聞きましたが、どうも家康の眞意がよく分りません。「どうせよと云はれるのか明瞭にお示し下さい」と云ひましたが、家康からははつきりしたことは云ひませんでした。たゞ家康の家來の本多正純が「秀頼公が大阪を去られたら、家康公もお心がとけるでせう」と云ひました。併し秀頼が大阪城を明け渡すなど云ふことは、到底出来ることではありませんから、且元も思案にくれて、遂に病氣になつて暫く駿府に滞留してゐました。

ところが家康は大それた事を思つて喜びました。何か事あれかしと



方 廣 寺 鐘 銘

方廣寺の鐘に彫り付けた文字は、長い文章であります。その最後にある銘といふのがこれです。六行目の最下の句をごらん下さい。

望んで居たの
 ですから、五
 山の僧の云ふ
 事が理窟に合
 ふと合はぬと
 は問題であり
 ません。従つ
 て清韓が一々
 云ひわけをし
 て説明しても
 それには一切

耳を傾けないで、豊臣氏を怒らせて事をあげさせる様にのみ仕向けました。

片桐且元は途方にくれて、自ら清韓を伴つて駿府に下りました。家康は且元に向つて「お前は文學の心得が無いのだから、鐘の文字については咎めはしない。わるいのは秀頼公だ、徳川家を呪ふばかりか、聞けば大阪城に浪人を集めて戦争の用意をしてゐるといふ。飛んでもないことだ。お前も秀頼公を大切と思ふなら、早く歸つて何とか方法を立て、徳川へ弓を引かないといふ證據を明かにしなければいけません」と云ひました。

仲違ひさせるため

思案にあまる且元の心配



徳川家康

且元の考へは、この際どんなにでもして家康の怒をしづめて、豊臣氏の安泰を計らねばならぬといふので、それが豊臣氏のためにも最もよい方法だと信じて居たのです。併し同じ豊臣氏の重臣の大野治長などは、この際兵を擧げて大阪城に據れば、西南日本の諸大名は、多く豊臣氏に加勢するに違ひないから、そうして一擧に家康を亡ぼしてしまふがよいといふ意見をもつてゐました。かうして豊臣氏の家來の中に意見の違つてゐるものがあるので、これをうまく利用して

仲違ひさせたら、それだけ豊臣氏を弱くするものと考へたのが家康です。そこで家康は且元に向つては、秀頼に對して非常にわるい感じを持つてゐて、大阪城でも明け渡さねば承知出來ぬやうな風に見せかけ、一方淀君に對しては全くこれと反對に見せかけたのです。

大阪では秀頼の母の淀君は、家康が非常に怒つてゐると聞いて、詫を云はせるために侍女の大藏卿と云つて、淀君の乳母で大野治長の母にあたる女と、今一人の女とを駿府に遣はしました。すると家康は二人の女を側近く召して「自分は秀頼を眞のわが子の様に思つてゐるのだから、何も憎むだの何だのといふことのある筈はない。たゞ大阪で浪士を集めたりして戦争の用意をしてゐるのはどうしたものか、多分これは淀君や秀頼の考ではあるまいから、あれを止めさへすれば、もうそれ以上何も問題は無いのだ」と云つて、鐘の文字のことなどは一言半句も云はず、方廣寺の落成式を止めさせたことは忘れてしまつたやうな顔をしてゐました。

二女は全く安心して西に歸りましたが、且元は遂に一度も家康に會ふことが出來

ず、たゞその家來の人たちからひどいことを聞かされて、煩悶懊惱、思案にあまる心配をかゝへてこれも駿府を去りました。すると近江の土山といふ所で二女と落ち合ひました。

二女は且元の旅館を訪ねて色々意見を書きました。且元は答へて「どうも家康公の命令は全く謎のやうで一向解釋がつきません。併し本多正純等の云ふところを聞くと、どうしても大阪城を明け渡せといふのですが、それはとても出来ることではありません。そこで他の大名と同じやうに、江戸に邸宅を設けて暫くそこへ秀頼公が行かれるか、それとも淀君は秀忠公の夫人の姉ですから、妹の處へ行くといい名義で一時江戸へ行かれるか、まあそれでもして家康公の怒を一應しづめて置いて、それから後のことはぼつ／＼計畫するが一番よい策でせう」と云ひました。

大阪城の戦備

家康の思ふつぼにはまる

二女はこれ聞いて不思議に思ひました。「自分達が家康に會つた時は、家康はそんなに怒つては居なかつた、事はわけもなく解決しそうな風であつたのに、今且元の云ふ處は、随分とひどい話で、秀頼を江戸に送るか淀君を送るかといふのは、結局淀君を江戸に送つて人質にして、それによつて家康に對して自分の手柄立をしようといふのであらう」と、その夜こつそり土山を發つて大急ぎで大阪に歸り、すぐに淀君に復命して「且元は大變な考をもつてゐます。あなたを江戸に送つて家康公の夫人にしようといふのです」と申しました。

淀君はこれ聞いて大に驚き怒り、すぐ大野治長に相談しました。治長は且元とは豫て意見が合はないのですから「それではすぐに且元を誅し、次で兵を擧げるがよいでせう」と答へました。そこへ且元は、そんなことは露知らず、京都で板倉勝重と打合せをしたりして、やつと大阪へ歸つて來ました。

且元は先づ頼に復命して、「この際色々の方法も考へて見ましたが、先づ淀君を江戸にお移り願ふが第一の上策でせう」と申しました。併し淀君の方では、もうち

やんと手筈が出来てゐました。且元を城中に呼び出して、これを刺し殺して直ちに兵を擧げようといふのです。そして淀君から「親しく相談したいから二十三日に登城せよ」と命じました。

併しこの謀を且元の處に告げ知らすものがありましたので、且元は病氣と稱して、何度使が来ても登城しません。そこで大野治長等は謀が漏れたと思つて、すぐ兵を出して且元の邸をとり圍まうとしましたが、それには反對する人もあり、且元も亦「決して秀頼公に對して叛くものではありません」と云つて、人質を出す約束までしましたので遂に、その領地を取り上げて、茨木城に追ひ拂ふことになりました。

そうしておいて城内では、直ちに戦争の準備にかゝりました。諸國に使を走らせて兵を招きましたので、關ヶ原の役で西軍に屬して、山の中に逃げ込んで居た連中などが續々と大阪に集つて來ました。併し有力な大名の中には一人も應ずるものはありませんでした。かうして大阪方が戦備をととのへるといふことは、家康にとつ

ては實に思ふつぼにはまつたものであります。家康は一日も早く大阪を攻めたかつたのですが、何もしない豊臣氏を攻めるわけには行きません。いよいよ大阪が兵を擧げたといふので、始めてこれを攻める口實が出来たので、家康はこればかり待つてゐたのであります。

大阪城總攻撃

二倍の兵でもとれない堅城

慶長十九年十月、大阪城は正に昂奮のるつぼと化しました。集る兵は九萬餘、砦を四方に築き、城を設けるやら濠を穿つやら、城壁や櫓を備へ、石垣を築き鹿柴を連ね、本丸・二の丸・三の丸をはじめ城外の各方面に至るまで、夫々に手分けをして五百人、八百人といふ風に、嚴重な戦備をかためて意氣正に天を衝くの有様でした。

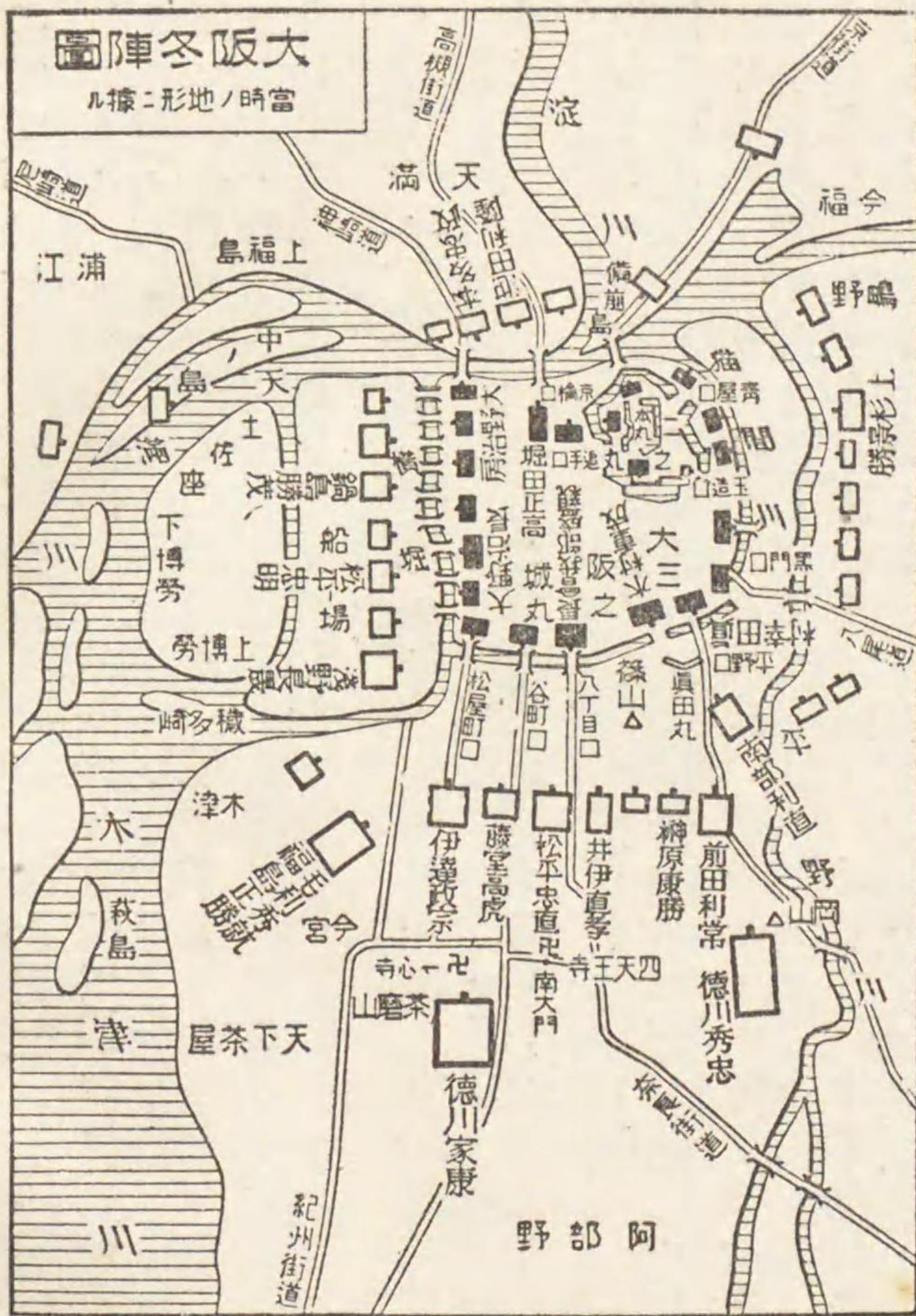
家康は駿府にあつて、早くから大阪征伐の決心をしてゐました。九月には先づ關

大阪では色々軍議をこらし、眞田幸村や後藤基次等は、早く兵を出して京都を占領し、宇治・瀬田で東軍を待ち受けるといふ策を立てましたが、大野治長等はこの反對して「この金城鐵壁の大坂城を守つて居れば、いくら敵が出て来ても恐れることは無い。折角城があるのに、その城をすて、野戦をやるのは不利益だ」と云つて、どうしても聞き入れませんでした。

十一月の中頃には東軍次第に大阪城に迫り、遂に總攻撃をはじめました。その兵數は凡そ二十萬、城兵に比べると正に二倍にあたります。併し城兵も必死の戦争ですから、中々容易には落ちません。前田利經は眞田丸に迫り、眞田幸村の兵と戦つて大に敗れ、井伊直孝等は八町目を攻めて大敗しました。

こんなわけですから家康も、部下に命じて輕はずみしないやうにし、秀忠から一擧に總攻撃を願つても中々ゆるしません。そして毎夜のやうに城に向つて一齊發砲して盛に威嚇しました。かうして家康は、成るべく兵士を殺さないやうにして、一方盛に敵に向つて降參をすゝめました。カづくで取らうと思つても、そうたやす

西の諸大名に、家康・秀忠に背かないといふ誓書を出させ、十月一日には大阪の戦備をかためてゐる様子もわかりましたので、江戸に命じて出征の準備にかゝらせました。そして先づ藤堂高虎等を先鋒として出發させ、十一日には自分も京都に向ひ



して徳川氏腹心の大名に働かせるやうにしました。

將軍秀忠も二十三日には兵五萬を率ゐて江戸を發しました。福島正則や加藤嘉明のやうな豊臣氏恩顧の大名は裏切つて大阪方につくかも知れませんが、一切出征を許さず、主と

くは取れないといふことを家康はよく知つて居たので、そして例の辛抱強さをあらはして、一旦仲直りをした上、うまくごまかして豊臣氏を滅ばさうなどと考へてゐました。

五分五分の講和條件

詐欺にかゝつた大阪方

攻撃軍と城内との間には、仲直りの相談で何度となく使が往つたり來たりしました。そうする間にも家康は攻撃の手をゆるめず、殊に鐵砲隊に命じて盛に天守閣をうたせましたので、城中の女どもはひどく恐れて、うろたへあわて、泣き叫ぶといふ有様に、淀君もたまらなくなつて、大野治長に命じて、秀頼に和睦をすゝめさせました。

そのうちに東軍は、多數の鑛夫をつれて來て、城壁の下に向つてトンネルを掘り進ませ、一舉に城壁を破壊しようとして試みました。このことを知つて淀君の方ではよく怖ぢ氣がついて、度々家康方と交渉して遂に十二月廿一日に仲直りの相談が纏りました。その條件といふのは、凡てを従前通りといふことにして、城内の兵士も所罰をしないこと、秀頼の領分も變更せず、淀君を江戸に行かせるといふこともせず、たゞ今後決して謀叛野心は起さないことといふのですから、どちらにも勝ち負けの無いほんとに五分五分の條件であつたと云つてよいのです。

併し家康は「兩軍が仲直りをした上は、再び戦争になるわけは無いのだから、大阪城の外濠は埋めたがよからう」と云ひました。このことは文書にかいた講和條件の上には更にあらはさないで、たゞ口先で云つただけです。こうして家康の方からごくあつさりと輕々しく申し入れたことですから、城内の方でも深く心に留めもしないで「いゝともいゝ」と云つた調子で承知してしまひました。

すると家康の命令によつて、二十二日には夫々手わけをして堀を埋めはじめました。何千といふ人夫が總がかりでやるので、見る間に外濠は全部埋もつて、更に内濠までも埋めにかゝりました。そこで秀頼も大に驚いて「内濠まで埋めるとは何事

か」と、その場へ行つて止めようとしても、命令だからと云つて中々已めません。すぐ奉行の本多正純の處へ使をやつて責めますと「それは相済みませんでした。命令を間違へたのでせうからすぐ已めさせます」と云ひます。已めたかと思つてみると、又すぐに埋めて居ます。そこで又本多正信の處へ抗議を申込みますと、「それはどうも不都合でした。正純が何か心得違ひしたのでせう。すぐ家康公に申し上げて已めさせますが、この二三日風をひいて寝てゐますから、そのうちよくなり次第すぐに運びますから」と云ひます。板倉勝重の處へ交渉しますと、「もう本多の病氣もよくなり、人夫は晝夜兼行でやりますので、たうとう内濠までも、全部埋めてしまひました。

それを見て家康は「こんなことをさせる積りでは無かつた。奉行の本多正純の心得違ひ不都合千萬だ」と云つて叱りつけましたが、その實はこれが家康の本心でやらせたことなのです。かうして全部の壕が埋もつたのを見た上で、秀忠は始めて兵

を引き上げたのでした。全く豊臣方は家康の大詐欺にかゝつたわけでありませぬ。

再戦の準備

油断のならぬ敵の間者

大阪城中ではいよく仲直りが出来たといふので、女子供などは大歡びでした。毎日毎夜鐵砲の彈丸が枕元近く飛んで來ては、寢ても寢てゐる心地がしなかつたのですから、平和になつた安心と喜びとは又一しほでした。暫くの間は祝賀の宴を開いたり、或はお茶の會を催したりして、打ちくつろいで楽しんでゐました。

ところで戦争のためには何一つも得る處が無かつたのですから、集つた將士に對しては充分な褒美を與へることも出来ませんでした。將士はそれが不平でした。これまで浪人して居たものなどは、賞與が目あてで集つたのですから、賞與が充分に貰へないでは全くあてが外れたわけです。「こんな筈では無かつた。あまり早く和睦するからいけないのだ。兎に角家康をやつつけて徳川の領地を奪ひ取つてしまはね

ば、充分な恩賞の貰へる筈はない」といふので、盛に再戦を主張しました。

そこで秀頼も意を決し、密かに再戦の準備を命じました。埋めた壕を又ほり返すやら、二重の柵をつくつて所々に門を設けるやら、一方では盛に浪士を募集しましたので、集りも集つたり、かれこれ十五萬といふ數に上りました。

秀頼は表面では徳川氏に好意を表し、正月には使を駿府にやつて家康に物を贈つたりしました。併し家康の方では秀頼に對して、大阪を引き上げて大和の郡山へ移るやうにと命じました。これは前の講和條約では、凡て從前通りといふことになつてゐたのですから全く家康の條約違反といふべきです。而も家康は、大阪で再戦の準備をしてゐると聞いて、再び西征の決心をかため、名古屋で親類の婚禮の式があるからそれに列席するのだと云つて、兵を率ゐて名古屋に向ひました。

大阪では大野治房をはじめ多くの大將が集つて、しきりに軍議をこらしてゐました。この度は前とは違つて外濠も埋もれてしまつてゐることですから、城にたてもつて防ぐといふことは非常に不利益です。そこで何とかして早く京都を占領し、

天然の要害を利用して防ぐがよいといふ議論が盛でしたが、ひとり小幡景憲のみはどうしてもこれに反對して、兎に角城にこもつて防戦することを主張しました。

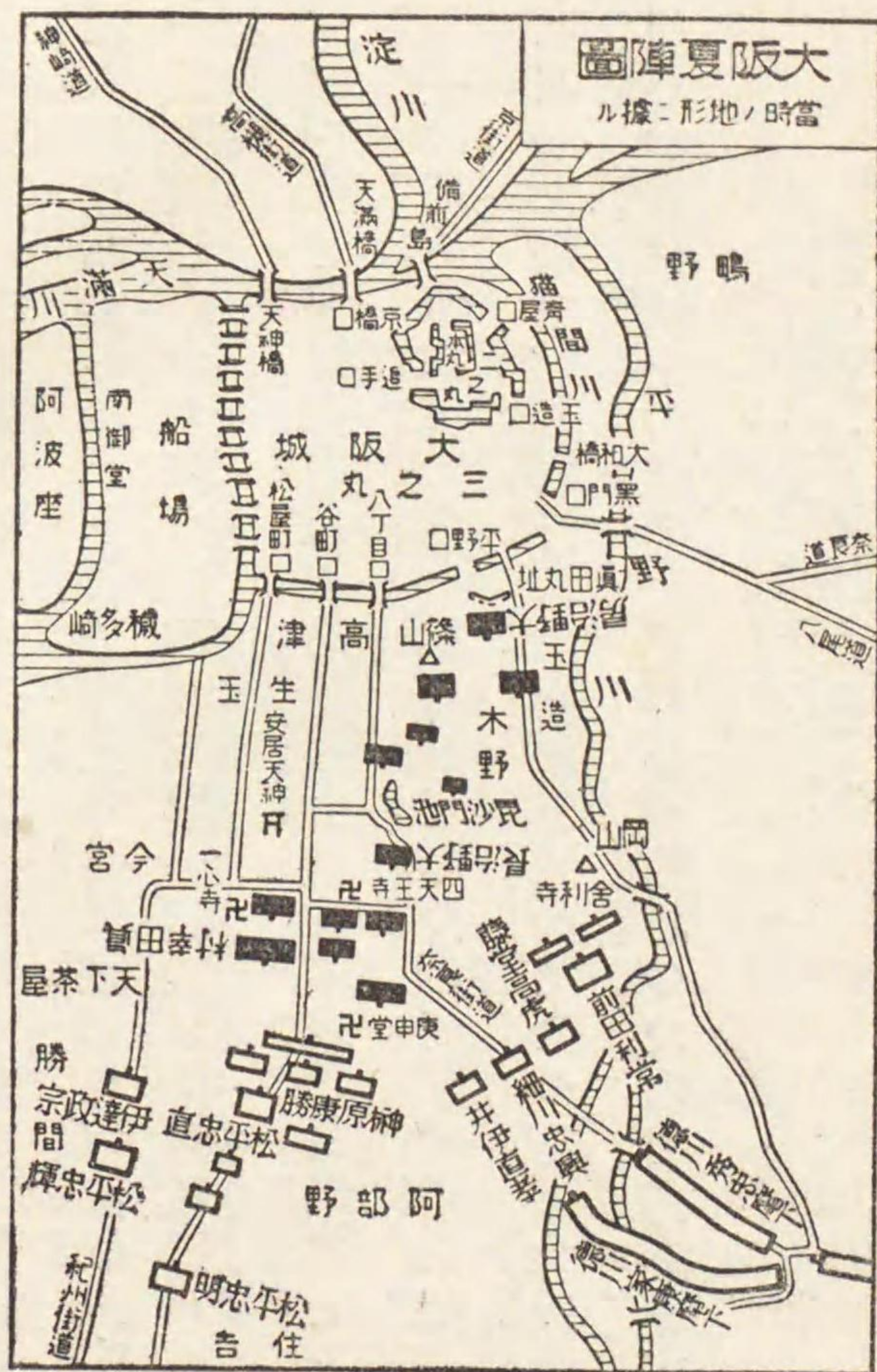
この景憲はもと徳川氏の家來であつたのですが、失敗があつたために追ひ出されて浪人してゐました。そして秀頼の召に應じて大阪城へ來たのですが、その實はひそかに徳川氏に心を寄せ、板倉勝重と相談して徳川氏のために間者となつてゐたのです。それですら出來るだけ豊臣氏に不利益な様なことばかり主張し、そしてその様子は残らず家康の方へ知らせてゐたのです。併し間もなくそのことがわかりそのうになつたので、知れたら大變だと思つてこつそり大阪を脱け出して伏見に走り、徳川方の人に城中の様子をくわしく物語つたのであります。

戦雲再び大阪を覆ふ

名將も相次て戦死

慶長二十四年四月、戦雲は再び大阪の空を重苦しくも覆ひました。前の戦争が冬

に行はれたので大阪冬の陣、そして今度のが夏ですから、大阪夏の陣と云つてゐます。この兩度の戦争は全く豊臣氏の滅亡を早めたもので、その實家康に誘はれて起



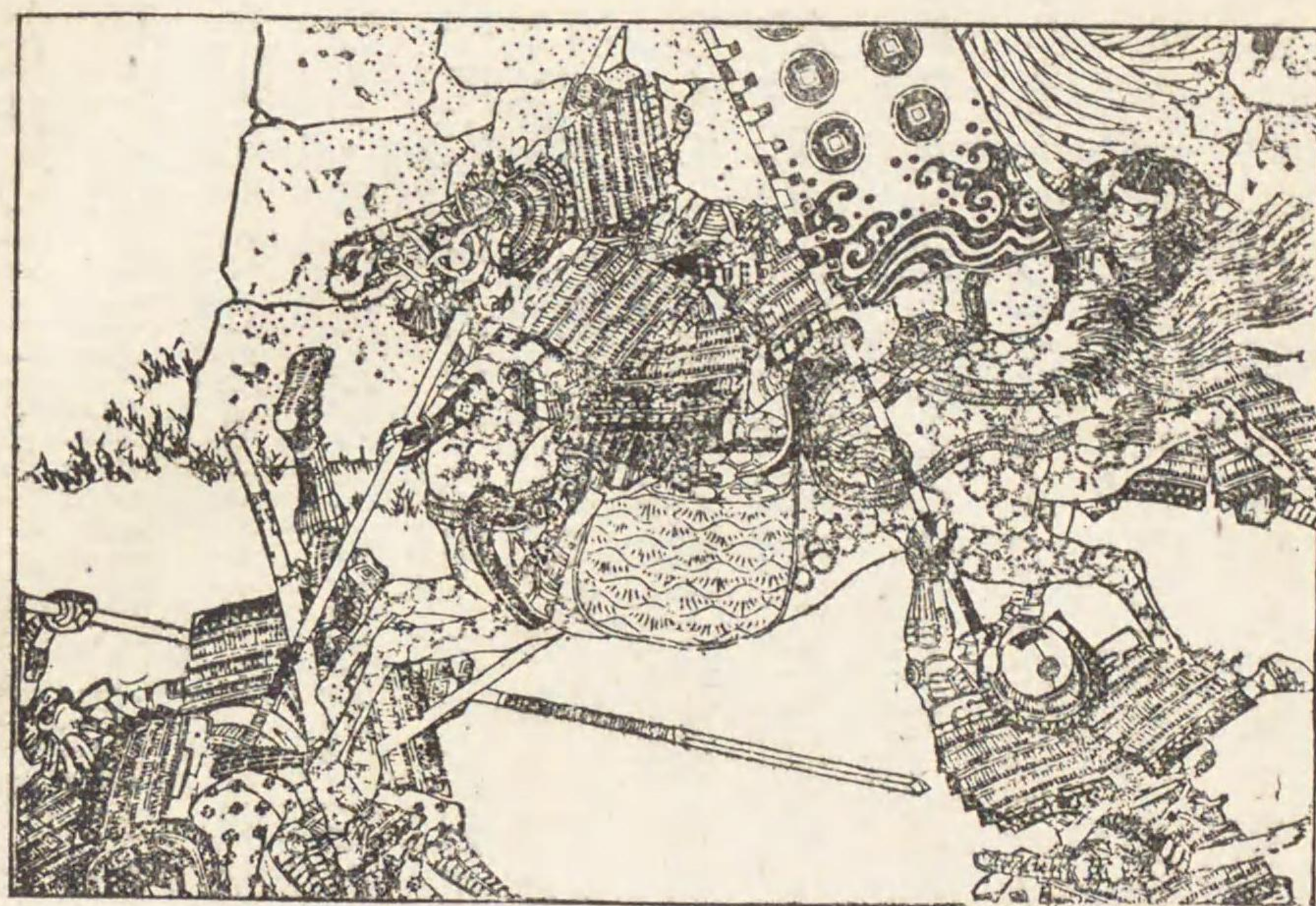
つたものであります。若し片桐且元の考へてゐたやうに、一時徳川氏の前に膝を屈したらこんな戦争も起らないで、豊臣氏もつと長く續いたかも知れませんが、併し屈辱を蒙つて長く續くか、潔よく反

て居なかつたのです。

再戦と決した大阪方では、家康に對して「大阪城の空け渡しはお断りです」と明瞭に拒絶を申し送りしました。家康はこれに答へて「大阪では尙盛に浪人を抱へて戦備をととのへてゐるとの事だが、それは豊臣氏長久の策ではない。どうか秀頼母子は一度大阪を去つて郡山に移り、以て疑をはらすべきである。そうすれば後日必ず再び大阪へ歸してやるから」と使のものに云ひました。併しそれは家康の本心ではなくて、その實は大阪で兵を擧げるのを待ちまうけてゐたのであります。

大阪城中には後藤基次・木村重成・真田幸村などといふ名將も澤山居ましたが、これ等を統率するしつかりした人物が居なかつたため、兎角議論ばかり多くて物事のきまりがつかまませんでした。ごたく／＼してゐるうちに家康は京都に乗り込み、秀忠も亦大軍を率ゐて江戸を發し、京都に来て家康と相談して、全軍を二分して一は北から、一は大和へ迂回して城の南方から攻めることに決しました。總勢約十五萬です。

大阪ではいよいよ東兵が攻めて来ると聞いて、夫々手わけをして用意をととのへ



真田幸村の奮戦

十六歳のわが子大助が、共に死にたいと云つたのを叱り付けて城に歸し、血戦して遂に死にました。その時四十六歳でした。

ました。この前の戦には始めから籠城したのですが、この度は壕も埋められたりしてゐることですから、籠城は不利益だと考へて、河内・大和の兩方面に兵を出して防戦につとめました。そのうちに大將の中に、裏切つて家康方へつくものがあつたり、大野治長を刺し殺さうとするものがあつたりしたので、諸將は互に相疑ふやうになつて一致協力が出来ません。後藤基次

は大和口に出て東軍を迎へ戦ひ、大に敵を敗りましたが、衆寡敵せずして遂に戦死し、木村重成は河内口の敵を迎へて戦ひましたが、これも亦敗れて戦死しました。真田幸村も亦茶臼山に陣して大に戦ひ、遂に花々しく戦死しました。

豊臣氏の滅亡

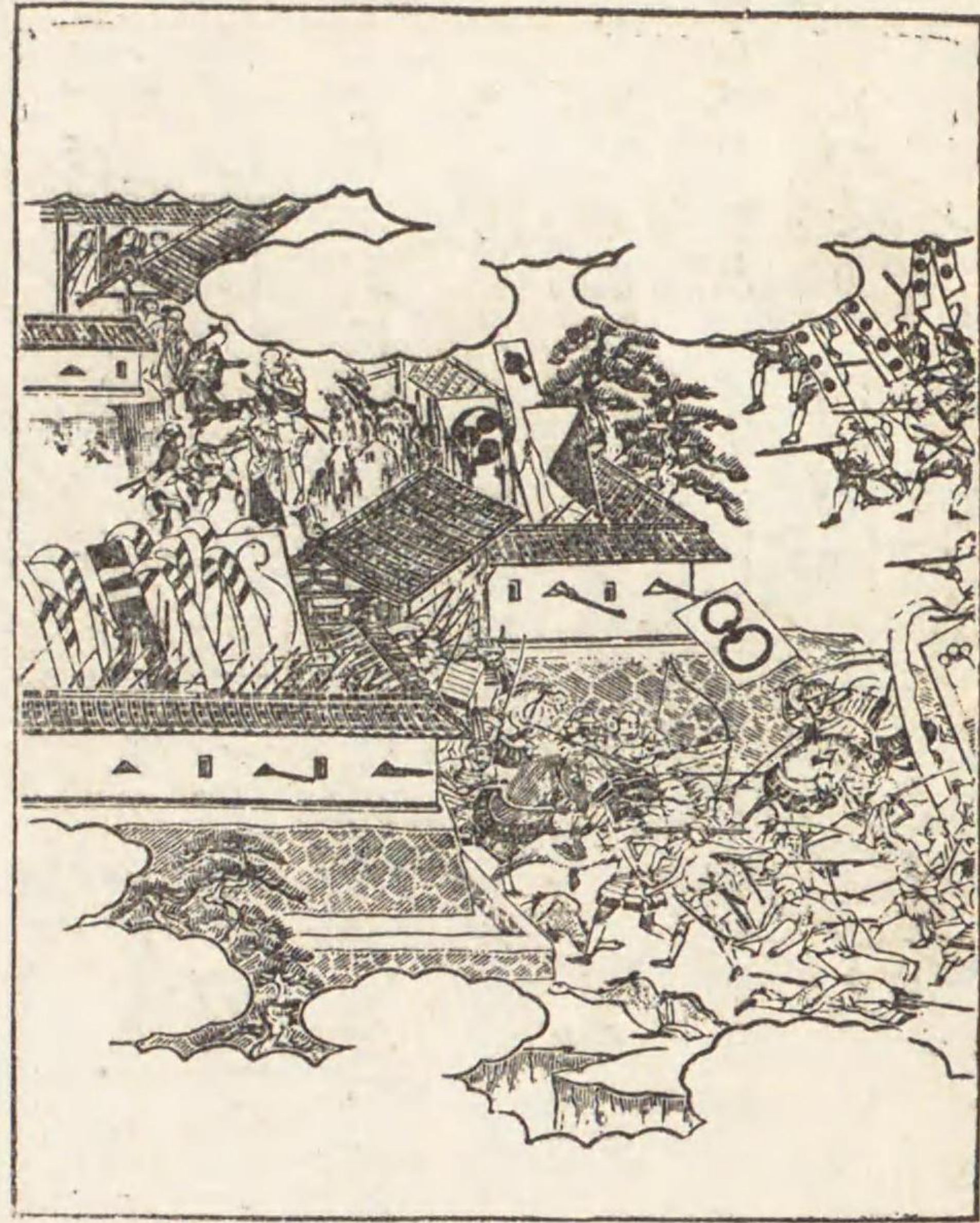
あてにならぬ傳説

大阪方の兵は何れも勇敢に戦ひましたが、雲霞の如く寄せ来る東軍には遂に敵せず、士卒大半は戦死してしまつて、残兵は城中に逃げ歸つて来ました。そこで徳川の軍は、ぢり／＼と攻め寄せて、遂に大阪城を十重二十重に取り、圍んだのであります。

初め秀頼は真田幸村のすゝめによつて、自ら天王寺口に出て決戦しようと思つて本丸の正門の處に出て様子を見てゐましたが、その時家康から仲直りの相談をもちかけて来ました。勿論これは城兵の心を亂すためであつたのですが、果して城兵の

りません。忽ち煙は天を蔽ひ、焰は地に満ち、城内は云ふに云はれぬ混亂に陥りました。

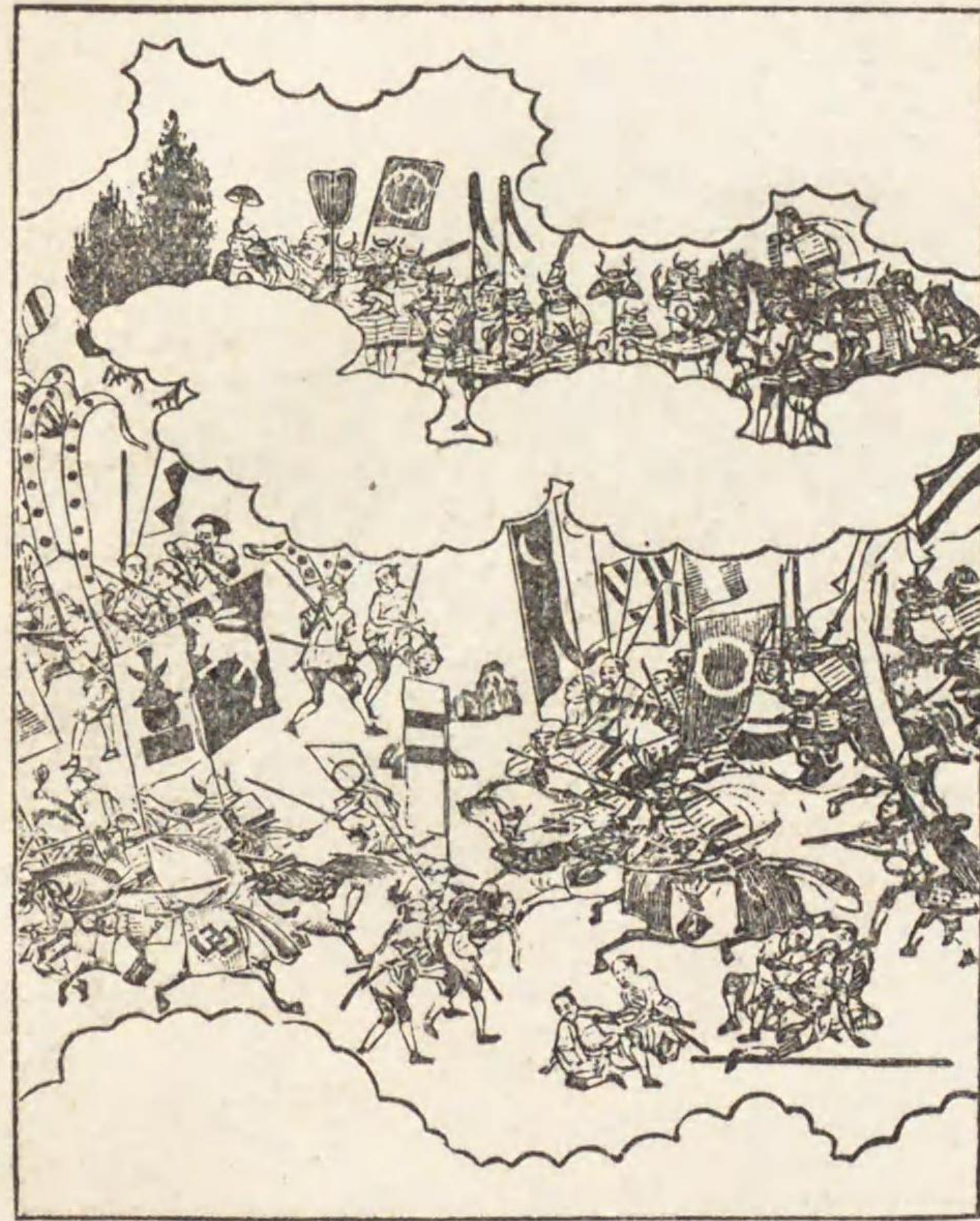
東軍はこれを見て大に勢を得、争ひ進んで城壁に迫り、三の丸の柵を越えて進み、所々に放火しましたので二の丸も亦陥りました。秀頼は最早これまでと思つて



大阪夏
元和元年五月、大阪落城前の城門の門外
裸體のものもあり、鐵砲も盛に用ひられ

極力止めるものがあつて果しませんでした。そのうちに臺所頭の大隅某といふものが心を東軍に通じ、臺所へ火をつけましたので火の手がパツと上りました。そこへ暴風が起つたのですからたま

中には仲直りに賛成するものが出来、若し秀頼が城を出て戦ふならば、その留守に城へ火をつけようといふやうな相談をするものがありましたので、秀頼も急に出て行くことが出来ませんで暫く出馬を延してゐました。



の陣

をあらはしたもので、甲冑をつけない半
てゐます。

ひました。これを見た城兵どもは、戦争に負けて負傷したのだらうと思つて大に驚きました。そのうちに天王寺方面敗戦の知らせがありましたので、秀頼もいよく決心して城を出ようと思つて

母の淀君と共に天守閣で切腹するつもりでしたが、家來のものがこれを止めて、火をよけて山里の倉庫に逃げさせ、一方家康の所に使をやつて、秀頼母子の命をたすけて貰ふやうに願ひ出ました。家康は勿論これをゆるす考はありませんでしたが一應承知したやうに云つて、而もその使のものに酒を飲ませて城内へ歸しませんでした。

大野治長等も、遂に事の成らないのを見て、秀頼にすゝめて切腹させ、萩野は淀君を刺し殺し、治長等以下三十餘人の男女悉く自殺して果てました。五月八日のことです。野には軍兵の矢叫びの音絶えず、城内にはなほメリ／＼と焼け落ちる音の聞えて、ほんとに物凄い景色でした。

この時秀頼は二十三歳でした。秀吉が太政大臣になつてから三十一年ぶりです。そして豊臣氏は全く滅亡して、その血統は絶えてしまつたのであります。世には秀頼がこつそり逃げて薩摩に行つたといふやうな噂もあつて、鹿兒島の方にもそんな傳説が残つてゐますが、これは義経が蒙古へ逃げたといふ話と同様、全くあてには

なりません。

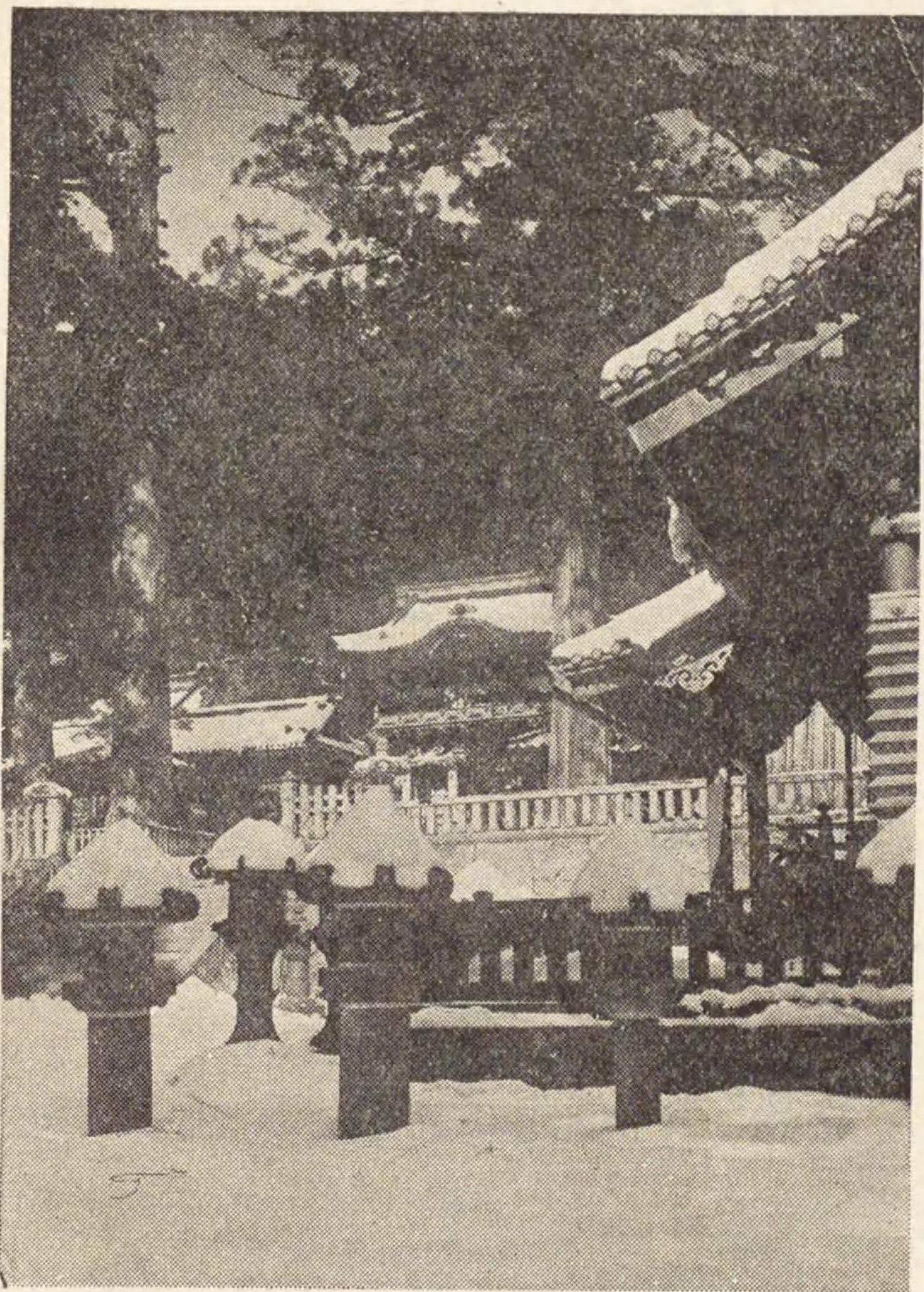
結構極まる日光

錦繪のやうな美しさ

大阪落城の年七月に年號は元和と改まりました。應仁の亂からこの方、亂れに亂れた天下はこゝに全く治まり、これから以後久しく天下は無事で、萬民が泰平を樂しむに至りましたので、世にこれを元和偃武と云ひます。元和の年に戦争が止んだといふ意味です。

家康は天下の諸侯に命じて、領内の諸壘を毀ち、一國に一城を限つて残させることにしました。又諸道に巡檢使といふものを遣はして、政治のよしあしや人民の生活状態を見て廻らせることとし、その外色々の法律を作つたり制度を定めたりして、幕府の基礎を固くすることにとめました。將軍職は秀忠に譲つても、實際の政治は殆ど家康の手でさばいてゐたのであります。

元和二年正月、家康は田中に狩に行つてから病氣にかゝり、頗る重態となりました。醫師よ薬よと色々々に手をつくしましたが、四月十七日になつて遂に薨去しま



東照宮
正面が陽明門です。間口は七米六、高さ十一米二、十二本の柱は凡て檜の丸柱、天井には狩野探幽の龍の繪があります。

した。年が七十五で
朝廷で
は薨去
の前に
特に家
康を太
政大臣

に拜せられ、翌年三月には正一位を贈られました。

遺骸ははじめ久能山に葬りましたが、翌年更に日光山に改葬しました。そして久能山と日光とに社廟を建立し、後に朝廷から東照宮といふ宮號を賜りました。日光山の社殿は後に家光の時に大改造が行はれて、結構雄大壯麗を極め、世に「日光を見ない内は結構と云ふな」とまで云はれる様になりました。その正面の陽明門は、間口が七米六、高さ十一米二、四方唐破風造で、十二本の柱は凡て檜の丸柱、天井には狩野探幽の筆になる龍の繪があり、長押しには極めて細かく美しい彫刻が澤山あつて、之を見てゐる間に日が暮れると云ふので、俗に日暮し門と云はれる位です。その外鐘樓、鼓樓、唐門から本殿に至るまで、數知れぬ多くの建物、その何れもが赤い漆塗に金金具付ですから、絢爛目を奪ふといふ有様、それが深緑の杉の葉かげに見えかくれる様は、實に錦繪を繰り廣げるやうです。そして前には大谷川の清流、後には雄大な男體山、それに無数の瀧があり、中禪寺湖も湛へてゐるので、天然の景色と人工の美とが相應じて、天下第一の名所となり、今日に至つても外國人のお客様など、先づ第一にこゝへ案内するといふ様なことになつてゐるのであり

ます。

三人三様の性質

牛のやうにあつた家康

家康は誠に辛抱強く用心深い人でした。物事を周到に考へて手落ちの無いやうにし、熟慮の上で断行するといふ風で、而も大きな度量があり、権謀機略にも富んでゐました。その遺訓は次のやうで、よく家康の性格があらはれてゐます。

人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くがごとし、いそぐべからず。不自由を常とおもへば不足なし。こゝろに望起らば困窮したる時を思ひ出すべし。勘忍は無事長久の基、いかりは敵とおもへ。勝つ事ばかり知つて負けることをしらざれば害その身にいたる。おのれを責めて人をせむるな。及ばざるは過ぎたるよりまさされり。

人はたゞ身のほどを知れ草の葉の

露もおもきは落つるものかな

こんな性質でしたから、統一された天下を整頓して、おつと持ちこたへて行くには最も適當してゐました。信長と秀吉と家康とは、三人が殆ど同じ時代の人で、信長が先づ亂れた天下を統一するの基礎をつくり、秀吉がこれを大成し、家康が整頓して子孫に傳へました。信長は最も勇猛で向ふ見ずの人、秀吉は全身智慧の固まりと云つてもよい程の人、そして家康は忍耐力の最も強い人でした。信長は虎の如く勇敢で、秀吉は犬の如く賢く、家康は牛のやうに辛抱強くあつたと云つてもよいでせう。時鳥といふ鳥は中々鳴かない鳥だといふことですが、この鳥を三人に贈つたとしたら、

なかぬなら殺してしまへほとゝぎす 織田信長

なかずとも鳴かして見ようほとゝぎす 豊臣秀吉

なかぬなら鳴くまで待たうほとゝぎす 徳川家康

とでもいつただらうと昔の人が云つてゐます。それは三人の性質を最もうまく表は

してゐると思はれます。

かくて徳川二百六十餘年の泰平は、家康によつてその基を定められました。源頼朝を崇拜してその真似をしようとした家康は、頼朝よりもずっと立派に仕遂げたわけでありませぬ。朝廷をよそにして天下の政治を私したのは不都合ですけれど、亂れた天下を統一して立派に治め、人民の實力を養つた點は偉大な功績と云はねばなりません。

徳川家光

幼時の家光

褒められ損なつた國千代

徳川家康が死んだ時に、子の秀忠は已に三十八歳で、將軍となつてから十二年を経た。そして孫の家光も十三になつてゐたので、家康にとつては後のことは少しも心配すること無く、安心して瞑目したことでせう。秀忠は家康の死後八年間その職にあつて、よく政治をばげみましたが、子の家光に譲つてから後、やはり政治の監督をして、新將軍に政治を見習はせました。昔は朝廷に院政といつて、天皇の御位をお譲りになつた後、上皇が院中で政治をおさばきになつたことがありましたが、家康も秀忠もこれに似た様なことをしました。そして將軍の隠居したの

を「大御所様」と云つてゐました。
 秀忠は極めて謹厳な眞面目一方の人でした。そして三代目の家光は極めて聰明な生れつきで、その上名臣賢相が澤山居ましたので、徳川幕府の基礎はいよく堅固になつたのであります。

家光は幼名を竹千代と云つてゐましたが、その弟に國千代といふのがありました。國千代も非常に賢い生れ付きであつたので、母はどちらかと云へば竹千代よりも國千代を愛し、家來のものも國千代の方に心を寄せて、これを後つぎにしたらと考へるものが澤山ゐました。

そこで家康は或時江戸城に立ち寄つて、二人の孫に會ひたいからと云つて連れて來させ、竹千代に向つて「これへ〜」と云つて手をとつて上段の間に坐らせ、國千代も一しよに走り寄るのを押し止めて「いや〜勿體ない、お前はそこでよい」と云つて下段に坐らせ、菓子などを與へるにも先づ竹千代に與へて、それから「國千代にも」と云つて殊更に區別をつけました。竹千代は行末天下を統御する身分で

すから、國千代とは遙かに尊卑の別があるといふことを家來どもに見せたのであります。

又或時國千代が鐵砲で鴨を打ち止めて母の處に持つて來ました。母は非常に喜んで「こんな鐵砲が上手になりました」と云つて秀忠に對して大に自慢し、これを料理にして酒をすゝめました。秀忠も喜んで箸をとりましたが「この鴨は何處で打つたか」と尋ねますと「お城の西の湍で」とその時の様子を詳しく話すのを聞いて、急に箸を投げて頗る不機嫌に「誰がそんなことをさせたのぢや。仰もこのお城はお父上の築かせられて我に賜はつたもの。そしてやがては竹千代に譲るべき城であるのに、國千代の身分としてお城に向つて鐵砲を放つとは、天道に背き不都合千萬なこと、竹千代に聞かせてもよくない話だ」と云つて、そのまゝ座を立つてしまひました。そして國千代の御付きの者は所罰されたのです。これも竹千代に威嚴をつけるための秀忠の心づかひだつたのでせう。

春日局

誠心誠意の賢婦人

家光の生れた時から乳母として仕へたのが春日局といふ賢婦人で、家光がえらくなつたのはその教養のよかつたことも一原因でせう。少し大きくなつてから後は、松平信綱・阿部忠秋・酒井忠世・土井利勝などのやうな一代の名臣が相ついで近侍となつて、よく家光を輔導しました。これ等の人々は家光が將軍となつてから後は或は老中となり或は大老となつて、大に幕府の政治を整頓し、徳川氏の勢威を盛にしたのであります。

春日局は本名を阿福と云つて齋藤利三の女であります。利三は明智光秀と共に織田信長を弑したので、豊臣秀吉のために誅せられました。阿福はその時小さい子供でしたが、母と共に貧苦に暮し、昔の父の友達が救つて呉れる情けのかけにやつと大きくなつて行きました。



春日局

阿福は長じて稲葉正成に嫁しましたが、後に離縁になつて母と共に暮してゐました。その時家光が生れて幕府で乳母を募つた時、父の昔の友達の世話でうまく採用され、改めて春日局と云ひ、後に從三位に叙せられたので又三位局とも云つてゐました。生れつき非常に賢くて而も眞面目で、誠心誠意家光の教養に力を盡しましたので、家光も亦母親のやうに懐いて、その云ふことは何でもよく聞き、老後に至るまで、非常に大切に、待遇しました。

家光が二十五歳の時瘡痘にかゝつて頗る重態に陥りました。局は非常に心配し

て夜の目も眠らずに介抱しましたが、醫者も匙を投げてため息をつく有様に、この上はたゞ神佛の加護による外は無いと思つて、局はこつそりと東照宮の神前に詣で「やがては天下の將軍にならせられる大切な御身ですから、是非ともおたすけを賜はりますやう、私は數ならぬ汚れた身ですけれど、お乳を差上げた御縁がありますので、どうか私の命を代りにお召し取り下さい。この願が叶つて御病氣御平癒になりましたら、私は何時病氣にかゝりましても決して醫師にも見せず薬も飲まず、必ずお召し取りを待ちますから」と、丹誠こらして祈願を込めました。するとその忠誠に神も感應ましくたものか、一日一日と氣分がよくなり、醫者も不思議に思ふうちに、さすがの難症もたうとう全快しました。全く神様のおかげがあつたのでせう。ところが神様も局の忠誠を感ぜられて情けをかけられたものか局は別に病氣にかゝることもなく、そのまゝ無事に暮すことが出来ました。

神様への誓ひ

薬は一滴も飲まぬ

家光が將軍となつてからは、春日局の忠誠を賞して特に寵遇し、その以前の主人であつた稻葉正成を召し出して領地を賜ひ、局の兄や弟も亦召されて幕府に仕へました。局は又三千石の土地を賜はり、又湯島に天澤寺を建てましたが、それにも三百石の香火料を付せられました。

寛永二十年に局は病氣にかゝりましたが、醫者にも見せず薬も飲みませんので、病氣は日に／＼重るばかりで、最早朝か晩かといふ重態に陥りましたが、局は前に神様に祈つたことがあるので、少しも心配することなく、又難儀な風も見せないでちつと坐つたまゝ死を待つてゐました。

家光はそのことを聞いて非常に心配して、たうとう自分で見舞に見つて、自ら薬を盃に入れて局の口の邊に持つて行つて「この薬は余が與へるのだから、どうか否

と云はずに飲んで呉れ」と涙を流してすゝめました。將軍手づからの介抱に局は感
激の涙止めもあへず「女ながらも私の命はわが君様に上げましたもの、今日まで
生き存らへさせて頂いたのが勿體ない位です。最早惜むに足らぬこの身、お薬は一
切咽を越させまいと決心してゐましたが、お手づから下されるお薬、どうして御辭
退が出来ませう。有りがたく頂戴いたします」と云つて口に入れましたが、一滴も
咽へは呑み込まないでそつと口から懐に流し入れました。神には誓を破らず、君に
は禮儀を失はないといふ、眞に局ならでは出来ないことゝ云はねばなりません。

そのうちにいよいよ臨終と見えましたので、家光は「今はの際に何なりと望みが
あれば申せよ、必ず叶へてつかはすから」と申しましたが、局はたゞ「ありがたう
ございます」と云つたきりでした。家光は「お前の子の正勝は勘當してゐるといふ
のでまだ召し使つてもゐないが、最早心も直つたであらうから、余のためには乳兄
弟だ、この際余に免じて勘當をゆるしてやつて呉れないか」と云ひました。

すると局は聲を上げまして「彼は不都合な不忠者故に勘當しましたが、これ皆わ

が君さまの御爲を思ふからです。今わが子の愛に溺れて、わが君様のことをお忘れ
することがどうして出来ませう。私の亡くなりました後でも、彼をゆるしてお召し
かへ下さいましたら、私は草葉のかけからお怨み申し上げます。天下の將軍とあ
る方は、少しもえこ最負があつてはならないものです」と申しましたので、家光は
已むなく涙ながら奥へ入つて行つたといふことであります。

三人で智仁勇

大肌脱ぎでねち坐る男

家光を輔け導いた名臣が澤山ある中に、土井利勝と酒井忠世と青山忠俊とは、三
人が三様の性格でよく家光を輔佐しました。忠世は非常に謹厳なおとなしい人、利
勝は智慧のすぐれた人、忠俊は非常に勇氣のある人でした。家光はこの三人を選ん
で、忠世に後見をさせ、家光を諫めるときは利勝にと云つた風に智仁勇の三人三徳
で家光を教へ育てるやうに云ひつけたのであります。

家光は小さい時は極めておとなしい内氣な人でしたが、元服の頃から殊の外血氣強くなつて、時には亂暴な行ひもありました。諫めても中々聽かない様な時には忠俊は腰の刀を投げ出し、大肌脱となつて家光の前に坐つて、「このことお聞き入れが無いならば、是非この場で殺して下さい」と云つたりしました。すると利勝はその



家光の像

時は黙つて置いて、後に酒もりなどあつて家光の心の和らいでゐる時に「忠俊のいふこともよく考へて見れば理窟があります。若しこんなこと忠世に知れますとどんなむつかしい顔をするかわかりません。是非一つお考へ直しになつて忠俊の申し上げた通りになさいませ」とおとなしく諭しますので、聰明な家光のことですから、すぐに後悔して、改めるので

した。

家光が將軍となつてからは、利勝は老中となつて幕府の政治・制度を整頓し、後

には大老となつて殆ど凡てのことを一人で切り廻しました。そして十六萬二千石といふ澤山の知行を貰ひましたけれど、少しも贅澤をしないで非常に質素儉約を守りました。

或時座敷で三十糶ばかりの長さの絹糸を一本拾ひました。すると近臣の大野といふものにこれを渡して「大切にしまつて置け、又役に立つこともあらう」と云ひました。他の人々は「何といふケチな人間だらう」などと嗤つてゐましたが、それから三年ばかりして或日のこと、ふと利勝の刀の緒が切れました。そこで大野を呼んで、「あの糸を」と命じますと、大野は直に腰の袋から出して利勝に渡しました。利勝は大に喜んで「つまらぬものでもこんな時には大層役に立つ。大野は感心な男だ。よく命令を重んじて大切に保存してゐたものだ」と云つて、早速知行を三百石増加してこれを褒めたといふことです。

その頃幕府で秘密の會議をすることがありますと、小さい茶室などに集つて、障子襖を閉め切つて相談してゐました。すると利勝は、「こんなことすると誰に立聞き

せられるかわからぬ。大廣間で相談しよう」と云つて廣間の真中に集つて、襖・障子を開け放して密談しましたので、それから後はこれ迄の様に秘密が漏れるやうなことは無くなりました。

主君思ひの長四郎

繩に乗つて屋根から落ちる

松平信綱は伊豆守で、全身智慧の固まりとも云ふべき人であつたので、世に「智慧伊豆」といふ渾名がありました。九歳の時から家光に侍し、家光の死後は將軍家綱に仕へ、長く幕府のために盡した人であります。

信綱がまだ長四郎と云つてゐた頃、秀忠の伴をして大奥に行つて、劍をもつて長廊下の暗い所で待つてゐました。午前二時頃、ついウトウトと眠つてゐる處へ秀忠が出て来て、劍を引きとつて歸らうとしますと、長四郎はふと目を覺し、誰とも覺えないので「取られては一大事」とばかり追ひすがつて來ました。秀忠はこれを見

て「感心な子供だ、その心を一生放すな」と云つて褒美を與へました。又或時他の子供たちと座敷で走り廻つて遊んでゐましたが、どうしたはづみか大切な屏風に足をかけて破りました。秀忠がこれを見て「誰がこんなことをした」と咎めますと、みんな恐れ入つて誰一人口をきくものもありませんでしたが、十歳ばかりの長四郎は「私がかんなにして」と正直に申し立てました。秀忠これを聞いて「よく正直に云つた、褒美をやるからこれからは氣をつけるよ」と云ひました。ワシントンの幼時も思ひ出されて感心な話ではありませんか。

十四歳の時でした。御殿の屋根の上に雀が巢をかけて子を産んでゐますので、竹千代があれば欲しいと云ひましたが、長四郎は晝は人目もありますので、瓦の何枚目といふことを數へて置いて、夜になつてそつと屋根に上つて、うまく捜しあて、雀の子をとりました。併しうれしさのあまり急いで下りようとして足をすべらし、箱樋の中へ落ち込みますと、釣つてある針金が切れて樋は庭に落ち、とてもけたましい音がしました。

「さア何事だらうと御殿では大さわざして、誰か出て見よと云ふ聲がしますので、長四郎は樋から出て縁の下に這ひ込んで、暫く様子を見てゐました。女中達は誰も皆恐れて出るものがありませんでしたが、その中の一人がやつと勇氣を出して兩戸をあけ、提灯の火にすかして見て「樋が落ちてゐるだけのことで、他には何も變りはありません」と申しました。

併し針金で釣つてある樋がひとりで落ちるといふは只事では無いといふので、僧侶に仰せつけて御祈禱などがありましたので、長四郎は心にまことにすまぬことをしたと思つて、春日局の處へそつと實際のことを申し出ました。すると秀忠の夫人はこれを聞いて「子供だからかくすのも無理からぬことを、そう正直に申し出るといふは、主君のためを思ふからであらう。感心な子だ。竹千代のために將來大切な人間となるであらう。併し後々の事もあるから、懲しめのため袋に入れよ」と命ぜられました。

そこで長四郎は袋に入れて吊されましたが、それでも竹千代の命令で雀の子をとり

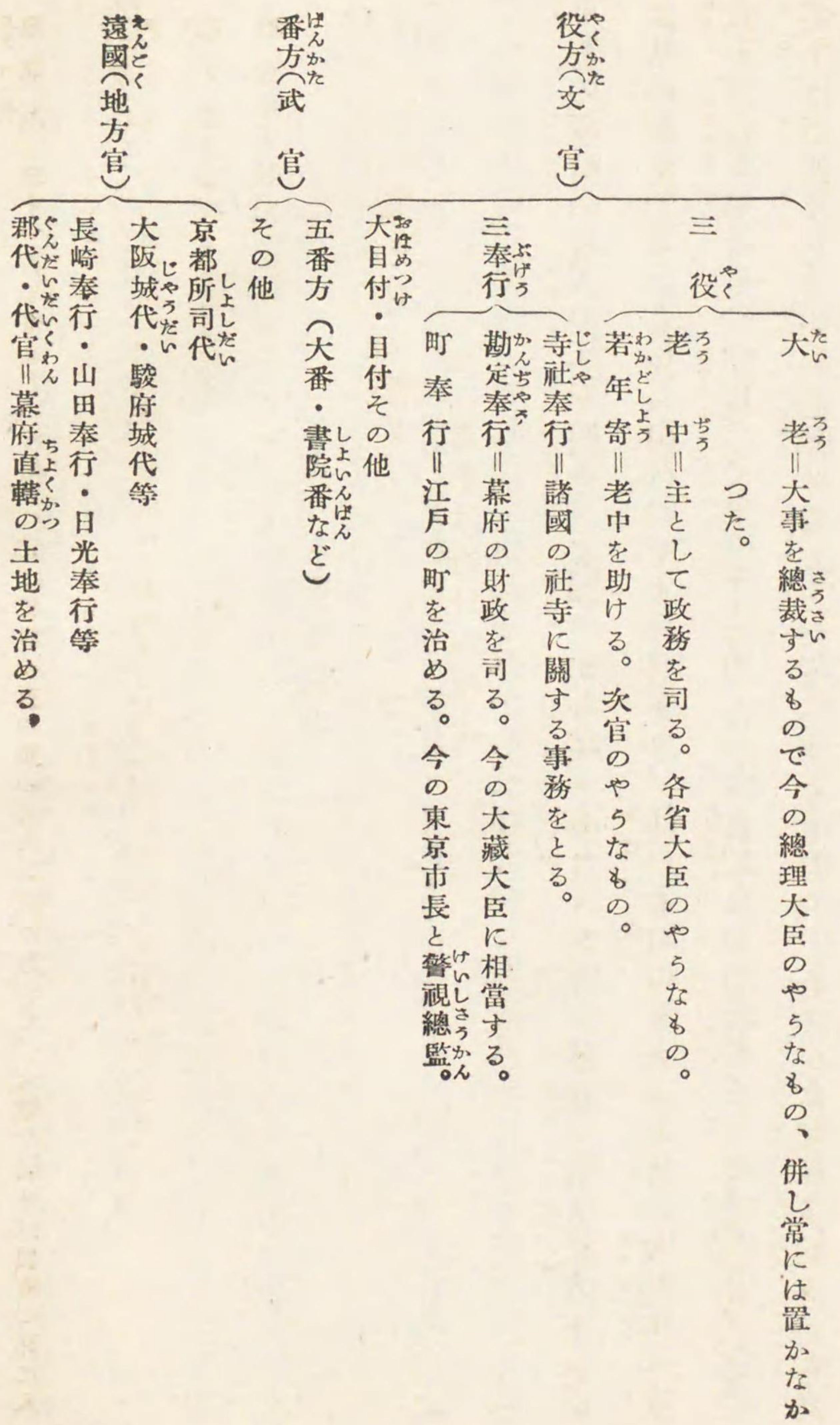
に行つたとはどうしても云ひませんでした。こうして子供の時からほんとに主君思ひの眞心がありましたので、長く徳川氏の柱石ともなつたのであります。

江戸幕府

名よりも實を尙ぶ

關ヶ原の戦以後は政治の實權は全く家康のものとなりましたが、まだ名義の上では豊臣氏の下でありました。併しそれから三年たつて慶長八年に家康は征夷大將軍に任ぜられ、次で江戸に幕府を開きました。もとより家康は源頼朝を崇拜し、それにあやからうとしてゐたのでありますが、江戸幕府の組織は鎌倉幕府に比べるとずつと簡単なものでした。家康は三河の一大名であつた時の政治の機關を、そのまま江戸に持つて来て、少し擴張したに過ぎませんから、天下の大政を司る職員の名稱も、諸大名の職員と殆ど同じものでありました。名よりも實を尙び、出来るだけ物事を簡単にするといふのが、徳川氏政治の一大特徴なのであります。

幕府の組織は家光の時になつて漸く整頓完成しました。今その主なものを表にして見ますと、



用部屋 老中や若年寄などの役所、元は將軍の次の間の又次の間にあつて、大聲で話せば將軍の耳に入るほどであつた。
評定所 今の裁判所で、大事は將軍自ら裁判するが、大抵は老中・若年寄等による。
勘定所 租税と會計を主る。
目付所 城中の中の口にあつた。

世の中の治め方

忠孝は行ひの根本

その頃町の商人たちを町人と云ひ、町年寄・名主・地主・家主・五人組などといふものがあつて、その一町内のことは皆地主の處分に任せてゐました。又地方の農民を百姓と云つて、庄屋(又は名主ともいふ)・組頭・百姓代といふものがあつて、名主は百姓から自由に選舉することになつてゐました。わるい庄屋が人民をいぢめたとか、筑後の五庄屋のやうに命をすてて人民のためになることをした話は、皆さ人も度々お聞きになつたことでせう。あの庄屋などといふものは徳川時代になつて

から出来たものです。

それから幕府は色々な法律をつくつて世の中を治めました。法律と云つても今頃

武家諸法度

一 文武馬に道専可相嗜幸
 尤文武言に法也不可不兼備矣馬是武
 家之要祀也早兵為凶器不得已而用之治不
 忘乱何不勵儆殊幸
 一 可別群飲佚遊幸
 令條取裁嚴別殊重耽好色業博奕是亡國
 之基也

武家諸法度

の法律とはちがつて、色々な心得をあつめたもので、始めは極めて簡単でしたが次第に複雑になり且整頓して來ました。先づ大名の心得として武家諸法度といふものがあります。その第一條には、

文武弓鳥の道専ら相嗜むべきこと。

とあり、その外に二十二ヶ條のことが記してあります。又公家方に對しては公家諸法度といふものがあり、お寺や神社に對しても、夫々の法令がありました。幕府配

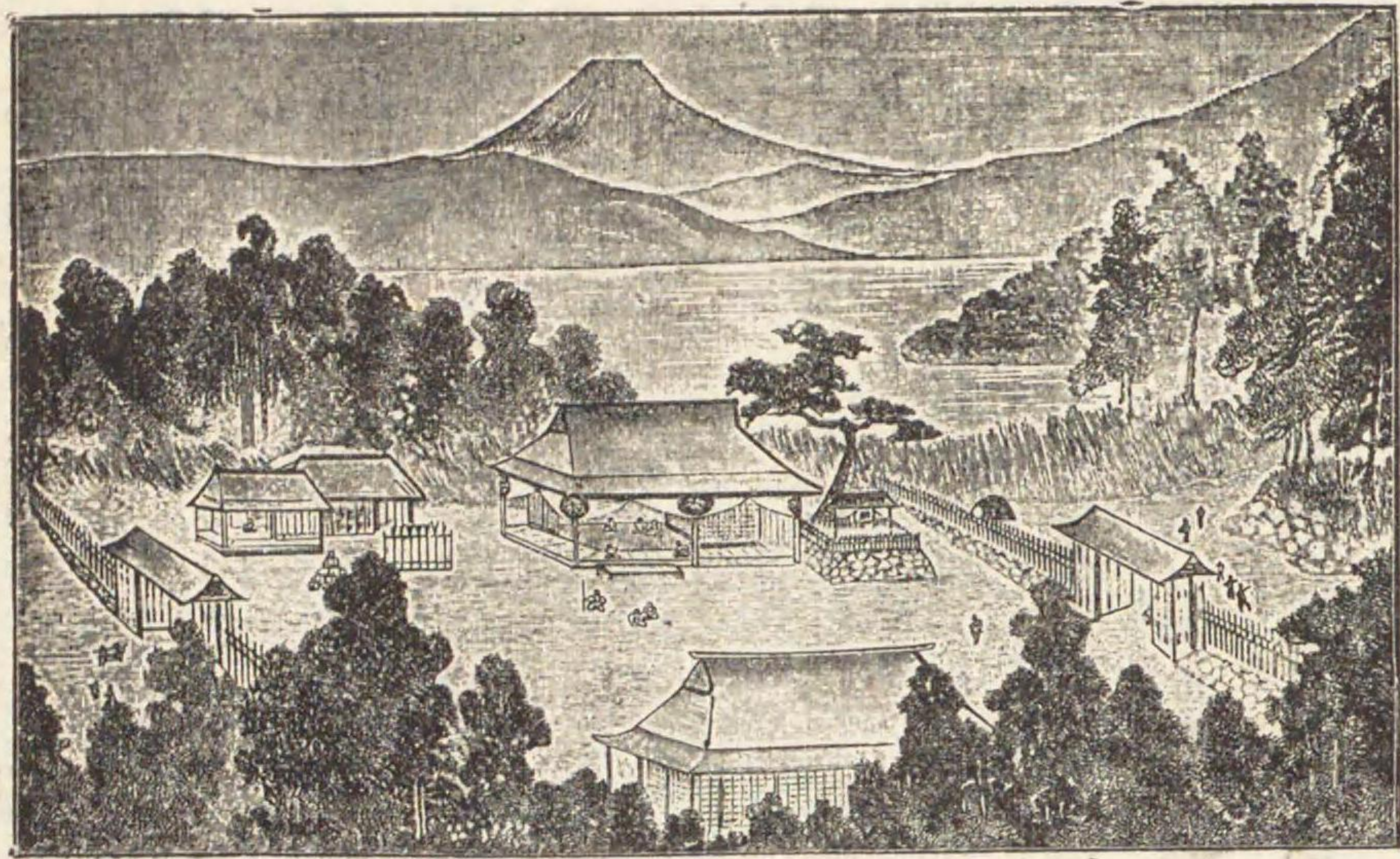
下の武士即ち旗本に對しては條制があつて、その第一條には忠孝を勵まし禮法を正し、常に文道武藝を心掛け、義理を専らとし、風俗を紊るべからざること。

とあります。又町人百姓には、所々に高札といふものがあつて、

親子兄弟夫婦をはじめ、諸親類に睦まじく、下人等に至るまでこれを憐むべし主人あるものは各その奉公に精出すべきこと。

偽りをなし無理を云ひ、惣じて人の害になるべきことを爲すべからず。

といふやうなことが書いてありました。つまり忠孝といふことを第一に教へて、不忠不孝のものには最も重い罰を下すことにして、これで世の中を治めて行つたのであります。ですから子が親を訴へたり、家來が主人を訴へたりするやうなことがあると、少しは親や主人の方に無理があつても、必ず子や家來の方がわるいことになつて罪せられる例でありました。こうして忠孝を以て人間の行ひの根本としたのは勿論わが國の大古からの教に基いたものであります。



箱根の關所

箱根の峠は上りが四里（十六軒）下りが四里と云はれたけはしい道で、その上りつめた處に芦の湖があり、湖のそばに關所があつて、最も嚴重に通行人を取り調べてゐました。圖の右と左との二つの門を通らねば、この峠を越すことは出来ぬやうになつてゐます。

それから武家諸法度に色々
々々を定めて、これに
違反するものは嚴重に處分
しました。例へば大名の居
城を修繕する時などは必ず
幕府の許可を受けさせると
か、他の大名との間に婚姻
を結ぶなども固く禁じてゐ
ました。そこで廣島に居た
福島正則は、洪水の害を防
ぐ目的で城の外濠を修繕し
ましたが、幕府の許可を受
けなかつたといふので、そ

貧乏になる大名

已むを得ず幕府に服従

地方の大名を制御統一することについては、家康以來頗る苦心されたものであります。鎌倉幕府が亡びたのは、天下に配置した守護や地頭から怨まれたのが本であり、室町幕府も亦守護が幕府の命令を奉じないで、群雄が各地に起つて遂に政を失ふに至つたのであります。又豊臣秀吉はやつと天下を統一するや、直ちに外國征伐をはじめたので、大名の統一に心をくばる暇がありませんでした。

そこで家康は深くこのことを考へ、關ヶ原の戦争後大に大名領地の加除を行ひ、代々徳川氏の家來であつたものを重要な土地に据え、家康の友達に相當する大名は國の端々に置くやうにしました。そして京都の二條城に諸大名を集めて、「將軍に對しては決して叛かないこと、若し叛くものがあつても決してこれを援けないこと」などを誓はせました。

の領地を奪はれて津輕の方に追ひやられ、加藤清正の子忠廣は品行がわるいといふので除封せられました。福島や加藤は豊臣氏の遺臣の中でも最も強いものでしたので、早く除いて置かないと後日どんな害を起すかわからないと思つて、わづかのことを口實にして峻厳な處分をしたのであります。

諸大名に對しては、必ず邸宅を江戸に構へさせて、妻子をそこに置かせ、大名には一年置きに江戸と領國とを參觀交代させました。そして各地に關所を設けて、通行人を一々嚴重に取調べ、殊に江戸にある大名の妻子が逃げ歸らぬやう、婦人に對しては格別嚴重を極めました。

又大名が參觀交代する場合には、夫々の格式に應じ、多數の供をつれ、所謂大名行列といふものをつくつて練り歩かねばならぬことにしました。これは成るべく澤山の費



行列

用を使はせて大名を貧乏にするためでした。槍持・弓持・鐵砲持をはじめとして、何百人といふ行列で、一日に二十斤位づつ進んでゐますと、九州あたりの大名は一度江戸に行くのに一ヶ月以上もかかり、途中の宿賃ばかりでも大したものので、その費用のかゝるには實際困り抜いたものであります。

それから又幕府は、特に大名に申付けて土木工事などを奉仕させました。二條城・伏見城・江戸城・名古屋城などの修繕、木曾川などの改修も皆大名に申し付けましたので中には頗る不平に思つたものもありますが、大勢は如何ともすることが出来ず、いや／＼ながらその命を奉じ、ために財政の非常に困難になつた大名も少くありません。



大名

威厳を示した家光

度膽を抜かれた諸大名

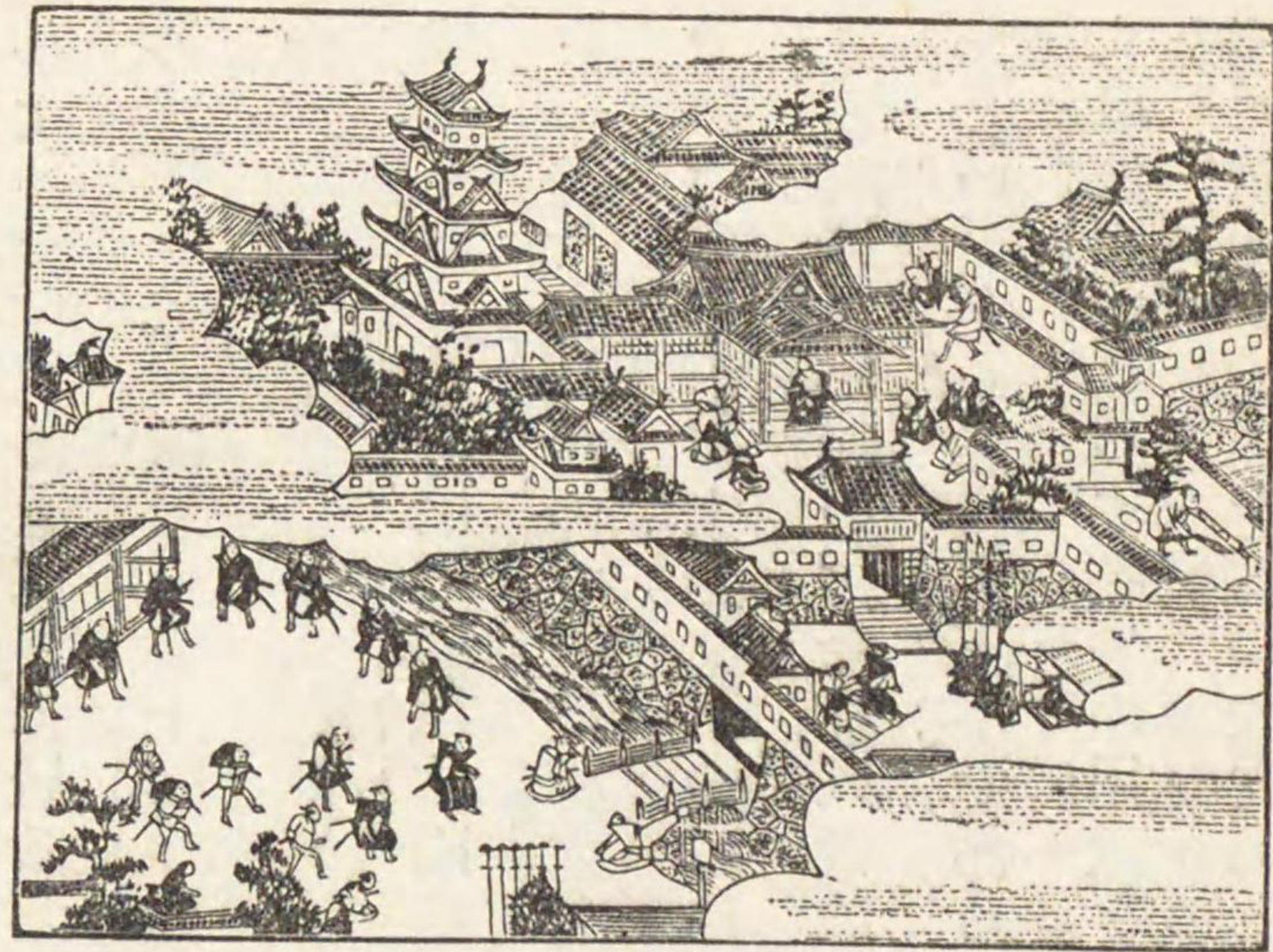
大名の中で家康の子孫にあたるものを親藩と云ひ、尾張・紀伊・水戸・越前・會津の五藩がありました。それから先祖以來徳川氏の臣下であつたものを譜代と云つて、これは随分澤山あり、更に豊臣氏時代には家康と同輩であつたものを外様と云つて、加賀の前田氏、薩摩の島津氏、周防の毛利氏、陸奥の伊達氏、土佐の山内氏などがこれでした。

この中外様大名は幕府にとつて最も油断がなりませんでした。そこで表面にはそれを優遇し、一方ではその勢力を殺ぐことばかり考へました。例へば參觀交代で江戸に入つて來る時には、將軍、自ら郊外まで出迎へたりしましたが、幕府の政治には一切關係させないで、小藩の譜代大名を老中などにして、却つて大に威權を振まふ資格を與へました。

秀忠の亡くなつた時には、この機會に若しも騒動などが起つてはならぬから、暫くこれを秘密にしようとの話もありましたが、酒井忠勝の意見でその夜これを公にしました。すると江戸に居る大名は皆急いで登城しましたので、これを大廣間に集めて置いて、家光自ら上段の間にあらはれ、松平信綱をして次のやうに云はせました。

家康公や秀忠公は、櫛風沐雨の勞を重ね、多くの大名たちの力添へによつて天下を一統せられたので、外様大名に對しては特に優遇して同輩の禮をとつて居られたのであるが、家光に至つては生れながらの將軍であり、外様だの譜代だのといふ區別は更に無い。今日以後は何れも一樣に家來として取扱ふから左様承知するがよい。尤もそれが不平であるならば、こゝろに實際に事を起すのも面白からうから早速國に歸つて戦争の用意をするがよい。わが身はまだ若年ではあり、まだ戰場に望んで腕前を振つたためしが無いから一戦を試みるのも愉快なことに思ふ。どうぢや。

こう頭から云はれると誰でもギクリとせざるを得ません。「さても今度の將軍はど



大名の江戸登城

諸大名が江戸城に登る時の有様をかいたもので幕府が盛であつた頃の様子がよく想像されます。

ます。あゝ老後の思ひ出に一戦して、この老武者のすばらしい働きぶりを、一つ若い將軍様にお見せしたいものぢやのう」と云ひましたので、この猛將の一言に並み

えらい見識だナ」と心の底で驚いてゐました。その時伊達正宗が静かに近み出て、「御治世の初にあたつて誠に勇ましい仰せを承ります。廣い天下に誰が當家の御恩を蒙らない者がありませんか、若しも恩を忘れ義を顧みないで、非謀を企てるやうなものがありましたらば、將軍様が態々御出ましになるまでもありません。この政宗が一人馳せ向つて、忽ち踏みつぶして御覽に入れ

居る大名一同首を縮めて恐れ入りました。

やがて家光は別室に於て、一人一人大名に面會しました。その時家光は殆ど膝をつき付けるやうにして、記念にと云つて一本づつの刀を興へ、「そこで抜いて見よ」と云ひましたので、大名はその剛膽に全く氣を吞まれてしまつたといふことです。かくて幕府の勢力はいよゝ盤石の様になつたのであります。

外國との關係

朝鮮・支那との關係

對馬と琉球が橋渡し

豊臣秀吉が朝鮮征伐をしたために、朝鮮及び支那との交通は、一時全く絶えまして、そこで家康はこれを恢復しようと考え、先づ對馬の宗義智をして使を朝鮮にやつて相談させました。元來この對馬といふところは山ばかりで平地が乏しく、住民は多く漁業に従事し、その水産物を朝鮮に輸出して、朝鮮の米や豆と交換してこれを食料にするといふ土地ですから、朝鮮と仲よくすることは非常に必要なのです。そこで義智は度々書面を持たせて朝鮮にやりましたが、朝鮮では使のものを捕へて返してもくれません。

そのうちにやつとの事で、朝鮮の或地方役人の處から返事が來ました。「仲直りは明の國の許可を得なければならぬが、それよりも先づ前年の捕虜を返して呉れ」とありました。そこで秀吉當時連れて歸つた捕虜若干名を送り還しました。

ところが朝鮮でも、駐屯してゐる明の兵が驕慢になつて、少からず持てあましたので、日本と仲直りして明の兵を斷らうと思つて、使をよこしたりしました。かくて漸く慶長十四年になつて條約が出來上つて、兩國は仲よく交際し貿易するやうになりました。そして將軍の代がかはる度毎に、朝鮮から慶賀の使を送ることになり、幕府でもこの使を非常に大切にもしなしたのであります。

家康は又明とも交際貿易をしようと思つて、琉球の王に云ひつけて周旋させたりしましたが、その頃明は國が非常に亂れて、賊が國內各地に起つて治まりつかず、海賊の中には日本人も交つて、海岸各地を荒し廻るといふわけで、遂に幕府と明の朝廷との間には、相談を纏めることが出來ませんでした。

併しその頃、明の商船がひそかにわが國に來て、貿易をすることは少くありません

でした。そこで幕府では九州諸國に命令して、明國の船が來たら何處の港でも貿易してよろしいといふことにしました。後に家光の時になつてから、貿易港を長崎に限り、明が亡んで清の國になつてからも、やはり長崎でだけ貿易を許すことにして、ずつと明治維新の頃まで及んだのであります。

明の亡んだ時には、その臣下で清に仕へるのを好まないものが、相ついでわが國に來ました。その中で最も有名なのが僧の隱元と朱舜水です。隱元は京都の南の宇治に萬福寺を開き、禪宗の一派の黃檗宗を傳へ、舜水は水戸の藩主徳川光圀に用ひられて、わが學問の進歩を助けたことが少くありません。

國 姓 爺 の 忠 烈

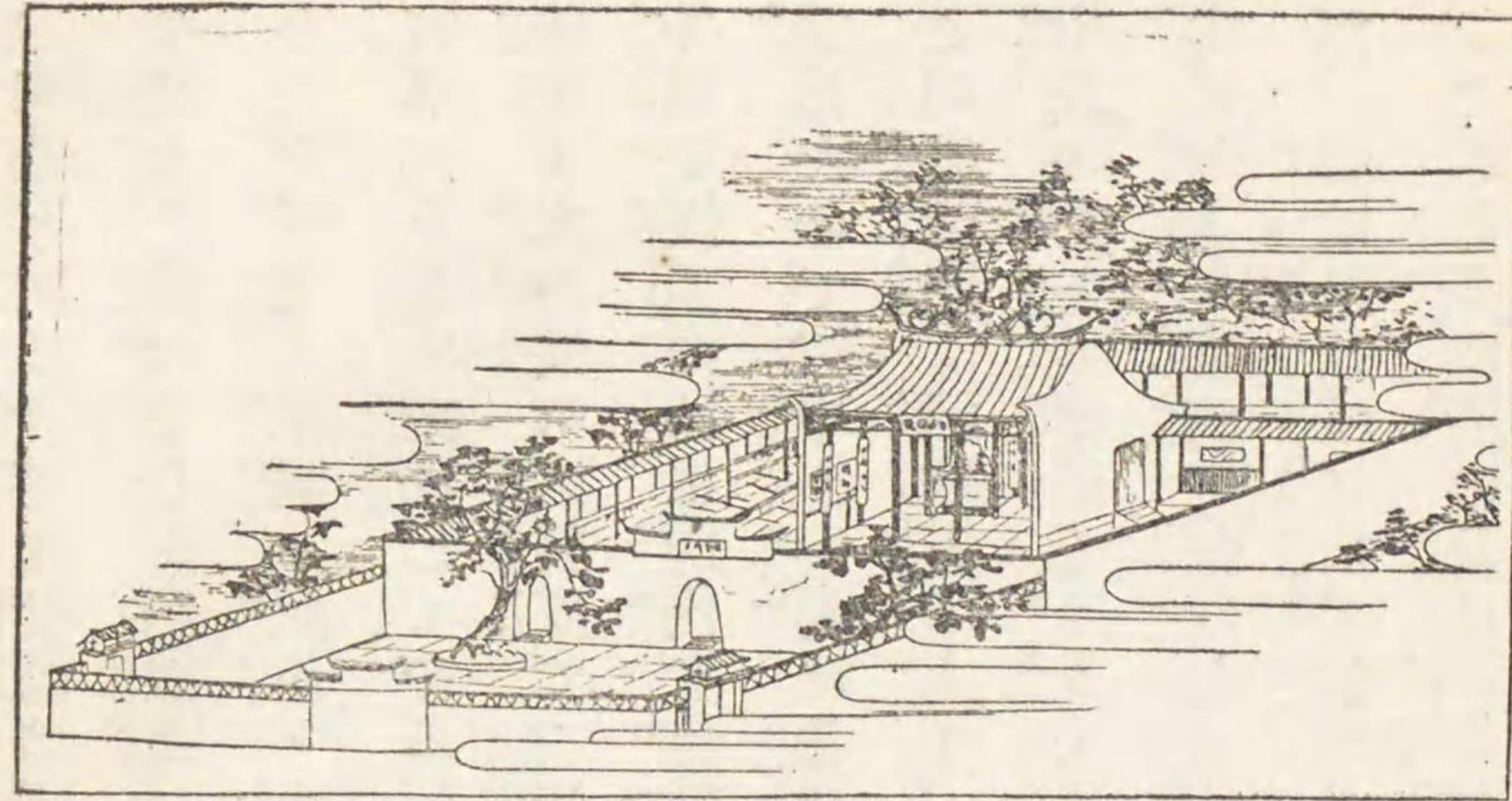
女 の 自 殺 に 舌 を 捲 く

家光が將軍になつてから二十年ばかり後に、明の皇帝は流李賊自成のために都を攻め落されて自殺し、滿洲から起つた清の世祖が今の北平に入つて皇帝となりまし

た。すると明の大將鄭芝龍は、何とかして明の朝廷を回復しようとして、福王を奉じて清兵と戦ひましたが敗北し、使をわが國によこして幕府に援けを請ひました。そこで家光は尾張・紀伊・水戸の三藩主と重臣とに相談させました處、紀伊侯の頼宣は「それは援助してやるがよろしい。どうか自分をやつて貰ひ度い」と云ひ、尾張侯・水戸侯も大賛成で、皆兵を率ゐて行きたいと希望しましたが、井伊直孝は「外國を援ふために國內を疲弊せしめるといふことは宜しくありません」と云つて反對したので、中々容易に決定しませんでした。

この鄭芝龍は福建省の人で、ずつと以前にわが國に來て長い間平戸に住んでゐて田川氏の女と結婚して二人の子をまうけました。芝龍は妻と長男の成功とを連れて支那に歸り、臺灣を征伐して大に功を立てました。明の滅亡後臺灣の安平に居ましたが、妻は泉州城に於て清の兵にかこまれ、城が遂に陥つたので、潔く自殺しました。これを見た清の兵は「女でさへあんなに勇ましいのだから、日本人の男と來たらどんなに勇猛だらう」と云つて舌を捲いたといふことです。

ところが芝龍は、日本へ援兵を頼んでも聽いて貰へないので、遂に清に降参しま



開山神社

臺灣の臺南市にあります。鄭成功を祀つたもので、臺灣の人たちの最も崇拜する處であります。成功の母の田川氏も祀つてあります。

した。その時幕府ではまだ援兵を出さ
か出さないか決つてゐなかつたのです
が、芝龍が降参したといふ知らせがあ
りましたので、そのまゝ援兵を出さな
いことになりました。
成功は色々に父を諫めたのですけれ
ど、遂に聽かれませんでしたし、母は
清兵のために勇ましい最後を遂げたと
聞いて、悲憤の涙とどむるに由なく、
遂に自ら義兵を擧げて清の朝廷への反
抗を續けました。最初は數千の兵を有
するに過ぎませんでした。次第に勢

がよくなつてしきりに諸城を陥れ、厦門を根據地とし漳州を取り、進んで南都に向
つた時は、八十萬といふ大軍を率ゐてゐました。併し金陵を攻めて勝たず厦門も亦
危なくなりませんでしたので、又臺灣に渡つてオランダ人を追つ拂ひ、赤嵌城を臺南に築
いて本據とし、大に民政をととのへて英氣を養ひました。

それから成功は使を長崎に遣はして又援兵を乞ひましたが、幕府では相談の結果
援兵を送らぬことにしました。そこで成功も勢が次第にわるくなり、遂に明を恢復
することが出来ないで、病氣のため三十九歳で死にました。併しこの母と子の忠勇
義烈は、當時の人を感激せしめたものであります。鄭成功のことを國姓爺とも云ひ
わが國では國姓爺合戦といふお芝居も出来てゐます。

南洋に活躍した日本人

刀をさして大道を潤歩

足利氏の末頃から、ポルトガル人やイスパニヤ人がわが國へ來るやうになつて、

貿易も盛に行はれ、又キリスト教も渡つて来たことは、本書の第六卷にくわしく述べました。その後家康の時代には、安南・呂宋・柬埔寨・暹羅・大越など南洋の各國と盛に貿易をして、長崎の港には外國船が八十餘艘も来たといふことで、一方にはわが商人のこれ等の國に渡航して商賣をするものも亦少くありませんでした。その頃わが國から外國に行く船は、皆幕府から許可書を貰ふことになつてゐました。この許可書を朱印状と云ひ、それを持つてゐる船を朱印船と云ひました。その船の造り方も中々進歩したもので、大きいものは長さ三十七米、幅十七米、三百人を乗せることが出来、櫓を設けて鐵砲を供へ、三本のマストに帆を上げて走る様は何とも云へぬ勇ましいものでした。

これ等の商船は銅・漆器・傘・扇子・屏風・硫黄・麥粉などを積んで行つて、繭・生糸・絹織物・砂糖・藥品・朱・水銀・ガラス器・珊瑚珠・紫檀などと交易して歸つてゐました。船は長崎を根據地とし、ポルトガル・オランダ・ジャワ・支那などの言葉の出来るものを通譯として雇入れ、水夫には多くスマトラやマラッカの人を

用ひました。

その頃南洋の各地には日本人町が出来てゐました。その町では總元締とか軍師と

かいふ役を置き、よく一致團結して商業に活動し、土人に對して非常に勢力を振ひ



南洋の日本人町

ルソン、シヤム、アンナン、コウチなどの各地に日本人の町が出来て、中には數百數千人の日本人が居ました。家の構へも日本風に近く風俗も日本風であつたことが、この繪によつてよく分ります。

ました。關ヶ原の戰爭や大阪の役に敗れた落武者なども澤山交つてゐたので、大小二本の刀を指して大道を濶歩するものもありました。その他の者も大抵一本の刀を指し、全く日本の風俗そのまゝであつたと見えます。ルソン島には三千人居たといふことです。アンナンやシヤムにも澤山行つてゐたこととせう。

これ等の日本人は商業が巧であるばかりでなく、又非常に勇氣があり、戰爭も上手でありましたから、海賊などは日本人と聞いたら震え上つて恐れてゐました。随つて中には横暴なものがあつても、これを政府の力で治めることが出来ないで、わが國の幕府へ歎願して來たことも度々でした。

即ちカンボヂヤでは原彌次右衛門を日本商人の監督に任命し、アンナン國王は日本商人を鎮壓するために船本彌七郎の派遣を求め、その外津田又左衛門だの荒木宗太郎だの、海外に名を知られたものが少くありませんでした。中でも殊に有名になつたのは山田仁左衛門長政であります。

長政と彌兵衛

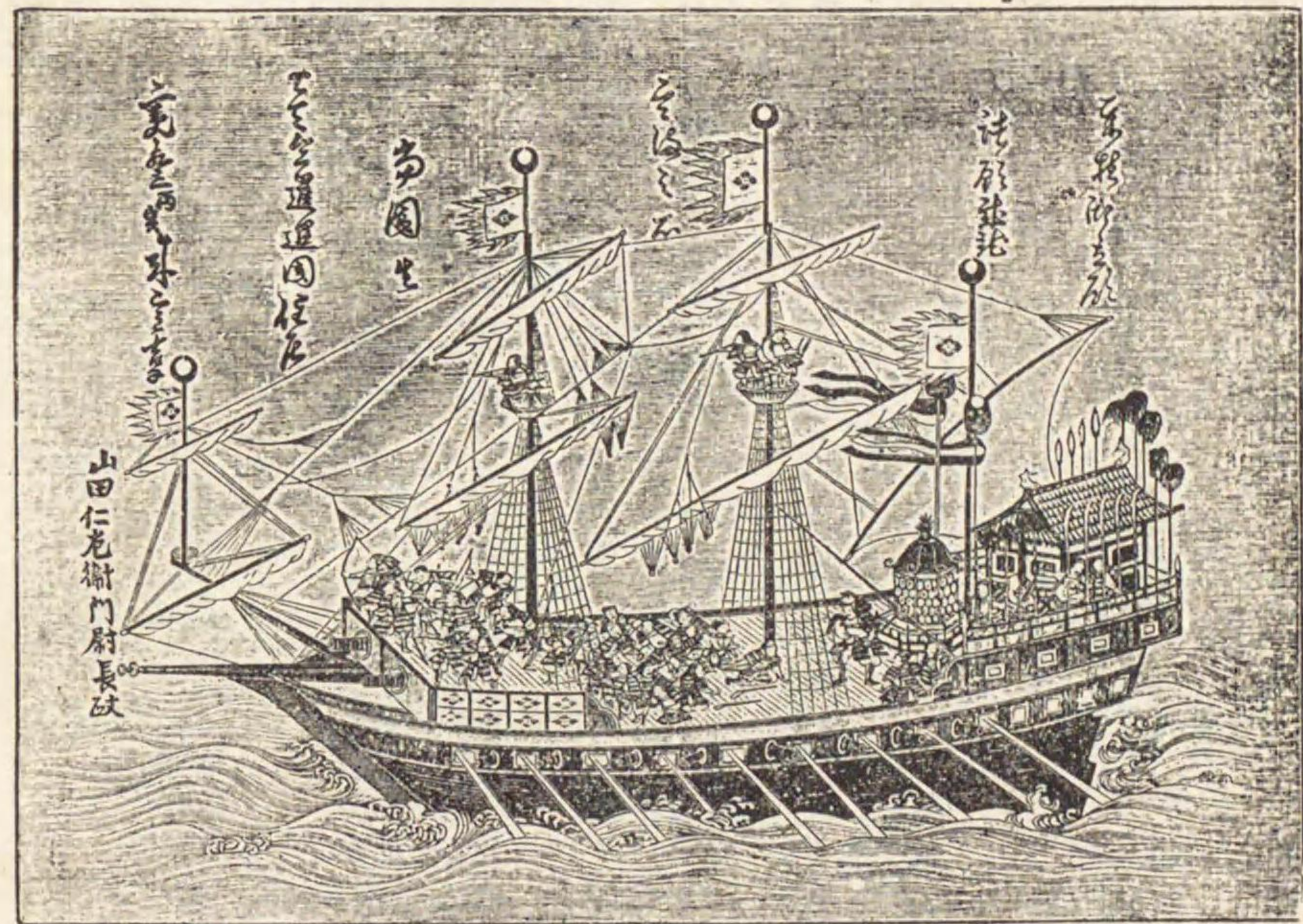
あとへは引かぬ負けし魂

山田長政は駿河の人であります。元は轡かきであつたと云ひますが、志を立て、劍道や兵法を學び、二十歳の時に商人に従つてシヤム國に行き、その日本人町に住んでゐました。

ところがその頃シヤム國王の弟がひそかに、王位を奪はうとして、國內が頗る亂れましたので、長政は日本人の中から義勇兵を募集し、これを率ゐて國王を援け、不正の徒を悉く平定しました。國王は大に喜んで長政を優遇し、これを國守と呼びました。

そのうちに六崑の酋長が又國王の命令にそむきましたので、長政は王命によつてこれを征伐し、一戦して大勝を博しその地を平定しました。そこで國王は長政を六崑王とし、王女と結婚させました。次で長政は又ルソンの兵を討ち破り、遂に國王

にすゝめて日本に使を遣はし、將軍秀忠に方物を献上しました。



山田長政の奉納
長政がその郷里駿河國の淺間神社に奉納した額です。當時彼等の用ひて居た戰艦を示したものです。

こうして長政は非常な出世を
しましたので、一度日本に歸つ
て見たいと思つてゐましたがそ
の機がありませんでした。その
うちに國王が死なれて、長政は
遺命によつて幼主を輔佐してゐ
ましたが、家來の甲花木といふ
ものが悪心を起して幼主を毒殺
しました。長政大に怒つて正に
これを討たんとしたのですが、
又甲花木のため毒殺されて、恨
みを吞んで南海の鬼となつたの

であります。

その頃臺灣はオランダ人が占領してゐましたが、長崎の末次平藏の船が支那へ貿易に行つた時、オランダ人に捕へられて荷物も金・銀も悉く奪掠されました。そこで平藏の家來の濱田彌兵衛は大に怒り、弟の小左衛門と子の新藏と三人連れで臺灣に渡り、そのこの大守のコンプラトウルに近づきました。

オランダ人は屹度先年の恨を報じに來たのであらうと思ひ、種々嚴重に調べましたが、三人は全く柔順にして、少しもそんな風を見せず、充分彼等を安心させて置いた上、機を見計らつて彌兵衛はコンプラトウルに飛び付いてこれを組み敷き、小左衛門は刀を抜いてその背を以て撲りました。

オランダ人は大に驚き、忽ち數十百人が劍を抜いて取り圍みましたが、新藏が先づその一人をズバリと斬つて斃しましたので、みんな尻込みしてたゞわいゝと騒ぐばかり、やがて鐵砲數十挺を以て打ち掛けようとしたが、彌兵衛はコンプラトウルの咽に懷劍を突き付け、「先づ部下を鎮めなければ即座に汝を刺し殺すぞ」と

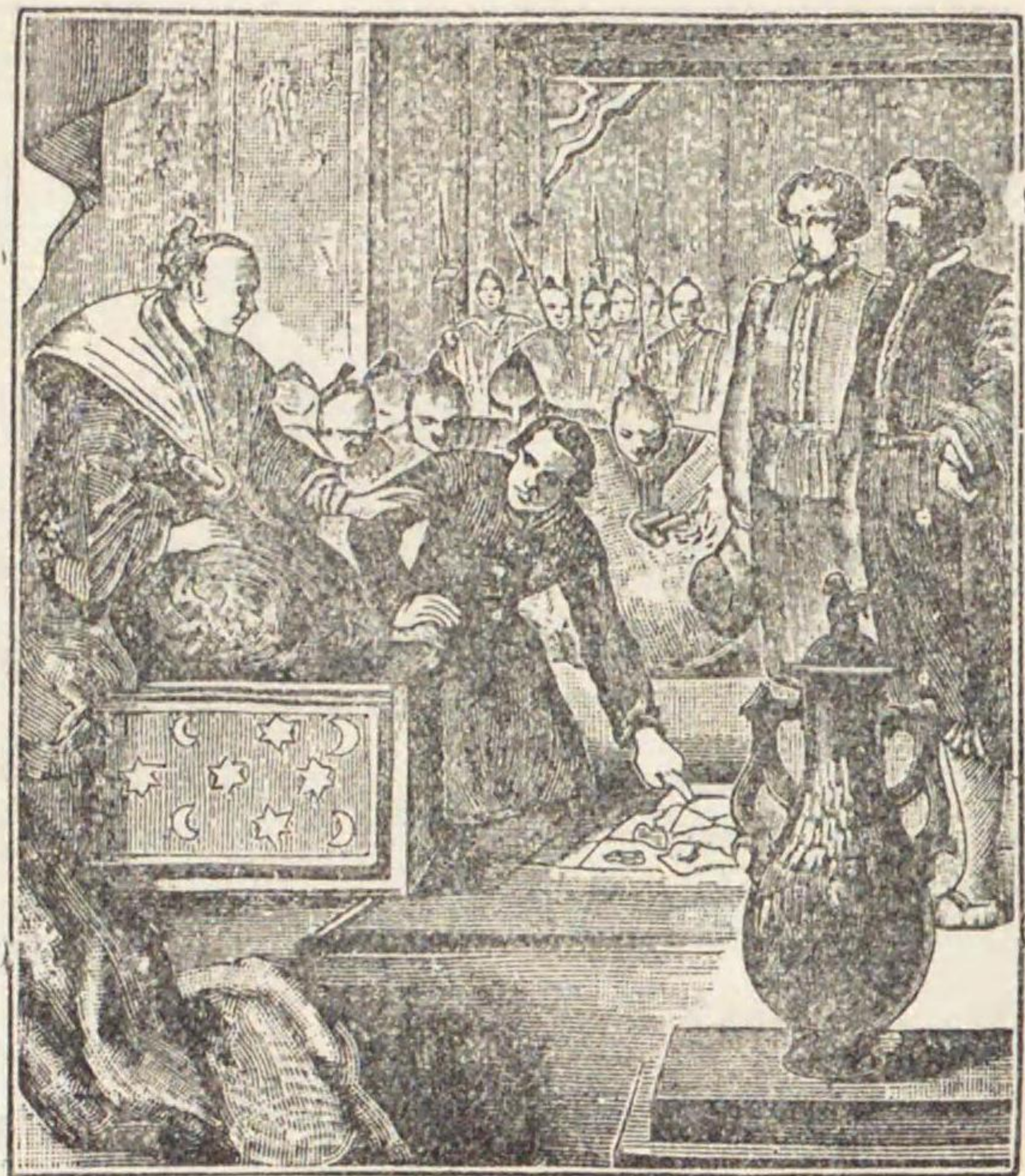
云ひましたので、コンプラトウルは部下のものに「決して討つてかゝるな」と命じ
「どんなことでも聽きますから命ばかりはお助けを」と歎願しました。
そこで彌兵衛は彼等に命じて、先年奪つた金・銀・貨物を全部提出させ、尙麻繩
を以て高手小手に縛り上げたコンプラトウルを日本へ引き立てるつもりでしたが、
「それではあとでこの地を治めるものが居なくなりすから」と云つて泣く様に頼
みますので、彼の子を人質として他の二三人と共に長崎に連れ歸り、奉行に訴へ出
たのでオランダ人は牢屋に入れられ、七年の後やつと免されたのであります。

商賣がたき

互に相手の悪口を告げ口

ポルトガル・イスパニヤの兩國に次でわが國に來たのはオランダとイギリスとで
した。オランダ人はジャバ島を占領し、バタビヤに總督府を置いて大に勢を振ひ、
更に進んで臺灣をとり、慶長二年には九州の平戸に來て貿易を行ひました。その後

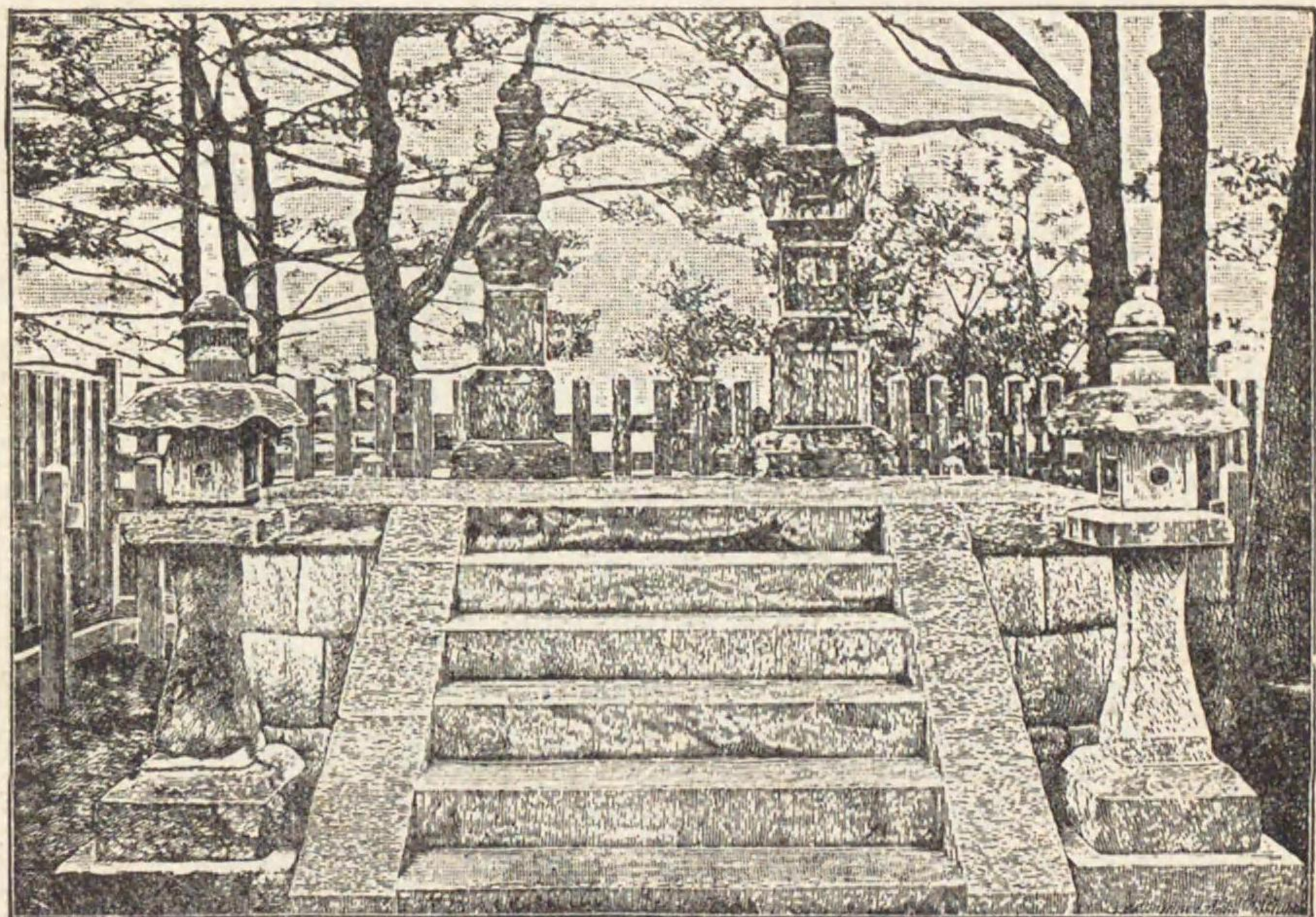
三年たつて豊後にオランダの軍艦一隻が漂着しました。家康はこれを江戸に回航さ
せましたが、途中で船が破損したので、長い間わが國に逗留してゐました。



アダムス家康に謁見す
ウイリヤム・アダムスが家康の前に
出てゐるところです。

(今横須賀市の一部) に二百五十石の知行を賜はりました。彼は造船・航海の術にも長
じ、幕府のために西洋型の大船を造つたりしました。

ポルトガルやイスパニヤの商人は、オランダ人が盛に日本に來るやうになつたた



按 針 塚

ウィリヤム・アダムスをわが國では三浦按針と呼んでゐました。浦賀の附近にその夫婦の墓があつて、按針塚と云ひます。

めに、自分等の商賣が振はなくなるのを恐れ、家康に向つてしきりにオランダの悪口を告げ口しました。併し家康の信任してゐたアダムスが、「ポルトガルとイスパニヤとはキリスト教を弘めて、やがてはその地を自分の領土としようとしてゐるが、オランダは純粹な商業國で、決して宗教を弘めたりするものではない」といふことを明かにしましたので、家康はオランダのみを優遇する様になり、ポルトガ

ルもイスパニヤも遂に敗れて退くやうになりました。

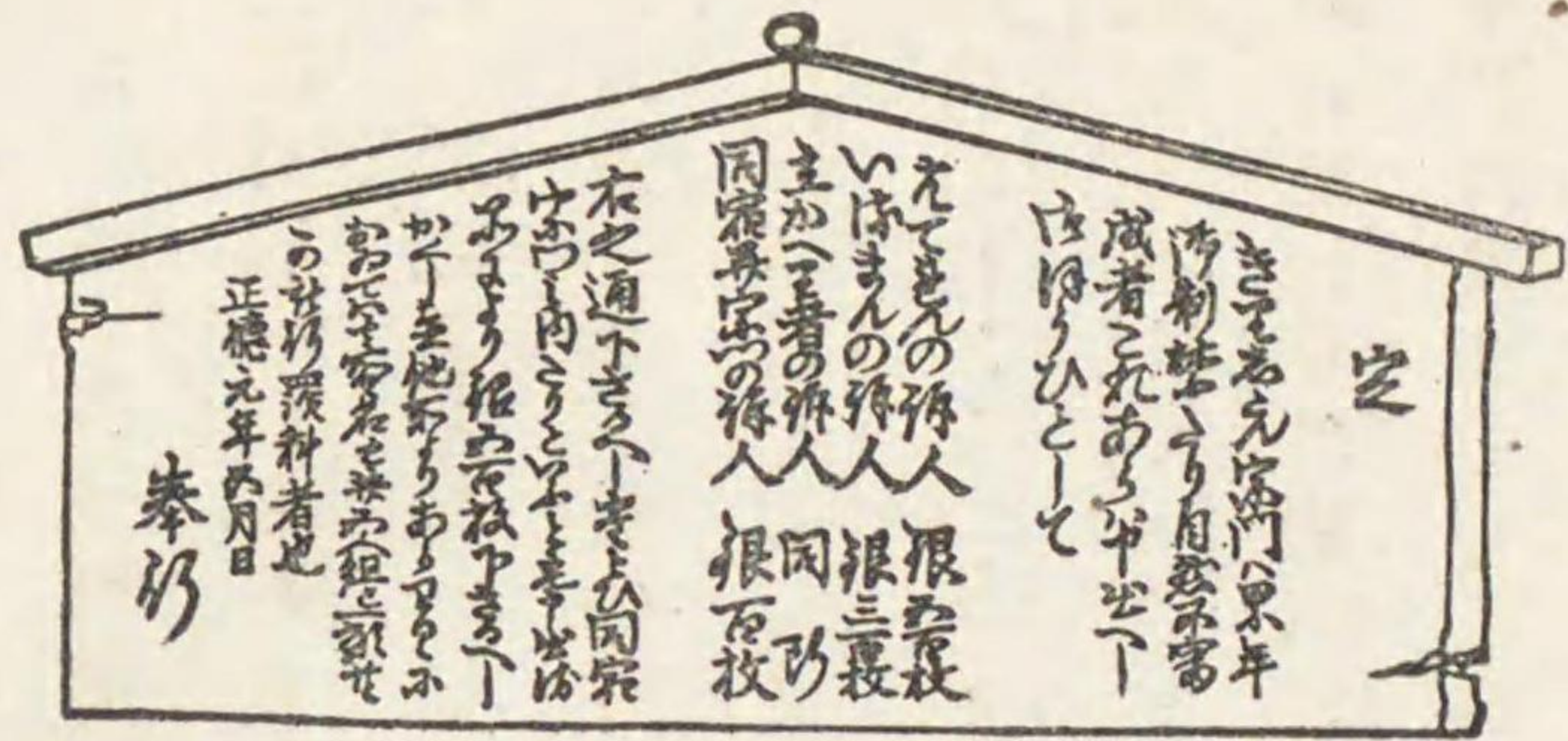
ところでアダムスはイギリス人のことですから、イギリスの商人も亦日本へ来るやうにと思つて色々周旋しましたので、平戸に商館を建てることを許され、又朱印状をも賜はりました。併しイギリスの貿易は長く續きませんでした。それはイギリス人が日本の事情をよく知らないで、赤い色の織物などを澤山持つて來て賣れなかつたことと、オランダ人との競争に負けたためでした。

かくて家光の代となつて海外貿易が全部禁止された後も、オランダ人のみは特に許されたので、これから三百年の間日本とオランダとは交際を續けたわけです。その間オランダ人が、ヨーロッパの文明を日本に傳へて呉れた功績は、實に偉大なものがあつたのであります。

キリスト教の禁止

日本征伐の陰謀

キリスト教がわが國に來たのは戰國時代のことで、織田信長はこれを保護して京都に南蠻寺を建てさせたりしましたが、その後キリスト教の信者は、神様を拜むの



キリスト教の制札

キリスト教は一切嚴禁してあるから、あやしいものを見つけたら訴へ出よ、相當の賞與をやるからといふことが書いてあります。こんな札が村々に立てられました。

し、宣教師も亦こつそりと入り込んで來て布教に力をつくしました。

はいやだと云つたり、中には神社やお寺をこはしたりするものもあつて、どうも日本の國がらに合はないところがありましたので、豊臣秀吉はこれをさしとめ、南蠻寺をこはし、宣教師を國外に追出しました。家康も亦キリスト教を禁じ、度々教會堂をこはしたり宣教師を追つ拂つたり、信者はこれを諭して佛敎に改めさせ、聽かないものは島流しにしたり誅したりしました。併しそんなにしても信者は中々絶えません

大久保長安といふものがありました。諸國の金山を監督して巨萬の富を積み願る贅澤に暮してゐましたが、その死後遺族のものが遺産の分配を争つて幕府に訴へ出ましたので、色々取調べてゐますと、秘藏の箱が一個見つかりました。そしてその中には外國と取りやりした手紙や、キリスト教のことを書いたものがありましたので、一族七人を捕へて流したり斬つたりしました。それから役人を京都や長崎に遣はし、キリスト教の寺院を片つ端から焼き拂ひ、信者を捕へて支那の媽港(今の澳門)に追放したりしました。

秀忠の代になつてからは一層嚴重に禁じました。その頃外國の宣教師は大抵商人の風をして、内々でキリスト教を弘めてゐましたから、江戸・大阪・京都・堺などの町には一切外國人の滞在することを禁じ、キリスト教に關係の無いオランダ人やイギリス人までもこれ等の地方から引き上げねばなりません。併しそんなにしても信者は容易に減りませんでした。

或年にオランダ人の船が日本へ來る途中、一艘の支那船を捕へました。その支那

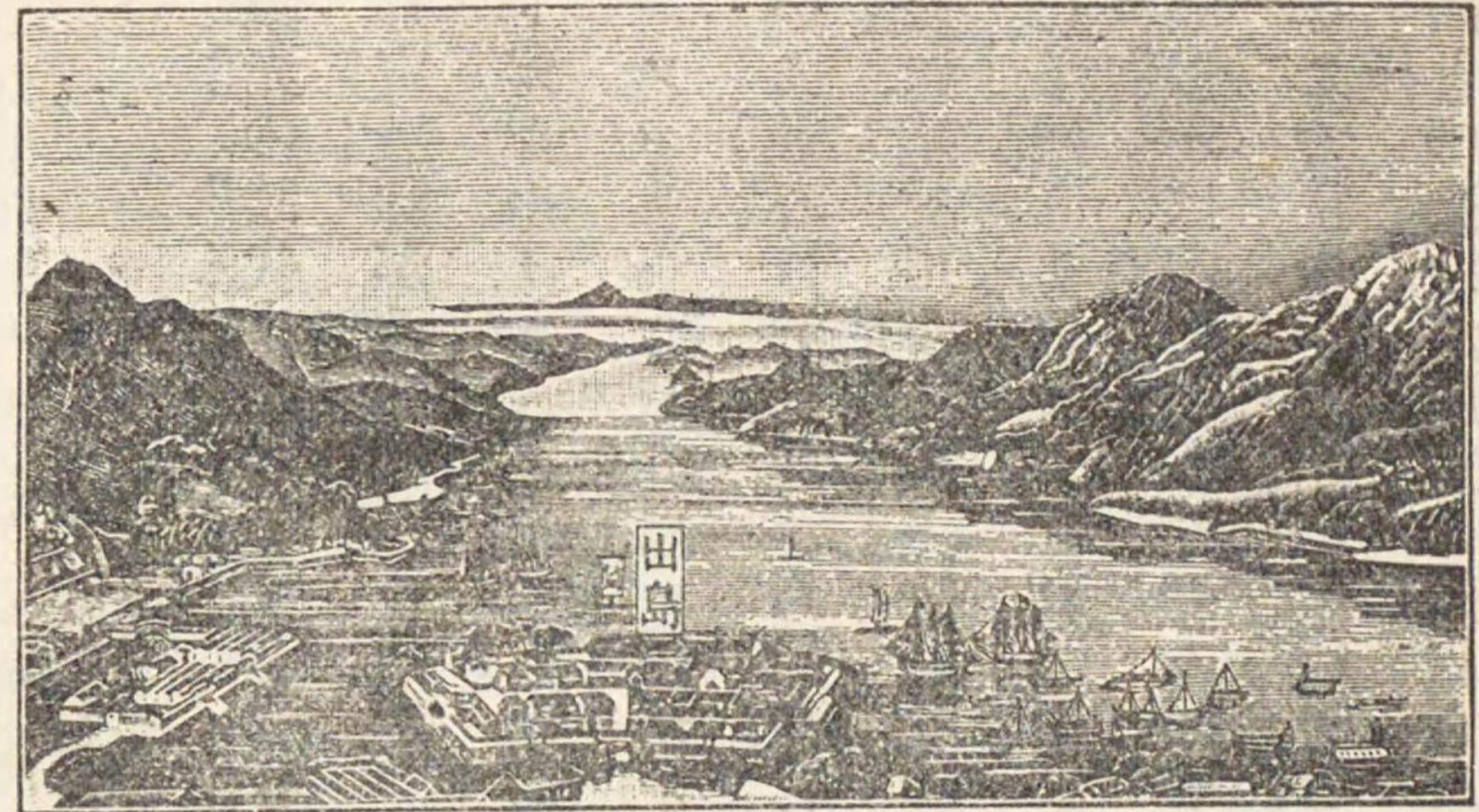
船には常陳といふ堺の商人（實はポルトガル人）と二人の宣教師とが乗つてゐました。そこで、オランダ人はすぐこれを長崎の奉行所に訴へ出ました。奉行は平戸に行つて、その船を調べました處、船の中から大變なものが出ました。それは本國から日本にかくれて入り込んでゐる宣教師へ宛てた書面で、その中に「キリスト教の信者が日本の半分ばかりになつたらすぐに報告せよ、數多の軍艦をつかはすから」といふことが書いてありました。

これは本當に日本を征伐する積りであつたのか、それともたゞ宣教師を勵ますつもりの手紙であつたのか、確かなことはよくわかりませんが、兎に角幕府としては驚かずには居られません。それこそ捨て置いてはどんなことが起るかも知れないといふので、常陳と二人の宣教師とは火あぶりの刑に處し、更に嚴重にキリスト教の信仰を禁ずることになりました。

異國渡海の禁令

犯したものは皆死刑

家光の時代になりますと、日本に來る外國船からは一々乗客の名簿を提出させ、若し宣教師が乗つて來ますと、船長も一しよに焼き殺すことにしました。そこでポルトガルやイスパニヤの人たちも、宣教師を日本へ送らぬやうに骨を折つたのですが、フィリッピン群島に居たイスパニヤの僧侶たちは、布教のためには命を惜まぬといふ熱心さでしたから、少しも禁令を守りません。ひそかに十人の宣教師を一艘の船に乗せて薩摩に上陸させ、商人の風をして巧に役人の目をくらまし、數年間布教して廻りました。これも後には皆捕へられて殺されましたけれど、こうした決死の布教者は常に絶えませんが、幕府は常に探偵ばかりに苦心してゐました。そこで寛永十三年になつて更にきびしい「異國渡海の禁令」といふ法律が出来て外國との交通が嚴重に禁じられました。その法律のあらましを次に掲げませう。



長崎出島

ポルトガル人のみを住ませた特別の区域で本陸とは橋一つで連絡し、全く他から隔てられてゐます。

リスト教の信者になつてゐるかも知れないから、一切歸國させないといふことにし

- 一、日本の船は一切外國へ行くことは出来ぬ。
- 一、日本人は一人も外國へ行くことならぬ。ひそかに船に乗り込んでゐたら死刑にする。
- 一、外國に行つて住んでゐる日本人が歸國したらすぐ死刑にする。
- 一、宣教師を見付けて申し出たものには褒美を與へる。
- 一、外國人が日本へ来て日本人と結婚して生れた子供は、死刑にすべきであるがお情けで外國へ追ひ歸してやるから、再び日本へ来たり又は手紙をよこしたりしたら、本人は死刑とし、親類をも所罰する。

こうして日本人の外國へ行くことを厳禁し、外國に行つて居住するものは、キ

て、これによつてキリスト教の廣まることを絶対に禁じました。そして國內にある五百石積以上の大きな船は悉く破壊させ、全く遠洋航海は出来ないやうにし、又長崎に居たポルトガル人等二百八十七人を媽港に追ひ放ち、長崎の港に出島といふ一區を設けて、ポルトガルの商人をこの中に住ませ、外部との交通を禁じました。併しまだポルトガル人の來航し商賣することを、全く禁ずるには至りませんでした。勿論それは貿易によつてわが國の受ける利益も少くなかつたので、一方ではキリスト教を禁じても商賣は禁じなかつたのです。たゞ日本人の外國に行くことを禁じたので、折角南洋の各地に大に發展しつゝあつた日本人は、これから以後全く日本と關係を絶たれて、遂にその發展を續けることが出来なかつたのは、返すくも惜しいことであつたと思ひます。

信者を嚴重に處罰

更にルソン島征伐の計畫

九州はわが國で一番大陸に近い位置にありますので、昔から外國との交通が最も盛で、ヨーロッパの船も亦多くは九州へ来て商賣しましたから、キリスト教もやはり九州が一番盛でした。中でも今の長崎縣、島原半島では、領主の有馬晴信がキリスト教を信じてゐましたので、人民は殆ど皆信者になつてゐました。そこで家康がキリスト教を禁じた時に、晴信をやめさせて押し込め、子の直純にあとをつがせました。

すると直純はキリスト教嫌ひでしたから、幕府の命令通りに嚴重に信者を調べ出して刑罰を加へ、外國人は悉く追ひ拂ひ、改宗しないものは親しい家來でも構はずに誅しました。併しそれでも信者の心は非常に強くて、どんな刑罰も恐れずにやはり信仰をつゞけてゐました。そこで幕府では直純を日向の國に移しましたが、家來の中には多くの信者があつてひどく主人を恨んで居ましたから、日向について行くものは極めて少かつたといふことです。

幕府では大和五條の城主松倉重政を有馬氏のあとにやつて、キリスト教徒を根こ

そぎ絶やす様嚴重に命じました。勿論重政は大のキリスト教嫌ひでしたから、有馬氏の家臣でこの地に残つたものは皆百姓にしてこれに重税をかけて苦しめ、一方では信者を片つぱしから慘酷極まる刑罰に處しました。

そこで教徒等は、表むきは佛教に改宗したやうに見せかけ、家には立派な佛壇をかざつて置いて、その中の佛像の背後にそつとキリストの十字架の像をかけたなり、或は柱に穴をあけてその中にキリストの像をかくしたり、あらゆる工夫をこらして外部に知れないやうに、やはり信仰を續けてゐました。

重政は色々苦心して信者を探し出しました。そして改宗を命じましたが、信者は中々改宗を承知せず、たとひどのやうなひどい目にあはされても、それは天の神さまの命令として喜んで受けるといふ風でした。それですから或は兩手を縛つて藁の簀を被せてこれに火をつけますと、身體を地になげ付けて火を消さうとあせりつゝ、焼け死んだり、又は水を求めて飛び込んで溺れ死んだりしました。これを「みのおどり」と云つてゐました。又温泉岳の地獄谷に投げ込んだり、縛つたまま、海の中に

沈めたり、或は竹の鋸で首をひき切つたり、あらゆるひどいことをして他の者にも見せて、それによつて改宗させようとしたのです。

それから又重政は、キリスト教の根據地がルソン島であることを察し、家來をそつとこの島に遣はして國の様子を探らせ、その島の人民が柔弱で容易に攻めとることが出るといふ見込が立ちましたので、軍を率ゐてこの島に押し寄せ、征服したいといふことを幕府に願ひ出ました。併し幕府が容易に許可しなかつた間に、重政は病氣にかゝつて死にましたので、ルソン征伐は遂にそのまゝになりました。

天草四郎の出現

夏に咲いた櫻の花

重政が死んで重次の代になりますと、百姓に對する税金は益々重くなり、米や煙草に課税するばかりでなく、爐にも窓にも柵にも一つ一つ税金をかけ、死人があれは穴錢、子が生れると頭錢を取るといふ風で、人民は田畑から出来るものは皆税金

にとられてしまつて、僅かに草の根を掘つて命をつなぐといふ有様、最早こうなつてはぢつと飢え死するのを待つよりも、いつそのこと反亂を起して、一日でも早く死んだ方がよいと考へるやうになりました。

この時天草島に大矢野松右衛門等五人のものが居ました。何れも小西行長の舊臣で、深くキリスト教を信じ、行長の死後は天草から島原のあたりを流浪して、そつとキリスト教を弘めてゐました。たま／＼寛永十四年に家光が病氣にかゝり、長い間なほりませんでしたので、松右衛門等は「將軍は死なれた」と云ひふらし、今にキリスト教も許可されるからと云つて勸めて廻りました。

ところがその年の八月頃、空が大變赤く焼け、時ならぬ櫻の花が咲きました。空が焼けたのは阿蘇山でも噴火して灰が空に上つたためかも知れませんが、櫻の花は氣候の關係で狂ひ花だつたのでせうから、何も不思議なことでは無いのですが、松右衛門等はこれを種に、無智の人たちを惑はしました。「二十五年前に一人の坊さんが書き物をのこした。その中に『二十五年目に天に不思議な光があらはれ、地に

不思議な花が咲き、その時一人の善童があらはれ、生れながら諸藝に達し妙術を心得る』とある。その善童といふのが今天草に居る四郎といふ少年だ』と云つて、十六歳になる四郎を神様のやうに拜んで見せました。

この四郎といふのは、小西行長の家來の益田好次の子です。大層綺麗な上品な子で又大層幻術が上手でしたから、よく人をだましては感心させておりました。そこで多くの人たちは松右衛門の云ふことを信じ「この天草四郎こそは、天のお使であらう。そして困窮してゐるわれ／＼を救つて下さるに相違ない」と云つて、皆喜んでその側に集り、最早眞面目で農業をつとめるものは無いやうになりました。

有馬村の百姓三吉等は、亦ひそかにキリスト教を信じ、嘗て度々天草に行つて松右衛門等と打合せしました。そこで村民を自宅に呼び集めて、四郎出現の話をしてキリストの像を拜ませますと、集つたものは悉くキリスト教信者に戻つて來ました。そして村の代官を殺して他の村々へも手紙を飛ばしました。

騒動起る

神武以來はじめての事件

有馬村の百姓が騒動起しますと「そらやれ」とばかりに他の村々からも騒動が始まり、大抵は先づその地の代官を殺し、次でお寺を壊したり僧侶を殺したり、それ等が集つて二隊に分れ、一つはすぐに島原の城を圍み、一つは有馬村にあつて様子を見ておりました。

ところが折わるく領主は江戸へ參觀してゐましたので、留守の老臣等は使を江戸にやるやら、肥後の細川氏や佐賀の鍋島氏の處へ援けを乞ふやら、町の人民等を城内へ避難させ、別に一隊の兵を出して有馬村の賊を討つなど、それは／＼大變な騒動になりましたが、當時の法として幕府の命令が無い以上は、自分の領内から外へ兵を出すことは出来ませんでしたので、細川氏も鍋島氏も國の境まで兵を出したきりで、援けに行くことも出来ず、おつとながめてゐるのみでした。

さて一方賊のもの共は、集つて色々の評議をしてゐましたが、「今度のことは誠に神武以來はじめての大事件で、宗門のためにこの上もないよろこばしいことだが、これから島原の城を乗つとり、日本中をキリスト教に歸依させようとするのに、一



天草四郎の旗
原城の本丸に掲げてあつたもので文字はポルトガル語で、「聖餐はほむべきかよ」と書いてあるのです。

ではないか、何萬といふ人の命をお預けするのに、他に誰があるものか」といふやうなことになつて、「では使を立てよう」と、各村から一名づつの代表者を出し、四郎の居る天草島へやることになりました。

統の頭となるものが居なくては、どんな失敗が起るかも知れないが、皆の人はどう思はれるか」といふ者が居ました。すると「それは全くその通りだが、誰を大將にしたらよいか、一寸考へつかないが」「いや、それは思案するまでも無いことだ、天草四郎どのがよい

その頃天草島では、四郎のすゝめによつて已に三千人の信者が出来てゐましたがそこへ島原からの代表者等がやつて来て「これまで我々は政府の禁令によつて已むなく佛教に改宗してゐましたが、このたび天童様のあすゝめにより、村々の者何れもキリスト教に立ち歸りました。ところが島原の代官はきびしく取調べ、召し捕つて色々の辛き目を見せた上、はては死罪に行つて居ります。そこで島原一郡の者共は、やむなく一揆を起したのですが、どうか天童様を大將と仰ぎ、その御命令によつて身命を擲ち、宗門のために力の限りを盡したいと存じます」と申しました。

意外に盛な賊の勢

天草島は全く四郎のもの

四郎はその時大矢野郷宮津村といふ處で説教をしてゐましたが、使のものゝ口上を聞いて大に喜び、父の好次と相談の上で「使のおもむき承知致した。近頃信者がだん／＼増加すると聞いて喜んでゐた所だ。俺を宗門の頭領に仰ぎたいといふのも

尤もに思ふ。愈々使のいふ通り相違ないといふことならば、村々の信者の姓名を書きならべ、宗門のために一命を擲つて働くといふ誓書を差出すがよい。さすれば當方にも三千の信者がゐるから、すぐにも押し渡つて行つて、宗門に反對する奴等をば片つ端から打ち殺し、宗旨再興に努力することにしよう」と答へました。

そこで使のものは喜んで歸つて、村々の信者の名簿を作つて誓書と共に四郎の所に差出しましたので、四郎は四五十人の供を連れて島原に渡り、村々の庄屋などを集めて密議をこらし、「先づ一萬二千人を以て長崎へ押し寄せ、信者になるかならぬかを聞き届け、なると云つたら人質をとつて歸り、ならぬと云つたら町の民家に火をつけて、人民を悉く打ち殺し、それから島原の城に押し寄せ、一生懸命の戦をして是非とも城を乗り取り、こゝを根據としてやらう」といふことにしました。

ところで、一方天草島の方は、唐津藩の領地になつてゐましたので、すぐに唐津に使をやりましたが、唐津の大名も參觀で江戸に行つてゐましたので、留守居の老臣が士卒二千餘人をつれて天草に渡りました。そこで四郎も千五百人をつれて島原

から歸つて来て、こゝにはげしい戦争となり、唐津の兵は敗れて、福岡城に逃げ込んだまゝ、再び出て戦ふ力もなくなり、天草の地は全く、四郎の勢力範囲となりました。

そのうちに急使が大阪城代の處まで届きました。城代阿部正次は、江戸まで知らせて將軍の指圖を待つてゐては、まだこの上二十日ばかりもかゝりますから、その間に賊の勢はいよいよ盛になるだらうと思つて、すぐに豊後目附に命令を下して九州各地の大名の兵を集めるやうにしました。一方江戸でも間もなく報せがありましたので、老中が相談して、板倉重昌等を遣はして九州諸侯の兵を指揮させることとし、又九州の諸大名中參觀で江戸に来てゐるものは、全部國に歸して戦争の用意をさせました。

併し幕府ではまだあまり大事變だとは思つてゐませんでした。それで板倉重昌のやうなたつた一萬五千石の小大名を遣はしたのですけれども、これでは九州の諸大名を威服することは出来ません。重昌は九州へ下つて見て、意外にも賊の勢の盛

なのを見て、先づ細川氏に天草の賊を討たせ、鍋島氏に島原の松倉氏を援けさせました。すると天草の賊は細川氏の兵が來ると聞いて、皆海を渡つて島原に逃げ込み島原の賊も島原城を攻めるのを中止して原城にたてこもりました。

板倉重昌の奮戦

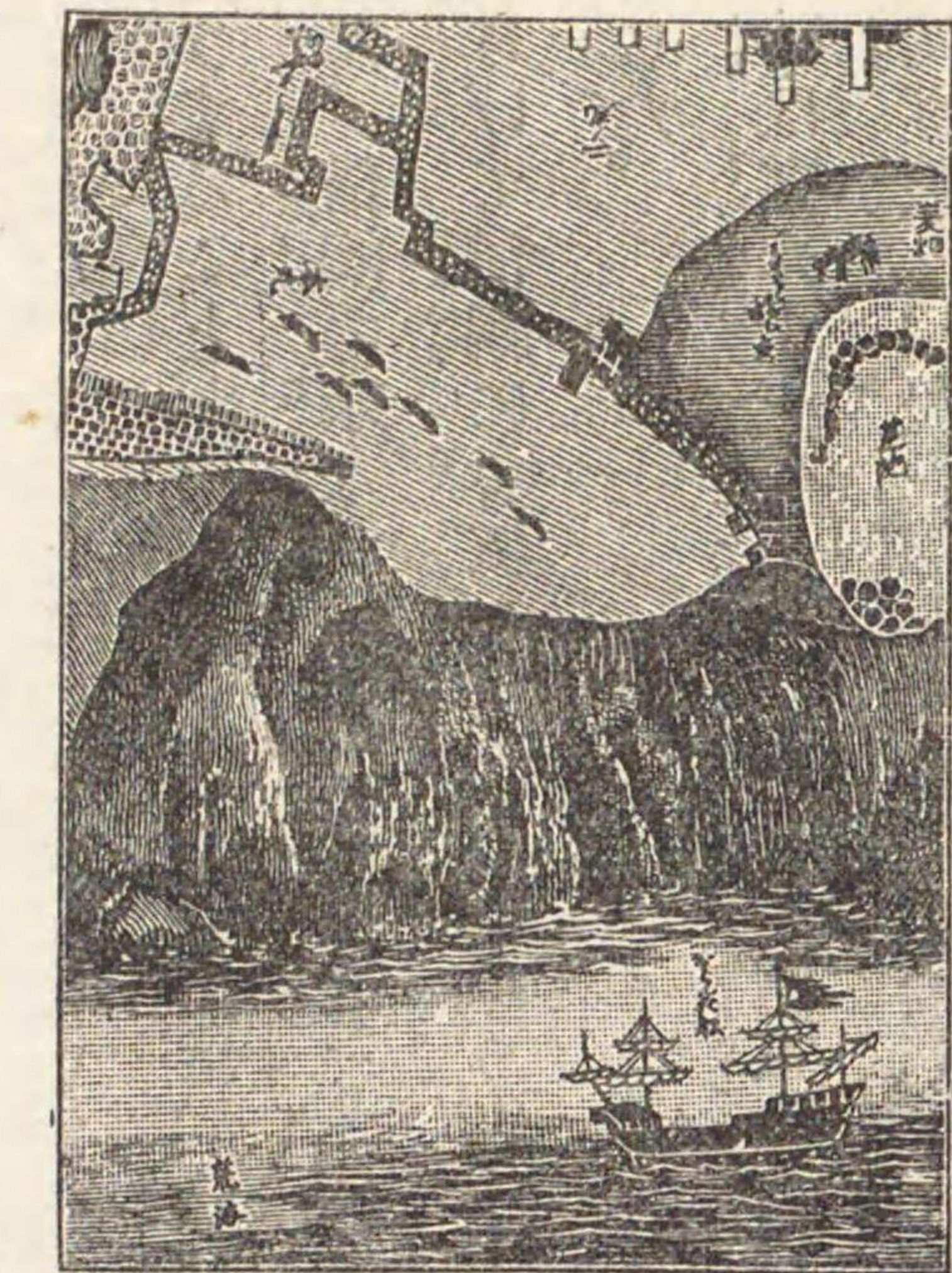
死をもつて責任をつくす

原城といふのは島原半島の南端、今の南有馬村にあつて元有馬氏の居城でした。松倉氏になつてからこの城をこはして島原城を築いたので、そのこはれた城址に賊は立てこもつたのです。三方は海に臨んで削れる如き絶壁であり、前面には小さい丘が起伏してほんとに天然の要害です。

總大將は天草四郎時貞、浪士十三人を選んで參謀とし、手分けをして戦争の用意をととのへました。先づ口津の港に押し寄せて、米倉を打ち破つて米俵を取り出し、これを城中に運んで兵糧とし、一方では湟を掘るやら城壁をつくるやら、何千

といふ人が或は車をひき或は鋏を振り、土を掘るもの、石を運ぶもの、女は飯をたいて握り飯をつくるやら、要所要所には歩哨を立て、通行人を調べ、槍組・鐵砲組などが出來て夫々手筈を定め、城壁には白旗を建てました。城内にこもつた人数は男女合せて三萬七千人

と云つてゐました。



原城の圖

昔の圖ですからつきりしません。が、海岸が絶壁になつてをり、その上に城址のある模様が大体わかります。

板倉重昌は九州諸大名の兵を率ゐて原城をかこみましたが、城壁が高く鉄砲の弾がとゞきませんし、賊の勢

が中々盛でわが兵に死傷が多く、とても急激に攻め降すことは出來そうでありませんでした。そこで諸軍に命じて竹の束を作つて櫓を築かせ、壘を高くして持久戦の用意をしました。その間一度總攻撃をやりましたけれど、命令がよく行き届かない

で諸隊の一致を缺きましたので、全く失敗に終つたのでした。

この様子を聞いた幕府では、板倉の様な身分の低いものをやつたのはよくなかつたと思つて、老中松平信綱が自ら九州に下り、重昌に代つて諸軍を指揮することになりました。するとこのことを聞いた重昌は、「自分の力が足りないために、使命をまうることが出来ない」とあつては、責任上おちつとしては居られない。武士の意氣地だ、信綱の來ない間に斷じて城を攻め落さう。若しも陥らなかつたならば、どの面さげて信綱に會ふことが出来るやうか」と、堅く死を決して、急に總攻撃をはじめました。

時は寛永十五年正月元日、諸軍一齊に城に逼りましたが、賊兵も勇氣をふるつて拒ぎ戦ひ、矢と彈とを亂發しましたのでわが軍の死傷頗る多く、相次で破れ退きました。重昌これを見て親ら兵を率ゐて進撃し、湟を越え、壁を攀ち登つて城内に飛び込み、奮戦して遂に名譽の戦死をとげました。

日露戦争に旅順が中々落ちなかつた時、司令官をとりかへたらといふ話がありま

した。するとこのことをお聞きになつた明治天皇は「司令官をとりかへたら、乃木は屹度死ぬだらう。とりかへることは見合せよ」と仰せになつたと傳へられてゐます。與へられた任務を果すことが出来なかつたら、死んで申譯をするといふのが、責任を重んじる日本精神の尊い所なのであります。

鎖國令

これもキリスト教のため

その後間もなく信綱等が島原につきました。そして敵城の様子を見ますと、防備が頗る嚴重ですから、これは急に攻めても落すことは出来ないと思へ、持久戦の計畫を立てました。この時九州四國の諸大名悉く兵を出しましたので、合せて十二萬五千人となりました。信綱は又長崎のオランダ商館に命じ、その船を原城の沖に廻させて、城に向つて大砲を打ちかけさせました。併し農民の一揆に外國人の援けを借りるのは國辱だといふ者があつたので、信綱は間もなくオランダ船を長崎に歸

らせました。

信綱は矢文と云つて矢に手紙を括りつけて城中に射て、賊に降參をすゝめました。けれども賊はこれに應じませんでした。そこで鑛夫を呼び寄せて地下にトンネルを穿たせ、そこから城中に攻込まうとしましたところ、賊もこれを知つて城内から穴を掘つて、こちらから掘つたトンネルを捜しあて、松葉を焚いて坑を燻べましたので、わが兵は遂に城内に入ることが出来ませんでした。

併しそのうちに城内には食糧が缺乏して來ましたので、わが軍營を掠奪しようとして闇夜に乗じて斬つて出たりしました。そこでわが軍も愈々二月二十七日に總攻撃を開始し、力戦奮闘遂に城壁を乗り越え、二十八日には本丸に迫つて火を放つて攻め、城内の賊ども、老人も女も子供も殆ど残らず殺してしまひました。そして殘賊がかくれては居ないかと、温泉岳の山中をくまなく捜しましたが、遂に一人も見つかりませんでした。

かくて信綱等は四月に江戸に凱旋しました。この騒動を島原の亂と云ひます。こ

れから以後幕府はいよいよキリスト教の害の恐ろしいのを感じ、更に一層嚴重にこれを禁ずることになりました。そして斷然ポルトガル船の來航を禁止し、若し入港するものがあつたら直ちにその船を焼き拂ひ、乗つてゐるものは悉く斬罪に處することになりました。これが寛永十六年七月のことで、世に鎖國令と云つてゐます。その翌年ポルトガル人が又々長崎に來て、キリスト教を唱へ且貿易をする様にと願ひ出ましたので、その船を破壊し六十四人のポルトガル人を悉く殺しました。こうしてオランダ人と支那人のみ長崎の一港に來て貿易することを許し、他の國はイスペインヤもイギリスも一切來航を禁じたのです。これから約二百年の間が所謂鎖國時代で、國內は太平が續きましたけれど、國民は西洋の文明に遠ざかつて世界の進運に後れ、國民の海外發展の氣勢はくぢけて、世界の未開地はヨーロッパ諸國の取るにまかせることとなりました。

後 光 明 天 皇

朝 廷 と 幕 府

無 理 を 押 し 通 す 武 士

武家が幕府といふものを開いて自ら政治をする以上は、一々朝廷の御指圖ばかり仰いで居るわけには行きません。どうしても一切の政治を全然お任せ願はなくは思ふ様に世の中は治まらないわけです。それですから幕府は、皇室を尊びまつることは忘れませんけれども、政治上のことについては常に朝廷を抑へまつる様にしました。これは頼朝の開いた鎌倉幕府でも、尊氏のはじめた室町の幕府でも同様でした。家康は常に頼朝を手本としてゐましたが、表向き皇室を尊信して、内實これを抑へまつつたことは、鎌倉時代よりもずっと巧妙でありました。



後 水 尾 天 皇

重で、一步も譲るところがありませんでした。

家康は後水尾天皇の御即位について色々力をつくしましたが、次で秀忠はその女

鎌倉幕府が京都に六波羅探題を置いたやうに、江戸幕府では京都所司代といふものを置きました。表面は訴訟及び神社・佛閣のことを司り、皇室を護衛しまつるといふことになつてゐましたが、その實は朝廷の御様子をさぐり、公卿たちの行動

を監視するのが最も大きな役目でした。所司代の中では四代目の板倉重宗は最も評判がよく、秀忠・家光・家綱三代の間、前後三十五年間もその職に居て、京都は非常によく治まり、泥棒が一人も居なくなつたそうで、後の世までも京都の人たちは「重宗の名を書いた紙を入口に貼つて置けば、盗難よけになる」と云つてゐました。併し重宗の朝廷に對しまつる態度は頗る嚴

和子を天皇の女御となしまつりました。武家の女が入内せられたといふことは、これまで例の無いことで、公卿たちは「前例が無いから」と云つて容易に賛成せず、上皇も亦中々お許しがなかつたのですが、藤堂高虎等の盡力によつて遂にお許しが出ることになつたのだといふことです。

その後秀忠は、天皇平素の御行状について色々と申し立て、御側の公卿共がわるいのだと云つてこれを罰したりしました。又入内の御儀式の時には、宮中の女官たちが門外に出迎へ、籠の簾を掲げられるのが例となつてゐるので、そのことを申入れますと、お附きの武士は「そんなことは將軍から命令されてゐない」と云つて、故事も典禮も無視してそのまゝ御門内へかつぎ入れたといふことで、如何に幕府の勢威が朝廷を壓してゐたかゝわかるのであります。

天皇の御憤

あまりにひどい幕府の横暴

秀忠が外戚となつてからは、幕府の横暴は益々甚しくなりました。公卿の官位なども天皇のお心のまゝにならず、御料地や金銀など献上しても、少しも御儘にはならなかつたといふことです。それから米にしても、お金にしても、御節約になつて餘分が出来ますと、奉行から利息をつけて人々に貸し付け、王の米何程、王の金いくらと云はせて居たそうです。もとより朝廷の御存知ないことですが、神代以來絶えて無いことだといふので、公卿たちも大層憤つてゐました。

そのうちに僧侶の紫衣褌奪事件といふものが起りました。紫衣といふのは學徳秀でた僧侶に勅許せられるもので、その際には必ず天皇から綸旨を賜はる例でありました。ところが幕府は公卿法度といふ法律の中に、「幕府に相談なしにみだりに紫衣をお許し願つてはいけない」と定めてゐたのですが、それにも拘らず大徳寺と妙心寺の僧侶の中に、この法度にそむいて紫衣を受けたものが七十餘人あることがわかつて、老中等は相談の上これを全部褌奪してしまふことにしました。

併しそうなると天皇から賜はつた七十餘通の綸旨は、全く反古になるわけですか

ら、これは大變だといふので、傳奏といふ役から所司代に傳へて幕府をお諭しになつたのですが、所司代の重宗はどんなに云つても頑として聞き入れませんでした。ところが紫衣を奪はれた七十餘人の中に、どうしても幕府の命令に従はないものが四人居ました。すると幕府は、これ等四人の僧侶を捕へて、悉く奥羽地方の田舎に流しました。

こんなことがあつたので、後水尾天皇は益々深く憤らせ給ひ、遂に御位を皇女興子内親王にお譲りになりました。他にも皇子の方は澤山もありになつたのですが、秀忠の女の生み奉つた内親王にお譲りになつたのです。かくして女帝が即位せられたのですが、これは奈良時代からこの方久しく絶えて居た例で、朝臣の中にはこれをお諫めするものもありましたけれど、事情全く已むを得なかつたものでせう。この天皇を明正天皇と申し上げ、その時御年七歳であらせられました。

この御讓位のこととは全く天皇の御意に出で、誰にも御下問がなかつたので、公卿たちも非常に驚いた程でした。板倉重宗も驚いて公卿たちに尋ねましたが、誰も知

らないと云ふのみです。たゞ一人中院通村は「僧侶に紫衣をお許しになれば、幕府がこれを奪ひとるといふ様なことで、何とて御位においでなさることが出来やう」と申しました。そこで重宗は早速江戸へ報告しましたが、秀忠は頗る機嫌がわるく「舊例もあることだから隠岐へでもお遷ししようか」と申しましたが、家光が大に諫めて「これは御尤ものことですから」と云つたので、そのまゝになりました。

あし原やしげらばしげれものがまゝ、
とても道ある世とは思はず

とお詠み遊ばした大御心のうち、拜察するのも恐懼に堪へない次第であります。

皇室の御威光加はる

切腹はようしなかつた重宗

明正天皇に次で位におつきになつた後光明天皇は、御生れつき極めて英明にましまし、幼い時から殊の外學問がおすきで、非常に深く御研究になりました。十五歳

の御時には、學問の正邪を御判別あらせられて、「支那の古い學問を研究するのに、漢唐時代の解説は粗雑で淺薄である。それよりも宋の程朱の説が、理義も精明で至公平正を盡してゐるから、萬世の模範とすべきである。今より以後は君臣共に必ず程朱の説に従つて學問を勵めよ」といふ意味の御勅語がありました。

又「和歌はわが國の風であるから、その風の正しいのを貴ぶ。聖人の道を知つて身の行ひが正しかつたならば、詠んだ歌の風も正しくて、人道の助けとなるであらう。必ず聖人の道を本とせなければならぬ」と仰せられ、「源氏物語のやうな淫猥なことを書いた書物は、人道に害があるから讀んではいけない」と云つてお退けになりました。

天皇は又質素儉約を重んぜさせられ、承應二年に御殿が火災にかゝつて、まもなく新に御造營申し上げた時にも、室内の御道具など派手なものはお止めになりました。又將軍家をば極めて御優遇遊ばしました。けれども勢にまかせて幕府がわがままなふるまひをするのに對しては、これを抑へて皇室の御威光を盛になさらうとお

考へになつてゐました。

ある時御父後水尾上皇が御病氣におかゝりになつた時、非常に御心配あらせられて御親ら御見舞に行幸あそばさうとして、これを所司代の板倉重宗にお云ひつけになりました。すると重宗は「行幸の先例がありませんから、一應幕府へ問ひ合せて見ませう」と申しました。天皇は非常にお怒りになつて「か様なことまで幕府の命令がなくてはならぬとは何事か、それほど朕の外出が氣にかゝるなら、皇居から上皇の御所へ長廊下を作らせ、廊下づたひにおたづねすることゝしよう」と仰せられ、急に廊下をお造りになつてそこから上皇の處へ御見舞にお出になりました。

又天皇は擊劍がお好きでありましたが、所司代の重宗はこれをお止め申さうと思つて「この事が幕府に聞えますと屹度喜ばないでせうから、どうか堅くお止め下さい。若しお止め下さらないならば、臣は切腹の覺悟でございます」と申し上げました。天皇は黙つてこれに應ぜられませんでした。が、あまり度々お諫め申しますので「朕はまだ武人の切腹を見たことが無いから、早速南殿に席を設けて切腹するがよ

い。親しく見物するであらう」と仰せられました。いくら何でも御前で切腹など出て来るものではありませんから、重宗も恐れ入つて重々お詫を申し上げました。幕府でもこの事を聞いて、一同恐縮したといふことです。

こうして朝廷の御威光はだん／＼加はつていつたのですが、惜しいことに天皇は御病氣のため間もなくお崩れになりました。御在位わづかに十二年間に過ぎなかつたのです。常々臣下のものには龍顔を和らげさせられ、何事も簡易を旨として舊弊を除かせられ、誠に寛仁の御徳たかくあらせられましたので、崩御と承つた時の人々の驚きと悲みは又一通りではありませんでした。

學問と産業

學問の奨励

神童と云はれた藤原惺窩

奈良時代から平安時代にかけて盛であつた學問も、源平二氏の頃から打ち續く戦亂のために次第に振はなくなり、戦國時代となつては學問と云へばたゞ公卿と僧侶のみに限られて、一城のあるじ一軍の大將と云はれる人でも、手紙もろくに書けない様なのがあり、學問の出来る僧侶を側に置いて、秘書官にしてゐたものも少くありませんでした。ところが徳川幕府の世となつてからは、世が平和となつて人民に餘裕が出来ましたので、一般の人々までが學問に心を向けるやうになり、そこへ代々の將軍が學問を奨励しましたから、種々の學問がこれ迄に例の無いほど盛になつ

て行ききました。



藤原惺窩と林羅山

今川氏の處に居ましたが、その今川氏が學問の家でありましたので、その頃家康も

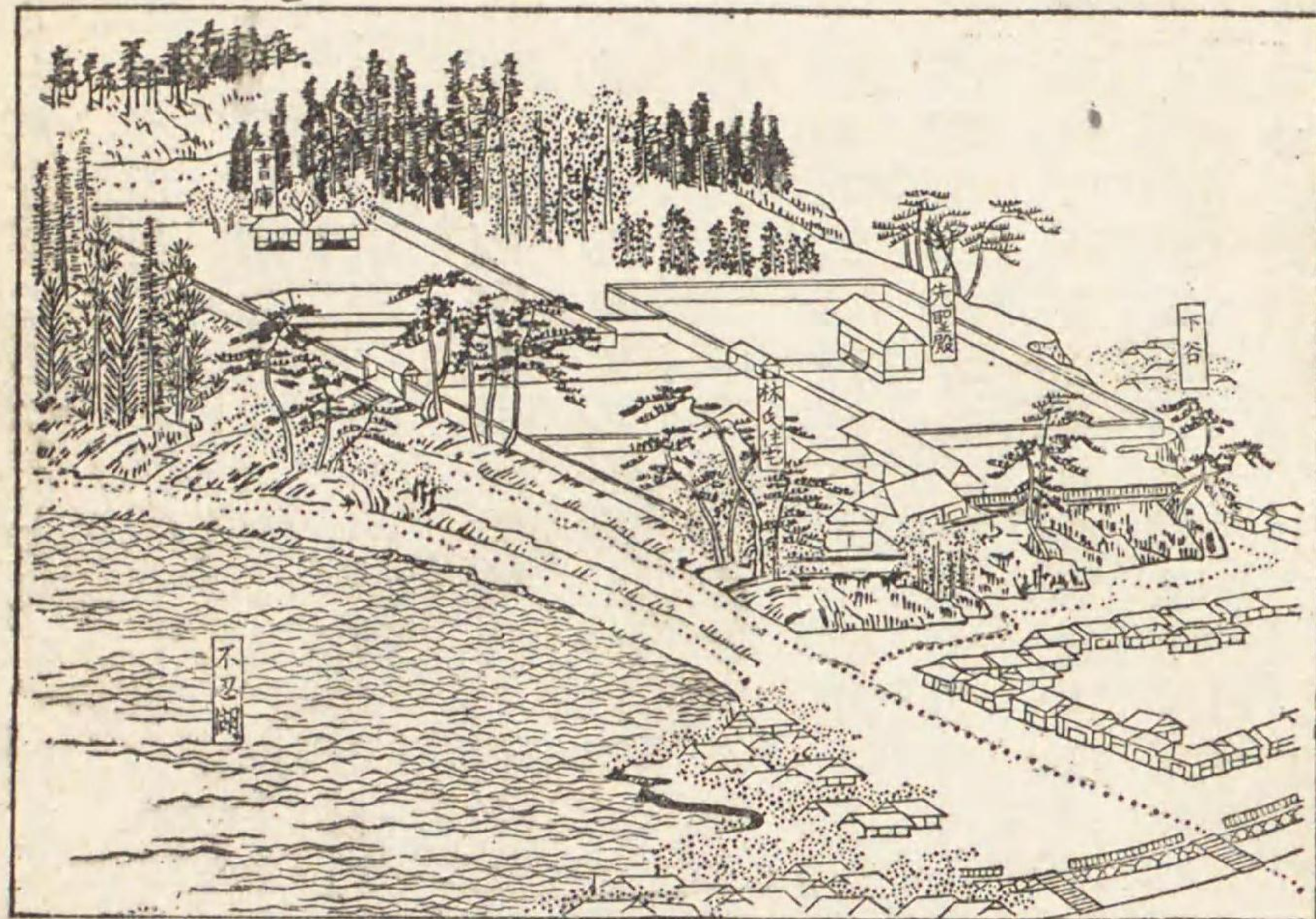
これ等の學問は大別すると四種になります。漢學・國學・洋學及び文藝であります。その中國學と洋學のことは次の卷にゆづり、文藝のことは次章で述べますから、こゝでは主に漢學について記すことにしませう。

家康は、世の中を治めて行くには、學問を盛にして國民に人道を知らせることが第一だと考へました。それで公卿法度にも武家法度にも、第一條に學問の大切なことを述べ、學問の出来るものは、位は低くても不時に陞進させることにしました。元來家康は子供の時人質となつて

僧の大原について學問を修業し、文學を習ひ兵書にも通じてゐました。それですから朝鮮征伐で九州の名古屋に行つて居た時も、藤原惺窩を陣中に招いて講義をさせ、後にその門人の林羅山を召して幕府の顧問役としました。

藤原惺窩は播磨の人であります。子供の時から非常にえらいので世間では神童と稱してゐました。坊さんになつて色々の經文などを研究してゐましたが、京都の名僧たちも惺窩には叶はないと云つて舌を捲いてゐました。

惺窩は日本に學ぶほどの先生が無いので、支那に留學しようと思つて、薩摩の坊の津に行つて船の出る日を待つてゐました。ところが宿屋の窓にのぞいて居ますと毎朝書物を読む聲が聞えます。聞いてゐますと非常に高尚な文章で、而も自分の知らないものでしたから「こんな田舎に誰がこんなえらい書物を教へてゐるのか」と思つて、よく聞いて見ますと島津日新齋が明から求めた朱子學の書物でした。惺窩は大に驚き、これさへあればもう支那へ渡る必要は無いと云つて、京都に歸つて遂に朱子學の大家となりました。その門人となつて教を受けた公卿や大名は頗る多か



忍岡の聖堂

これは林羅山が江戸の上野不忍池のほとりに立てた塾舎です。綱吉の時にこれを湯島に移しました。

かくて羅山は幕府から年俸を貰ひ、且宅地を江戸に賜はつたのですけれど、暇さへあれば京都に歸つて門弟を教へ、何度も江戸と京都の間を往つたり來たりしました。後家光に仕へてからは江戸に常住し、子弟を集めて教授しました。五代將軍綱吉は又學問が好きでしたから、將軍となつてからは、しきりに學問を奨励しました。即ち林羅山の起した學校を擴張して湯島にうつし、自分も亦こゝで經書の講義をしたりしました。綱吉は殊に講義をす

つたといふことです。

將軍自ら講義

殘忍亂暴な行は無くなる

林羅山は今の石川縣の人で、後に髪を剃つて道春と云ひました。子供の時から學問が好きで、十四の年に建仁寺に行つて儒學を修めました。多くの坊さん達は、羅山が學問のよく出来るのを見て、「この人が坊さんになつたら、屹度名僧となるだらう」と云つてゐましたが、羅山は僧侶になるのが嫌で、十八の年から塾を開いて、生徒を集めて講義をしました。

そのうちに徳川家康に見出され、江戸に行つて家康の相談相手となり、幕府の出來始めにあたつて色々重大な仕事をしました。幕府から出した色々な法度、即ち法律は大抵は羅山の考へ出したものであり、その外外國に遣す國書なども、多くは羅山が作つたものであります。

ることが好きであつたと見え、四十八の年から近臣や諸大名・諸役人を集めて毎月六回づつ周易本義の講義をして、八ヶ年にしてこれを終りました。一體我が國でも、支那でも、國王とか將軍とかいふ身分の高い人たちは、學者を呼んでその講義を聴くのが常で、自分で講義をして家臣に聴かせるといふのは稀なことです。又聖徳太子のやうに佛敎を講ぜられた方はあつても漢學を講じた人は無く、あつてもほんの一章・一段に止まるのが普通ですのに、八ヶ年の久しい間、二百四十回も連續講義をして少しも倦かなかつたといふのは、ほんとに珍らしいことと云はねばなりません。

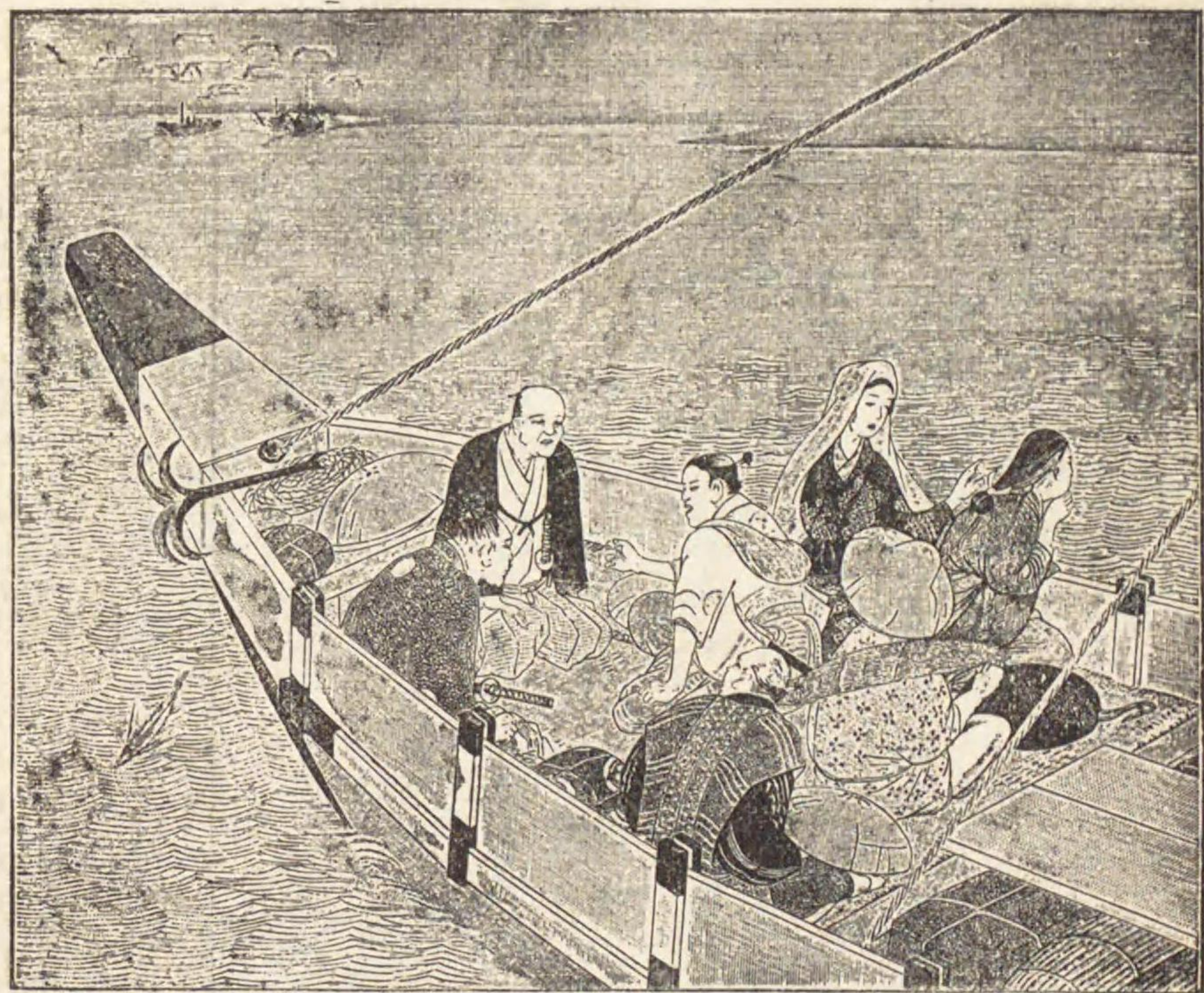
そんな風でしたから大名も旗本も皆學問に心を向けました。學者はあちらからもこちらからも引つ張り取りといふ有様で、書物の印刷發行も盛になり、亂世の名残りとしての殘忍亂暴な風は全くすたれ、人々の行ひは非常におとなしく眞面目になつて來ました。

雪の中の教訓

この母にしてこの子あり

學者が優遇せられると、われも〜と學問に志す様になつて、民間には續々として學者が輩出しました。そして其頃の學問といふのは、儒者と云つて身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平かにする學問でしたから、學者は同時に品行の正しい徳の高い人でした。それですから中江藤樹のやうに、近江聖人などと呼ばれる人さへも出たのです。熊澤蕃山・山崎闇齋・木下順庵・伊藤仁齋・新井白石・室鳩巢・貝原益軒・山鹿素行などと、皆さんが一度はその名を聞いたことのある様な學者が、ほんとに數へ切れないほど澤山ありました。

中江藤樹は今の滋賀縣の人であります。父が早く死んだので祖父につれられて伊豫の大洲に行つてゐました。十一歳の時大學といふ書物を讀んで「天子より庶人に至るまで、皆身を修むるを以て本となす」とあるのを見て「學べばどんな聖人に



貝原益軒

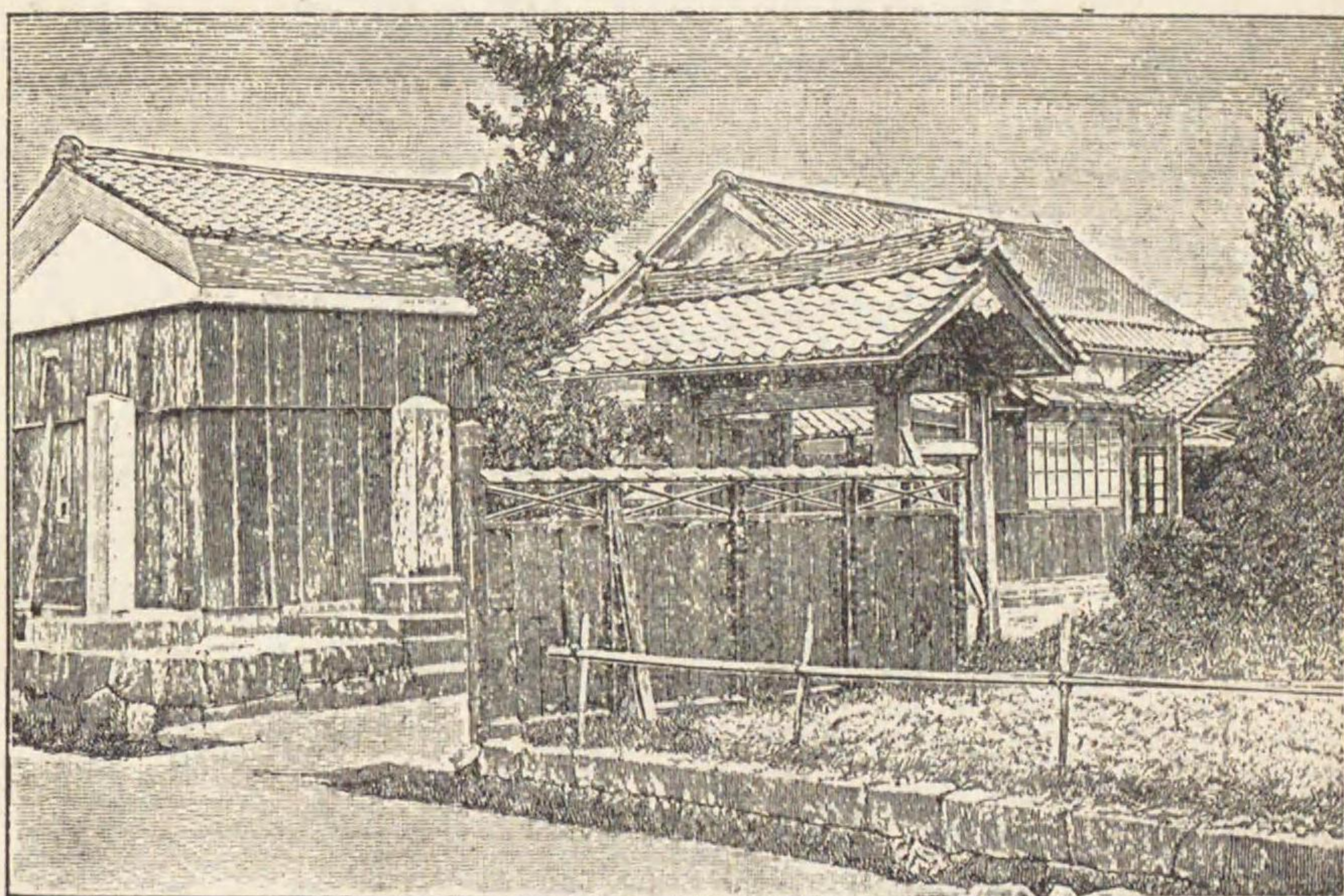
今の福岡の人であります。非常に學問がよく出来ても、少しも自慢することなく、嘗て舟に乗つた時、同船の青年が自慢さうに學問の話をしたのに、全く知らぬ顔をしてゐたといふ話が傳はつてゐます。

もなれるだらう」と深く決心を固めました。そして夜に日をついで一生懸命に勉強しました。

藤樹は母が郷里にあつて獨りさびしく暮してゐるのが氣にかゝつてたまりませんでした。母は冬になるとあかぎれの切れる癖があるので、どうかしていい薬で

もあつたらと思つてゐました。するとふとしたことからあかぎれの妙薬があることを聞いて、それを買ひ求めましたが、今頃とは違つて郵便がありませんから、それを郷里へ送ることが出来ません。思案にくれた末たうとう自分で持つて歸る決心をして、たゞ一人遙けき旅路に上りました。伊豫から近江まで、今頃の汽車や汽船で旅行するにしても、子供には随分困難な旅です。況やテク〜と歩いての旅ですから大變です。日數を重ねて今治まで来て、そこから便船を求めて乗せて貰つて、大阪へついで又徒歩をつゞけ、何十日ぶりにやつとわが家につきました。

ところがその日はとても大雪が積つてゐました。その雪を踏んでわが家の門まで歸つて見ますと、母は井戸ばたに立つて水を汲んでゐました。「お母さん」と云ふのも早涙聲「お母さん、水は僕が汲みますから早く入つて火に暖つて下さい」と走り寄りますと、母は振りかへつて「お前どうしたのだ。何しに歸つたのだ。もう學問はすつかり出来たといふのか、お祖父さまはもういゝから歸れと仰つたのか」「いいえ、そうではありませんが、あかぎれの妙薬を求めましたから、これをつけて頂



藤樹書院

中江藤樹が子弟を集めて教へてゐたところです。藤樹は學問を實際に行つて見せましたから、附近の人たちは皆その感化を受けて行ひのよい人になりました。

き度いと思ひまして、そしてこの寒い冬の間だけでも、お側に居て孝行がしたさに「いけません、お前は學問をすればいいの。母のことなんか心配しないで、早く立派な學者におなりよ。お前が學問をやめて歸つて呉れたのでは、母はちつともうれしくありません。それでは孝行にはなりません。さ、早くおいで、すぐにお祖父さまのところにおいで」

こう云はれてはどうともする

ことが出来ませんでした。その間にも釣瓶の水は凍り、母の手のあかぎれからは赤い血が流れてゐました。藤樹は長の旅路の疲れを休めることも出来ず、そのまゝ雪をふんで又伊豫まで行かねばなりませんでした。

泣く泣く出て行く可愛い後姿を見て、母はどんなに泣いたこととせう。抱き上げて炬燵にでも入れて、せめて一晩でも寝させ度いのは山々でしたが、それではこの子の爲めにならないと思つて、わざと心を鬼にして叱りつけたのです。

併しこうした賢いお母さんがあつてこそ、藤樹も立派な學者となり、近江聖人とまで云はれる様なえらい人になることが出来たのです。學問が出来てからの藤樹は母の側にあつて孝行をつくし、何處から迎へられても應じませんでした。

産業交通の進歩

車ひきが巨萬の財産家

學問が盛になると共に産業交通等も亦非常に進歩しました。家康が諸外國との貿

云へば鐵道の驛前でバスやタクシーが澤山ある様なものです。



宿場

宿屋があり、馬や駕籠が備へ付けてあります。こゝまで来て馬などを雇ひかへるので、これを次々と云ひます。東海道五十三次とは、次ぐ場所が五十三ヶ所あったからです。

交通機關としては馬

るのを知つて
る方も少くな
いでせう。
道路に沿ふ
て所々に宿場
が、出来まし
た。そこには
宿屋があり、
馬や人夫が備
へてありまし
たので、今で

易を盛にしたのも、國の富を増さんがためでした。



並木道

松並木の街道は、まことに景色のよいもので、道につかれました旅人の心を慰めるに充分であります。

家光以後は已むなく鎖國するこ
とになりましたけれど、世が平和
になるにつれて、鑛山が開けたり
荒地が開墾せられたりしました。
佐渡の相川金山や、但馬の生野銀
山などもこの頃から盛になり、幕
府はこれで金貨や銀貨を澤山作り
ました。
交通も亦次第に便利になりました。
た。參觀交代で全國の大名が江戸
へ集るので、江戸を中心として四
方に向つて立派な道路が出来まし
た。道幅が廣くなつて松並木が植

と駕籠が主に用ひられました。大井川には橋が無かつたので、雲助が蓮臺といふものに客を乗せて川を渡つてゐたことは、皆さんもよく知つてゐるでせう。

川の交通も亦この頃から盛になりました。わが國にはあまり緩かな流れの川がないので、大抵は小さい舟を通はすにしても、随分危険な處が澤山ありました。それで角倉了以といふ人は、千辛萬苦工夫をこらして、甲斐から駿河に出る富士川や、京都に近い加茂川・保津川等の川底を浚へて舟を通ずるやうにしました。

海の交通は外國へ行くことを禁ぜられた代りに、國內の海運が非常に盛になりました。わが國は海岸によい港が澤山あるので、陸の交通の不便を補ふには都合がよく、波の静かな瀬戸内海の如きは、神代の時代から交通が盛でしたが、この時代になつてからは、太平洋や日本海方面の海運も盛になりました。それには河村瑞賢は殊に大きな功績をのこしました。

瑞賢は江戸の人で元來は車ひきでしたが、生れつき才智に富んでゐましたので、川に流れて来る瓜や茄子を拾つて漬物にして賣り歩いたり、後に普請場の人夫頭と

なり、遂には幕府の命によつて、奥羽の荒濱から太平洋を下つて江戸に通ずる近廻りと、西岸の酒田から下關を通つて江戸に達する遠廻りとの兩航路をはじめて決定し、米その他の産物を江戸に取り寄せ、一代に巨萬の財産をつくりました。

德川光圀

光圀の剛膽

闇夜に生首を引きずつて

德川光圀は水戸の藩主頼房の子で、家康の孫、家光の従兄弟にあたります。子供の時から何處となく變つたところがあつて、おとなしくて而もしつかりしてゐました。父の頼房がまだ世繼を定めてゐなかつた時、將軍家光からの命令で中山備前守が水戸へ来て、光圀のしつかりしてゐるのを見て、そのことを報告したので、遂に世繼と定まりました。その時光圀は六歳でした。

七歳の時父と江戸に居ましたが、或日櫻の馬場で罪人の首を斬るのを見に行きました。父は光圀の勇氣を試さうと思つて、夜になつて「あの首を持つて來い」と命

じました。櫻の馬場はそこから四百米ほど離れた所でしたが、樹が繁つて深山幽谷のやうで、道は小さく小川なども流れてゐて、晝でも女や子供は淋しがる程の處

でしたので、女中達は恐れおのゝいてどうなることかと思つてゐましたが、光圀は平氣な顔で、「はい」と云つてすぐ立つて行きました。

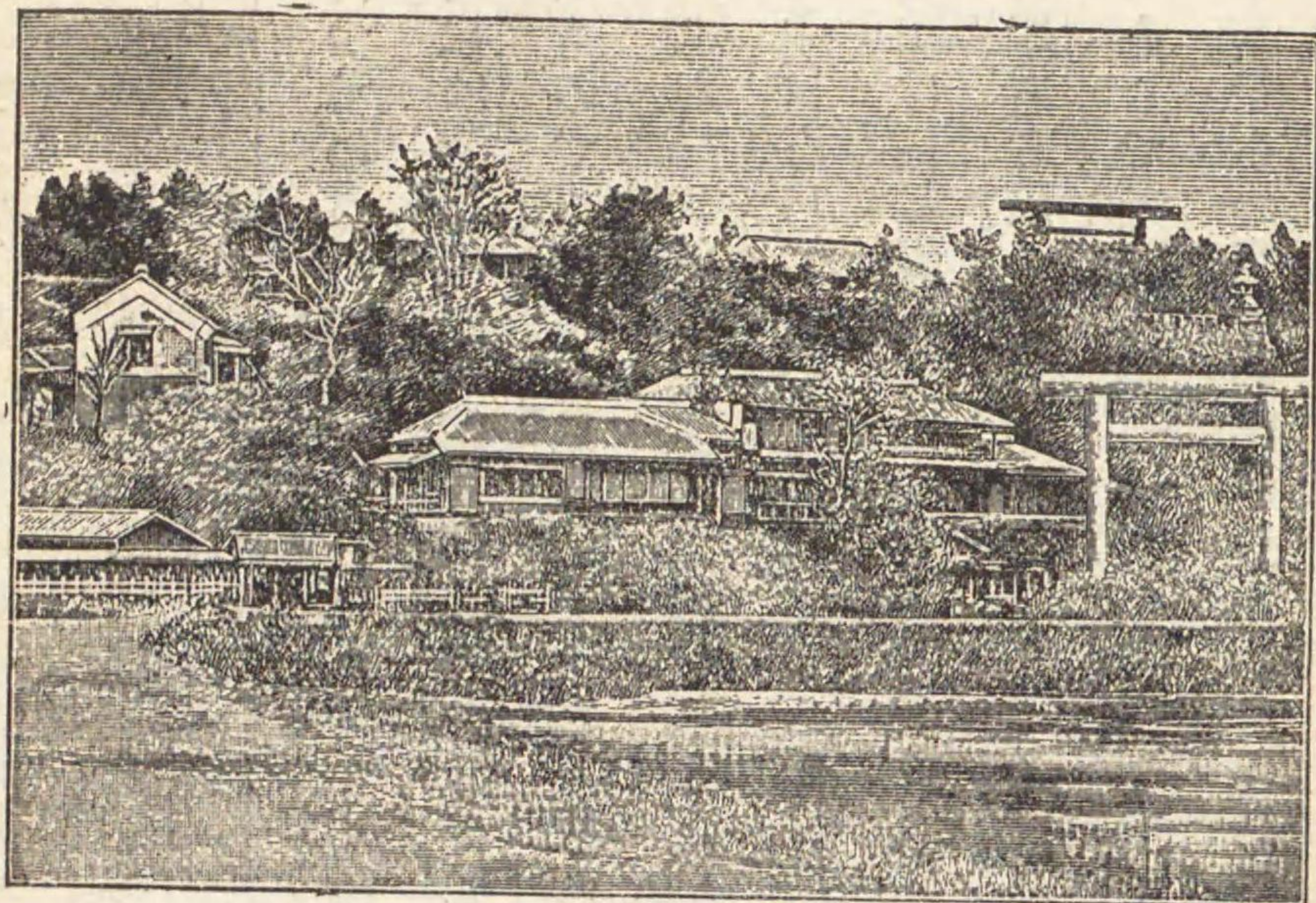
眞つ暗闇の夜でしたが、光圀は手さぐりに首をさがしあて、抱へて見ましたが、中々重いので頭の髪を解いて曳きずりながら、途中二三度も休んでたうとう歸つて來ました。一同はその剛膽に驚き入り、父は心から喜んだといふこと



德川光圀

です。

弓もよく引き、鐵砲も上手であり、馬に乗ることも中々上手でした。又水泳ぎも達者で、十二歳の時父と共に隅田川を泳ぎ渡りました。而も又一方には學問が好き



光圀の別邸

光圀が書物を集め、多くの學者を招いて大日本史の編纂をした所です。今の東京小石川區にあります。そこに光圀の江戸の別邸があつたのです。

その頃日本には古い歴史の書物はありましたが、太古からその當時までのことを全部書いたものはまだありませんでした。光圀はこれを残念なことに思ひました。「われわれの先祖は、立派な歴史をわれわれに残して呉れてゐるのに、それが世間の人たちによくわかつてゐない様では、人々の考を正しくし、行ひを立派にすることは出来ない」といふので、多くの學者を迎へてその編纂に着手しました。それは光圀が三十歳

で、漢學ばかりでなく日本の古い書物なども澤山読みました。後に權中納言になりましたが、中納言のことを支那では黃門と云ひますので、光圀のことを水戸黃門と世間では云ふ様になりました。

光圀は十八歳の時史記といふ書物を読んで、伯夷と叔齊との兄弟が互に家督を譲り合つたといふことを知つて、自分が兄をさしおいて世繼となつたのを心苦しく思ひました。併しこれも將軍の命令で如何ともすることが出来ませんでした。自分のあとは必ず兄の子に譲らうと決心し、後にその通りにしました。又自分がそらいふ考を起すやうになつたのは、全く支那の歴史を讀んだおかげだと思つて「一人の心を導くには歴史の書物が一番よい」と考へ、立派な日本の歴史の書物を作らうと思ひつきました。かくして有名な大日本史は出来ることになつたのです。

古今無比の大事業

出来上りは二百五十年目

の時でした。

歴史を編纂するについては、勿論多くの書物を参考にしなければなりません。光圀は若い時から随分書物を集めました。貴い人でも賤しい者でも、珍しい書物を持つてゐると聞けば熱心に懇望して譲り受け、或は澤山なお金を出して買ひ求め、時には遠方の國へ態々使をやつたりしました。そして半紙一枚に書いた反古のやうなものでも、よく見分けて大切なものは必ず保存して置きました。

これ等の書物を置くために江戸の別邸に彰考館を建てました。つまり今の圖書館です。そして誰でも希望するものには少しも惜まらずに讀ませてゐました。又學者としては儒學者は勿論のこと、神道者・歌學者・有職者・天文家など、あらゆる種類の學者を雇つて、随分大がかりな編纂をはじめたのです。

そこで光圀は先づ大體の計畫を立て、それらの學者に分擔させて書かせたのですが、その學者の書いたものを自分で一々讀んで見て訂正の意見を示したり、自分で筆を加へて直したりしました。又學者共の間に議論があつて、どちらとも決定し

ない様な時にも、光圀自身が判断して何れかに定めたりしました。又書いてある事柄が世道人心を害するやうなことでであると、「たとひ事實であつても、こんなことは削つた方がよい」と云つて除いたり、「これはこういう文字を使つた方が穩當だ」などと云つて、一字一句の末までも心をこめて編纂したのです。

大日本史は全部で四百三卷であります。これは光圀の一代には出來上りませんでした。それで代々の水戸侯がその業をつぎ、學者も亦入り代り立ち代り何百人といふ人が關係して、いよ／＼全部が活版になつて朝廷への献上が終つたのは明治三十九年で、光圀の着手した時からざつと二百五十年たつたことになりました。その間に費された費用などは、一寸計算も出來ないほどでせう。

光圀の勤王

先づ皇居に向つて禮拜

大日本史の完成には二百五十年を要しましたが、その基礎を作つたのは光圀であ

り、光圀の薨ずる迄には帝王本紀から群臣列傳までが大部分出来上りました。そしてこれまで明瞭でなかつたことを明かにしたことも澤山ある中に、吉野の朝廷を正統としたことなどは殊に重要なことであります。若しこの時の京都の朝廷を正しとすれば、足利尊氏が忠臣で楠木正成は逆賊といふことになりすし、兩方の朝廷をどちらとも正しいとすれば、日本にお二人の天皇があつたことになります。實際その頃まではこの區別がはつきりして居なかつたので、楠木正成を朝敵などと云つた時代もあるのです。それを明かにして吉野朝を正しいと斷じたのは、全く光圀の功績と云はねばなりません。

正成の戦死した湊川のあたりも、その頃は淋しい片田舎で、さゝやかな墓が苔に埋もれてゐました。光圀はこれを非常に残念なことに思ひ、家來の佐々木三郎を遣はして墓を修復させ、又自ら「嗚呼忠臣楠子之墓」と書いてこれを石碑に刻ませ、その戦死した場所に建てさせました。この碑は今もそのまま保存されてゐます。(本書第五卷七四頁参照)

光圀が勤王の心の篤かつたことは、この外にも色々の實例があるので明かであります。光圀はその頃の一般人民が、將軍家を尊ぶことを知つて皇室の尊嚴を忘れ勝ちなのを大に歎き、常に皇室と將軍家との嚴然たる區別を明かにし、大義名分を正すことに心を砕きました。

年々勅使が江戸に下られますと、御三家(尾張・紀伊・水戸)へも御出でになりましたが、その時勅使の御宿へは使者を遣はして御禮を申し上げることになつてゐました。ところが、光圀はそれを失禮なことと考へて、自身で御禮言上に行つたといふことです。親王様などから御見舞を賜はつた時なども同様でした。又左様な方からの御手紙などが届いた時には、必ず先づ丁寧な戴いてからでなくては開封しませんでした。

毎年正月の元日には、光圀は禮服を着用して早朝先づ京都の方に向つて禮拜をしました。そして常々家來のものに「將軍家はわが家の本家であるが、わが主君と云へば、天皇様の外には無い。主君と本家とは別であるから、必ず取り違へぬやう

にせよ」と戒めました。

將軍綱吉が江戸の湯島に聖堂を建て、諸大名から書物を献上させた時にも、他の大名は概ね支那の書物を差上げましたが、ひとり光圀は古事記・日本書紀などの様なわが國の書物ばかりを差出しました。その頃學問と云へば支那の學問ばかりを重んじてゐたのを、光圀は頗る不満足に思つてゐました。尊いものは支那ではなくて日本であることを堅く信じてゐたからであります。

西山の御隠居

學問の話で夜を更かす

光圀は家を譲つてから西山に隠居しました。而もその住居は極めて小規模の粗末なもので、松の柱、茅の軒端、竹を編んだ扉などほんとに田舎の百姓家のやうでした。召し使ひの男女も少く、それも多くは老年や病身で江戸の奉公も成りかねる様なものばかりを使ひました。

毎日四五人の學者が代々来て、詩歌や學問の話をしたり、大日本史のことで相談をしたりしました。人の來ない時は靜かに書物を讀んだり、大日本史の原稿に筆を加へたりしました。

客室は二室になつてゐましたが、その中間の敷居をとりはづして一間のやうにしてゐました。訪問者が次の間に來て話す時にも、隔てを置かないといふ氣持からです。百姓でも町人でも、誰でも喜んで面會しました。而して他國の人と會ふ時にはたとひ百姓や町人でも必ず袴をつけて面會しました。

話に實が入ると夜の更けるのを忘れることもありましたが、酒は好きでしたが一度も酔ひつづれたことはありません。退屈な時はふらりと一人で出掛けますが、たゞ田舎のいゝお爺さんといつた風で、他國の人はこれが光圀だとは決して氣付きませんでした。

子供が大そう好きで、家來どもの子供等を集めては一しよに遊んだりしました。どんなにいたづらをしてでも決して叱ることなく、頭を撫でながら靜かに云つて聞か

せました。菓子など時々わけてやつては、無邪氣に遊ぶのを見て限りなく喜んでゐました。

年をとつても何時までも元氣は衰へませんでした。大日本史の編纂については心血をそそぎ、非常な熱心を以てあたりました。「何時出来上ることかわからないが、歲月は人を待たないから、わが亡き後にも志をついで、必ず大成を期して呉れよ、出来上つたらわが墓に供へて呉れ」と云つたこともあるそうです。

光圀が水隠梅里といふ變名を使つて、助さん格さんといふ二人の供をつれ、諸國を廻り歩いて政治のよしあしを察し、人民の苦みを救つたといふ話は、随分有名なものでありますが、何處まで本當だかわかりません。北條時頼の廻國と同じやうに大部分は作り話のやうです。

併し光圀は少しも威張らない人で、たゞ一人でぶらりと出かけることが好きでしたから、若い時にもたゞ一人市中に出かけて、町人共の喧嘩に加勢したことさへありました。力も強く武藝にも達してゐましたが、家を繼いでから後は輕はづみせぬ

様に、餘程自重してゐました。そして世間から「大慈大悲の英雄」と云はれてゐました。

將軍に對しては後見役のやうに幅をきかせ、俗に副將軍と云はれたほどですが、皇室の尊嚴を唱へたために「皇室を尊べば幕府の威光は下る」と云つて、幕府の人たちから非常に嫌はれ、そのため早く隠居しなければならなかつたのだといふことです。

大石良雄

生類憐みの令

馬鹿げ切った命令

五代將軍綱吉は、はじめの間は忠孝を勵ましおごりを戒め、諸大名を制して中々よい政治をしましたが、大老の堀田正俊が部下のものに刺されて倒れてからは、大老を置かないで自ら凡ての政治を指圖し、次第に奢侈に流れ迷信にふけり、様々のわるい政治を行ふやうになりました。中でも犬を大切にしたりなどは、全く氣違ひじみたことでした。

綱吉には男の子が一人ありましたが、五つの時に死んでから、その後は子供が生まれませんので、世繼が無いのを非常に心配し、何とかして子供がほしいとしきりに考へてゐました。そこへ隆光といふお氣に入りの坊さんがあつて、「將軍にお子さまのゐられないのは、過去に殺生をせられた報いですから、これから堅く殺生をおつゝしみなさるがよろしい。殊に將軍は、成年のお生れですから、別して犬を大切にせられましたならば、屹度お子様か御出來になるに違ひありません」と申し上げました。

そこで前にも後にも例の無い「生類憐みの令」といふ奇妙な法律が出来ることになりました。尤もはじめの程は將軍外出の時に犬や猫を繋ぐことになつてゐたのをやめさせるとか、將軍家のお臺所で鳥や魚の料理をしてゐたのをやめるとか、極めて穩かなことでしたが、後には次第に嚴重になつて、遂には犬の戸籍を作つて各自の飼犬の毛色や年齢を書きつけて奉行所へ差出させ、主人の無い犬はその町村で飼はせることとし、次で一般に鳥や魚を飼ふことを禁じ、犬や猫に藝を教へて見世物にすることを禁じ、「飼つてゐる犬や猫が病氣になると、死なない内に捨てるものがあるそうだが、右のやうな不届なことをするものがあつたら、爾今嚴重に處罰

する」といふ達しがあつたりしました。

町中にて生きたるぬもり、又は黒焼に致し商賣仕り候由相聞え候、向後堅く無用になすべく候、若し相そむき商賣仕り候者は、御捕へなされ、屹度曲事に仰せらるべく候。

といふ、ぬもりの黒焼までも禁じた布令が出ました。實に馬鹿げ切つた話ではありませんか。

小鳥をとつても鳥流し

生類を憐み人間を虐待

生き者を可愛がるといふことはもとよりよい事に違ひありません。近頃でも動物愛護週間などと云つて、動物を愛するやうにと色々心配をせられてゐますが、それは無駄なことに動物をいぢめてはいけないといふのです。人間のためになることなら、動物を犠牲にすることも己むを得ませんし、人間に害をする動物ならば捕へて

殺すのも當り前とされてゐます。

ところが綱吉の時の命令は、そういふ區別は一切なくて、魚を捕つて食ふことも禁ぜられ、天井でいたづらばかりする鼠さへも殺すことは止められました。そしてこれを犯したものは重い處罰を受けて、鳥流しになつたり、死刑になつたりしました。動物を愛するため人間を虐待し人間を殺すのですから、これ位變なことは無いでせう。今二つ三つの例をあげて見ますと、

- 一、矢野某といふ臺所頭は、井戸の中へ猫が落ちて死んだのを援けなかつたといふので、八丈島へ流された。
- 一、小石川御殿番保泉某は、その下男が犬を斬つたといふので、下男は八丈島に流し、主人は俸祿を取り上げられた。
- 一、秋田季久の家來が吹矢で燕を射たといふので遠國へ流された。
- 一、小細工奉行の大類次郎兵衛と其子・手代等が小石を鳩に投げつけたといふので一同追放に處せられた。
- 一、觀世新九郎は羽田沖で釣をしたといふので、船頭もろ共に鳥流し。
- 一、山田伊右衛門は門外に捨てゝあつた犬を拾はなかつたので追放せられた。
- 一、坂井某は犬の噛み合ひをほつて置いたので閉門を申付けられた。

一、橋本某は犬に傷をつけて切腹を命ぜられた。
一、本郷町人某は酔つて犬を傷けたので磔刑になつた。

と云つた風に、數へ立てれば際限もありません。獵師・狩人などの様な殺生を業とするものは一切禁ぜられ、後には人の名にも鳥之助とか犬松とかいふやうに鳥獸の名をとることを禁ぜられました。

こうなると江戸はもとより田舎に至るまで、鳶や烏が夥しく繁殖し、猪・鹿・狼の類も年々増加して田畑を荒し人を傷け、一般人民の難儀は非常なものでしたが、それでも幕府はこれを捕へることを許しません。「若し田畑を荒すやうならば、鳴物で追ひ拂へ、それでも逃げなければ空砲をうて」といふ命令を下しました。又鳥などを生けどりにして、八丈島や三宅島へ放たしめたこともありました。

二十萬頭の犬小屋

犬を飼ふ奉行も出来る

凡ての鳥獸魚介、悉く憐みを加へた中にも、犬は又格別の優遇を受けました。犬を粗末にするものは無いかと、常に江戸市中を視察に廻らせ、狂犬と雖も繋いで置かぬと處罰されました。又たとひ主人の無い犬と雖も、これを打擲するものは捕へ出させ、若し犬に傷を負はせたものがあると、本人は勿論のこと、その町内のも一同の責任として處罰され、犬がお互に喧嘩をして傷を負ふた時など、直ちに獸醫の處に連れて行つて手当をさせ、或は「犬が喧嘩をするのを見たら、近所の者共は早速出て来て、雙方に傷をつけず、水をさして引き分けてやれ」といふ命令までも出ました。何と馬鹿げては居ませんか。だから世間では綱吉のことを犬公方と云つてゐました。

こうなると犬は人間以上に威張るやうになり、江戸の市中をわがもの顔に横行し吠へ付き喰ひ付くものもありましたが、町人も武士も恐れ入つて指一本さすものもありません。そして主人の無い野良犬が非常に多くなりましたので、幕府では遂にこれを收容して官費で飼ふことにしました。



元禄時代の舞踊

武士が女と交つてこんなに踊つてゐたのですから、いかに風俗が亂れ、武士が惰弱になつてゐたかどわかります。これは菱川師宣のかいた繪です。

お米を貰つてゐる武士どもは俄かに収入がよくなつたので、風俗は次第に派手になり、色々の遊戯や娯樂が盛になつて、最早家康時代のやうな、武張つた風はなくなつてしまひました。

大阪夏の陣があつてからもう七十年、世はほんとに太平に治まりましたが、戦争に經驗のあるものは概ね死んでしまつて、武士の氣風も惰弱に流れ、武藝の稽古はやめにして、芝居を見に行くことが、流行るといふ世の中になりました。この時、突如として世の人々の夢を醒させたのは、實に赤穂義士の讎討ちであります。雪の夜に花と散つたる四十七士、これこそは國民の心の底に暫く眠つて居た日本精神を、愕然と

元禄八年のことです。江戸の町はづれに二萬五千坪（八百三十アール）の地を定めて犬小屋を建てましたが、犬は忽ち十萬頭も集りましたので、更に中野に十六萬坪（五千三百アール）の土地をとつて犬小屋を建て、これにも十萬頭を收容し、十疋について白米五リットル半、味噌千九百グラム、干鰯二リットルを一日に喰はせ、犬奉行以下何百人といふ役人をつけたのですから驚いたものです。

こんなことが二十四年間もつゞいて、何十萬人といふ人が罰せられて、人民の難儀はほんとは一通りでありませんでした。それにも拘らず綱吉は、死ぬる時にも次の將軍家宣に遺言して「百年の後までもこのまゝ續けて行け、それが何より孝行だと思へ」と云ひました。併し家宣はさすがにその遺言には従はないで、すぐに禁令を解き、牢屋に入れられて居た者を皆出しましたので、人民は始めてほつとしたのであります。

綱吉はこんなにして人民を苦しめつゝ、一方には驕を極めましたので、人民も亦一般に奢侈に流れるやうになりました。その上米の値段が非常に高くなり、俸給に

して覺ませたのであります。

赤穂義士

これがほんとの日本精神

赤穂義士と云へば、皆さんも何度かお話を聞きになつたでせう。凡そ日本の歴史の中でも、これほど有名になつた話、これほど一般の人たちに感心されてゐる話は数多くありますまい。古くは室鳩巢といふ學者が「義人録」といふ書物を書き、竹田出雲といふ人によつて「假名手本忠臣藏」といふ芝居が出来て、それが東京第一の帝國劇場をはじめとして、片田舎の素人芝居にまで演ぜられ、どんなに評判のわるい旅役者でも、忠臣藏を出すと云へば忽ち見物人が充滿するといふのが、昭和の今日に至つても變りません。講談師だの浪花節語りなどまでが、武士道鼓吹と銘打つて、義士銘々傳を語るといふ有様で、義士のことを書いた書物と云つたら、何百種類あることか、馬に積んだら七駄半、車に積んだらエンヤラヤといふ程もあるでせう。

ことが澤山あり、學者の書いた書物にさへ、間違つたことが少くありません。忠臣



忠臣藏

假名手本忠臣藏といふ芝居の十一段目、義士討ち入りの模様をかいたものです。正面に立つのが大星由良之助、即ち大石良雄のことです。

併しそれほど有名になつた爲めに、色々と間違つた説も傳へられてゐます。浪花節などで語る内容には勿論あてにならない

藏といふお芝居の如きは、勿論實際の通りをそのまま演ずることは禁ぜられてゐましたので、時代も人の名前もすつかりかへて、事實もよほど違へてあります。吉良義央が高師直、浅野長矩が鹽冶高貞となつて時代が吉野朝の頃となり、大石内藏助が大星由良之助などと似寄つた變名になつてゐます。

又この四十七士のやつたことは、普通に讐討ちと云つてゐますけれども、曾我兄弟の讐討などは餘程事情が違つて居ります。主人の浅野長矩は、吉良義央のためにひどくいぢめられましたけれど、義央のために殺されたわけではありません。却つて長矩が義央を殺さうと思つて失敗したのです。勿論長矩の身になつて見れば、たとひ後の事はどうならうとも、殺さねばならぬやうな立場になつたのは云ふ迄もありません。ところがそれが失敗に終つたので、家來の身分として四十七人のものは「主人はさぞ無念であつたであらう。自分達がその志をついで、必ず目的を達して上げなくてはならぬ」と考へたわけなので、主人の志をついだといふことになるのです。

殺されたから讐を討つとか、やられたから仕かへしをすとかいふことは、昔は兎に角、現在ではよくないこととされてゐます。併し赤穂義士のはそれとはちがつて、主人の志をつぐといふのですから、その精神は今日でも吾々の持たねばならぬ精神です。われ／＼は常に親の志をつぎ、主人の志をつぎ、天皇陛下の大御心に叶ふやうにしなければなりません。それが赤穂義士の精神であり、又日本人の心の持つてゐる日本精神であります。

爺の深い慾

意地わるく間違つかせる

時は元禄十四年三月、例年の通りに勅使が江戸にお下りになりました。そこで幕府ではその勅使を接待する係を、浅野内匠頭長矩と、伊達左京亮宗春との兩人に命じました。そして儀式上のことについては、凡て吉良上野介義央に相談するやうにとのことでした。この義央は高家衆と云つて、常々幕府に於ける儀式に關すること

を司つてゐる役人の一人です。

ところが義央は随分慾の深い男でした。毎年接待係の大名から、色々澤山の贈物をしますので、その贈物が多ければ儀式のことを詳しく教へてやり、若し贈物が少いと親切に教へないで間誤つかせるといふ、ほんとに意地のわるい爺さんでした。

そこで伊達宗春の方からは、色々贈物をしましたが、浅野長矩といふ人は正義を尙ぶ正直一徹の人でしたから、ほんの一通りの挨拶はしましたが、あまり澤山の賄賂を贈るといふやうなことはしませんでした。

すると義央は大に怒つたのです。「三萬石の伊達よりも、五萬三千石の浅野の方が贈物が少いとは怪しからぬ。よし、それならば大にいぢめてやらう」と、これから様々の方法で長矩を困らせました。時刻が豫定よりも早くなつたといふやうな時にも、長矩には其を知らさないで置いて、早く來ないから不都合だと云つたり、服装など違つたことを云ひ付けて置いて、そんな指圖をした覺えは無いと云つたり、あちらでもこちらでも間誤つかせられて、満足にその役目を果すことが出來ません

でした。

殿中へ上つて見れば、自分一人服装が違つてゐるのです。最早邸に下つて着換へて來る時間ありません。家來を呼んで取りに歸らせようと思つたと、氣のきいた家來が「こんなことがあるかも知れぬ」と心配して、ちやんと別の服装を用意して來てゐたので、すぐに着換へることが出來て、やつと間に合つたといふ様なこともありません。

而も義央からは「何をぐづ／＼してゐるのだ。ぼんやりしないで早くしないか、それ位のことかわからないのか。間拔けた奴だ」などと云つて、大勢の人の前で何度も耻をかゝられました。こうなつては武士の意氣地、ほつて置くわけに行かなくなつたのです。それも自分がほんとに不都合をしたり情けたりしたのならば已むを得ませんが、たゞ贈物が少いためにそんな目に會はされるのだと思ふと、正義の觀念の強い長矩として、どうしてぢつとして居られませう。遂に松の廊下の活劇となつたのであります。

殿中の刃傷

已むに已まれぬ義憤

殿中に於て刀を抜くといふことは、最も不都合なことだとは長矩もよく知つてゐました。そんなことをすれば自分も軽くて切腹になるは勿論、領地は取り上げられ家は断絶となり、家來も残らず流浪の身となるにきまつてゐます。併しそんなことは最早考へてゐる餘裕もありませんでした。「不正不義の義央、この慾深爺のために自分一人か、これ迄もこの後も何人の人たちがいぢめられることか、賄賂によつて人に依姑最負するやうな男を生かして置くといふことは、徳川家のためにも世のためにも決して利益では無い」と、上野憎さの義憤に燃え上つてゐました。

三月十四日の午前十時頃、吉良義央が松の廊下に於て、梶川與惣兵衛と立ち話をしてゐるのを見た長矩は、時は今だと決心して「この間の遺恨覚えてゐるか」と大喝一聲、太刀を抜いて義央の後から肩先に切りつけました。

驚いた義央は「何を」と後に振り向きましたが、再び切り下す太刀に顔を切れ、梶川の方へ逃げようとして、又も後から二太刀ほど切られてどつとその場へ倒れました。この時梶川は驚いて長矩の後に廻り、「お待ちなされ」と抱きついて自慢の剛力で、後ろへ引き戻しましたので、長矩もそれ以上どうすることも出来ず、「憎い上野、かねての遺恨己み難く、殿中で甚だ恐れ入つたことながら、最早ゆるし難いと思つて打ち果したのだ」と、繰り返し〜大聲で語りました。

この物音にびつくりして馳せ集つた人々は、一方では、長矩を取り圍んで「もうよろしい、よくわかりました。あまり大聲をなさつては却つてよくありません」と取りしづめつゝ、柳の間の方へ伴つて行き、一方は倒れて氣を失つてゐる義央を介抱して、醫者の居る室に抱へて行つて手當をしましたが、傷は割合に淺く、且急所を外れてゐたので、生命には別條がなかつたのであります。

長矩は腰の大小をとり上げられ、直ちに田村右京大夫の邸にお預けとなり、その晩幕府から使者が來て、直ちに切腹を申し付けられ、自刃して果てました。隨分急

いで處分されたものですが、長矩は義央を打ち果したものと信じてゐました。若し義央が死ななかつたといふことがわかつたら、長矩も残念で死んでも死に切れなかつたことでせうが、幕府の役人も長矩に同情して、義央の様子は一切知らせなかつたのであります。

討ち入りの決心

あらゆる苦心を重ねて準備

幕府では長矩に切腹を申付けると同時に、その領地を取り上げることに決定し、直ちに使を赤穂に遣はして城を受取らせることにしました。一方浅野家の家臣からも、急使を赤穂にやりましたから、家老の大石良雄は江戸に於ける事變の様子は已に詳しく知つてゐました。そこで藩中の同志のものと相談して、一同お城の門前で切腹して、主人の後を追ふことに決心して居ましたが、御本家である廣島の浅野家の方から、「そんなことをするのは幕府へ對しても穩かでないから、すなほに城を明

け渡したがよからう」といふ注意がありましたので、良雄等もこれに従つて、幕府からの使が來るとすぐに城を渡し、家臣一同は皆家財をまとめて、思ひ／＼に散り／＼になりました。

そこで良雄等は、先づ義央の罪をたゞさうとしました。主人は切腹になつても義央には何の咎もないといふのは片手落ですから、そのことを幕府に願ひ出て、相當の處罰をして貰はうと思つたのですが、それは遂に出来ませんでした。

次で良雄等は主人の家の斷絶するのを残念に思ひ、長矩の弟の大學を取り立て、たとひ昔の五萬三千石は貰へないにしても、せめて一萬石でもと思つて幕府へ願ひ出たのですが、一向に取り上げて呉れませんで、翌年の七月になつて大學は廣島の浅野家へ引き取るやうにといふ命令が下り、浅野家復興といふことは遂に絶望となりました。

茲に於て良雄等は深く決心しました。主人の家は永久に斷絶し、義央は何の處分も受けないで相變らず威張り散らしてゐるといふことになつては、切腹した主人も

到底地下に安らげく眠ることは出来まいと思つて、「最早この上は他に手段は無。主人の志をついで義央を打ちとる迄だ」と、ひそかに同志のものと連絡をとつて行き届いた準備をとゝのへることになりました。

良雄は京都の東の山科に居ましたが、吉良家から間諜が入り込んで来てゐるのでその目をくらすために、度々酒を飲んで遊んだりしました。そして十月には江戸に入つて、敵の様子を探つたのですが、義央は茶の湯が好きで、度々友達の處へ行つたりするので邸に居る日が定まつてゐません。そこで同志の大高源吾を變名させて、義央のお茶の先生の山田宗倫の門人にならせて、そこで義央が十一月二十三日にその邸で茶會を催すことを知つたので、その晩を討ち入りと決めましたが、そのうちに茶會が延期になつたので討入りも亦中止にしました。

それから十二月六日がよいといふので、その手筈をきめてゐましたが、それも亦中止にしていよゝ十四日に、吉良邸に茶會があつたその晩に決行することになつたのです。それ迄には邸内の様子を調べるためにも色々と苦心し、うどん屋になつ

て吉良邸へ入り込んだとか、その外色々の面白い話が傳はつてゐますが、何處までが事實だかよくわかりません。併し兎も角も四十七人のものが、あらゆる苦心を重ねて準備を進めたことは、勿論間違のないことであります。

本望成就

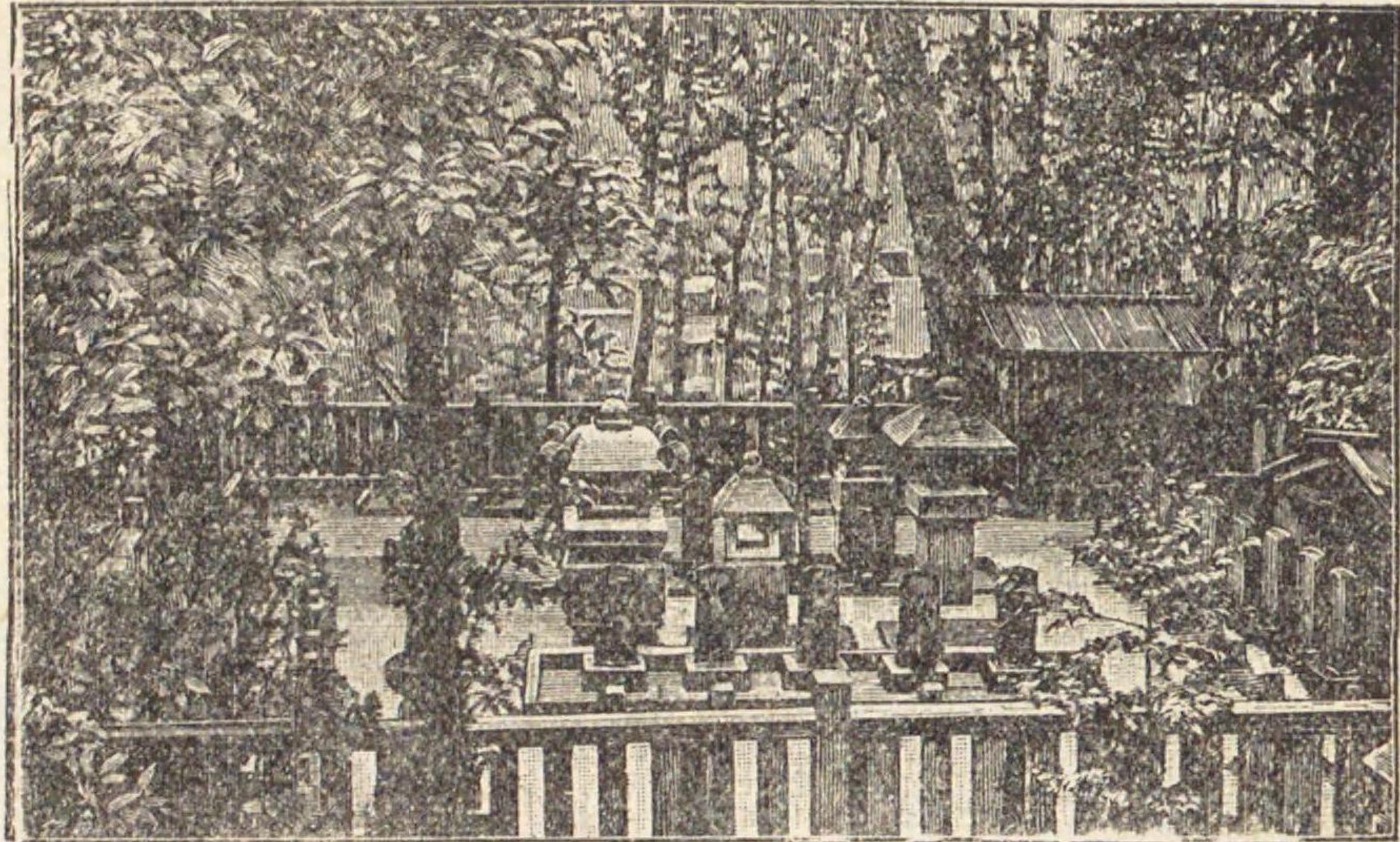
炭部屋の中で突き伏せる

元禄十五年十二月十四日の夜、大石良雄以下四十七人の義士たちは、本所林町の堀部安兵衛、杉野十平次の宅に集つて支度をとゝのへ、午前三時頃松坂町の吉良上野介の屋敷へ押し寄せ、人數を二手にわけて、表門からは梯子をかけて屋根から飛び込み、裏門はかけやで門を打ち破つて押し入りました。

前日から降りしきつた雪は、夜に入つてしつとりと積つて、見渡す限りの銀世界、それに、夜明け前の満月が照りそふて、物凄くほどの静けさ、吉良邸では茶會があつて、みんな疲れては居ますし、寒さにおびえて蒲團の中にもぐり込んで居ました

ので、四十七人が邸内に押し入つたことも、殆ど知らずに寝込んでゐました。義士の方では、かねて邸内の様子は委しい圖面によつて研究してゐましたから、どこにどんな建物があつて、主人の義央が何處に寝てゐるかは大體見當がついてゐました。そこで先づ表玄關と隠居の玄關との枚羅戸を打ち破り、物音に驚いて飛び出した者は片つばしから突き伏せ斬りすて、直ちに義央の寢室に入つて見ましたが、その時義央は已にそこを逃げ出して、床は藻抜けの殻になつてゐました。誰かゞ蒲團に手をさし入れて見ますと、まだ暖かみがありました。「今出たばかりだ、遠くは行くまい。さア捜し出せ」と良雄の命令に、一同は手分けをして八方に散り、戸を打ち破り障子襖を蹴散らして、一つ一つの室をくまなく捜しました。その間に玄關番のものや義央の近習の士や、又は臺所の宿直のものなどが太刀を抜き槍を上げて手向ひしましたが、それ等は悉く討ち果し斬りすて、臺所その他の室々に下女や下男のやうなものも澤山居ましたが、それ等は大抵恐れ戦いて、室の隅に小さくなつて居ますので、そのまゝに見逃がして置きました。

室外にあつては大聲を上げて「淺野内匠頭の家來四十七人、上野介殿のお首を頂戴に參つた。われと思はん方々は速かに出合ひなされ」と呼びましたが、長屋に居る武士どもほんの二三人飛び出したさりで、それを斬り捨てるともう出て來るものはありませんでした。主人が慾深爺さんですから、家來にも命をすて、奉公しやうといふものが至つて少かつたものと見えます。「まるで空屋のやうぢやないか」とつぶやきながら、天井から床下、便所の中まで捜しましたが、義央の姿が見えません。一同廣間に集つて相談しましたが、「どうしても居ない筈は無い。夜の明けぬ間にもう一度捜さう」と又八方に散りました。ところが臺所の隅に炭部屋らしいところがあつて、その中をまだ見ないからと、戸を打ち破りますと、忽ち中から皿だの鉢だの炭などを投げつけます。次で二人ばかり切つて出て、勇敢に働きましたが、これも遂に斬り斃しました。最後に一人残つてゐるらしいので、間十次郎が一槍突き、武林唯七が斬り込んで一刀に斃しました。そして死骸を引き出して見ますと、年齢と云ひ服装と云ひ、ど



赤穂義士の墓

東京市芝区の泉岳寺にあります。四十七士の墓がずらりと並んでゐます。参詣者が非常に多いので、線香の煙は一日も絶えたことが無いそうです。

亡君の御志をつぎ、只今御本望をとげ参らせました」と報告しました。
幕府では四十六人を四家に預けやがて一同に切腹を申し付けました。寺坂は報告をすませて再び江戸に歸り、自首して出ましたが、これは足輕と云つて今で云へば二等兵のやうな身分の低いものですから、無罪として放免せられました。當時幕府では、四十七士に深く同情し、特命をもつて罪を宥さうかとの議論もありましたが、法

うも義央らしいので、顔に古疵があるかと思つて見ましたが、新しい傷のためにはつきりわかりません。背はどうだらうと見ますと、慥かに古疵が見えましたので、「これだ、相違ない」と首を落して、かねて相圖の笛を吹いて一同玄關に集り、かねて捕へて置いた表門の番人三人に見せますと、全く義央に違ひないと證明しましたから、「もうこれでよい、他の者には用事は無いから」と、四十七人を名簿によつて點呼して、悠々と引き上げて泉岳寺に向ひました。それが夜の引き明けでした。

その後の義士

二百餘年の後までも

義士の中の寺坂吉右衛門は、大石の命令ですぐにこのことを淺野長矩の未亡人の處に報告し、更に廣島の淺野侯の處に居る長矩の弟大學の處へ通知するため旅路に上りました。又吉田・富森の二人は大目付、即ち今の警察に届け出で、残りの四十四人は泉岳寺に赴き、亡君長矩の墓前に義央の首を供へて「良雄等四十七人、

律は枉げるわけに行かないといふので、遂に處罰したわけです。併し幕府は後に長矩の弟大學を召しかへて五百石を與へ、一方義央の嗣子左兵衛に對しては、都合であるからとて領地を取上げ、その家を斷絶させました。幕府が已にそういう態度ですから、一般の人たちが義士に同情し、その忠勇を讚嘆したのは云ふ迄もありません。

さて浅野長矩は僅か五萬三千石の小大名です。家來もたつた三百二十二人しか居ませんでしたが、その中から四十七人の義士が出たといふことは、到底普通のことではありません。これには随分深いわけがある筈です。

長矩の祖父の長直は一代の名君で、始めて赤穂城を築いた人ですが、この時召し抱へた山鹿素行は、軍學の達人であり、文學にも通じ、比類稀なる豪傑でありました。大石良雄をはじめとして、堀部・間瀬・小野寺・間などの人々は、皆これを師として深く崇拜し、その薰陶を受けたものでした。それですから、義士の精神は實は山鹿素行の精神であると云つてもよいわけでしょう。

素行は陸奥の生れです。子供の時から學問が好きで、八歳の時には四書・五經・七書・詩文などむづかしい書物を悉く讀み終りました。九歳で林羅山の門に入り十二歳の時には經書の講義をしました。十六歳の時北條氏長について軍學を學び、後に山鹿流といふ兵學を編み出しました。而もその頃日本にある漢文の書物で、讀まないものは一冊も無かつたといふ博識で、その上日本の古い書物を讀み、和歌も亦上手でした。世間の大名たちは、こんなえらい學者を召し抱へたいと思ひましたが、その父が「千石以上でなくては奉公させない」と云ひますので、誰も抱へるものが無く、大名等は親しく素行の家に通つて教へを受けてゐました。それを赤穂の浅野長直が千石を與へて召し抱へたのです。この貧弱な大名が千石の學者を抱へるといふことは全く世間に例の無いことで、人々は目を圓くして驚いたのでした。併しそんなにまでして藩士の教育に力を注いだからこそ、この小藩からこれほどの忠義な武士が出たのです。そしてそれが世人の心を深く感動せしめ、二百三十餘年後の今日に至るまで忠義の手本と仰がれるやうになつたのです。